美しい

ひとりで上達できる

小筆字入門

松本子游◎著

日東書院

W8-CBW-598

■著者紹介■

松本 子游 (まつもと・しゆう)

本名・貞子

大正13年(1924年) 福岡県生まれ。
松本筑峯先生に師事。
東洋書道芸術学会理事。
松本書道会主幹。
東洋書芸展読売賞・審査員。
破体展会員。破体欧米展出品。
中国焦山の「破体碑亭」に建碑。
破体個展2回。

◆著書◆

「実用ペン字の基礎練習」

美しい小筆字入門

松本子游 著

日東書院

はじめに

私たちが手紙や文書を書く時は、ほとんどボールペンかワープロになってしまいました。万年筆やつけペンなどは、懐かしい文具になった感があります。しかしあらたまった気持ちで書く時は、できるなら毛筆の文字にしたいという人が少なくありません。年賀状やのし袋の表書きなどは、まだまだ毛筆が健在です。なかでも人気が高いのはしなやかで優美な小筆文字です。小筆で書いた、美しい感じのよい手紙をもらうと、とてもうれしい気持ちになります。こんな手紙がすらすら書けたらどんなに楽しいことかと、誰もが思います。

手紙は、文字の上手下手よりも、どんな気持ちで書くかが優先します。ですから相手の方と親しくお話をするような気持ちで、丁寧に書くことが大切です。年賀状は、まず、あなたらしいアイディアや感性を生かすことです。似通ったパターンが多い賀状の中にあって、あなたの年賀は一際目立つことでしょう。人柄がしのばれ、懐かしさもひとしおです。のし袋の表書きは、小筆文字の定番中の定番といった感じですが、それだけに一層、心を込めた慎重さ、丁寧さが要求されます。人となりが、そこに現われてくるからです。

この本は、楷書、行書、ひらがな、カタカナの基本的な書き方を中心に漢字かなまじり文の書き方などで構成されています。草書や変体がなは大変魅力のある書体ですが、読むことも書くこともむずかしく、また私たちの日常性からはかけ離れた存在ですので割愛し、誰にでも読み書きできる内容に徹しました。そして短歌や俳句の書き方など、楽しい趣味の分野にまで幅を広げ、範例でその特徴を分かりやすく解説しています。

とかく筆で書く文字は、形の整斉、墨の色、線と太さ、のびやかさ、運筆のリズムなど、結構うるさい面があります。しかし基本的には、誰にでも読める、正確な美しい字であればよいわけです。それは基本の書き方を身につけて、書きなれることで達成できます。とはいっても、その道程はけっして楽ではありません。やる気と怠慢に翻弄される日々が続きます。それを乗り越えてはじめて、独自の魅力ある書き方が生まれるのです。それが個性です。個性豊かな美しい文字が書けるように、この本がお役に立つことを願っています。著　者

もくじ

用具 6
筆／6　硯／7　墨／7　紙／8　その他の用具／8
用具の管理 9
筆／9　硯／9　墨／9
筆の持ち方構え方 10
永字八法 11
文字の点画 12
文字の形 16
楷書の書き方・バランスをとる 22
楷書・点画の接し方 24
行書・楷書との違い 26
行書・文字の変形 27

漢字を構成する部首 30
片仮名 62
平仮名 65
連綿の線 68
漢字仮名まじり文 74
俳句の散らし書き 78
短歌を書く 84
のし袋の表書き 90
年賀状／96　暑中見舞い／99
手紙文・冒頭語／結語 100
時候の挨拶 101
手紙文 104
葉書文 105
宛名書き 106
封筒・表書き／106　封筒・裏書き／107
角封筒（縦）／108　角封筒（横）／109
葉書の宛名書き／110
都道府県名 112
市区町村名 118
芳名帳 120

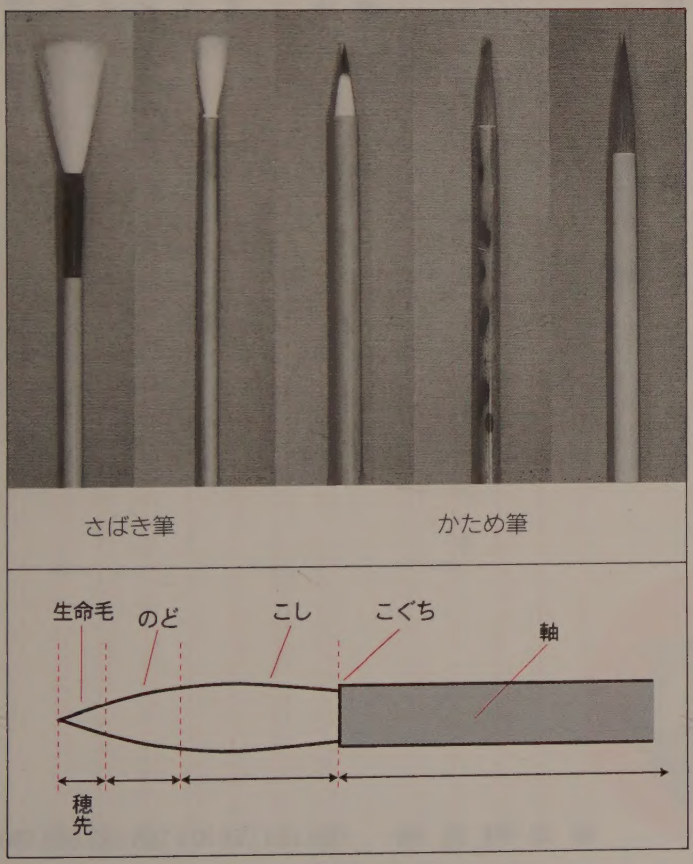
構成　一木　喬

用具

書道で、よく「文房四宝」といいますが、これは文字を書く時に必要な、筆、硯、墨、紙を指す言葉です。直接的に文字の出来栄えを左右する、宝にも等しい重要なものということでしょう。しかし用具に、あまりこだわる必要はありません。お値段もピンからキリまで大変な開きがあります。適当なものを、選ぶようにしましょう。

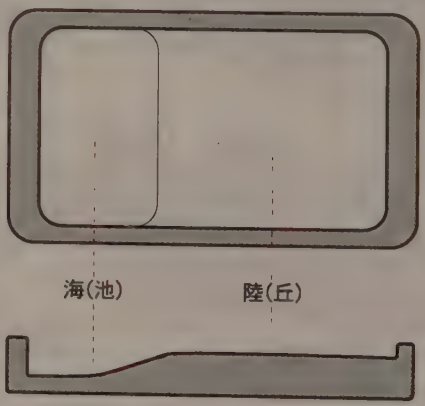
筆

筆は、毛の硬軟や鋒の長さ、形などで、いろいろな種類に分けられます。古い言い伝えでは「かなには柳葉筆がいい」とありますが、やはり細字には、長鋒（柳葉筆）で穂先が揃い、腰のしっかりした筆が適しているように思います。



硯

硯といえば「端溪」が有名ですが、ブランド志向で高価なものを望む必要はありません。唐硯（中国産）には「端溪硯」「歙州硯」「澄泥硯」などがあり、和硯（日本産）では「雨畑石」「玄昌石」「龍溪石」「赤間石」などがよく知られています。



墨

墨にも唐墨（中国製）と和墨（日本製）があります。どちらを選ぶかはその人の好みです。墨には、油を燃やして作る油煙墨と松の木を燃やして作る松煙墨があり、青みをおびた〝青墨〟は、松煙墨です。

紙

紙も日本製は和紙、中国製は唐紙といいます。練習用なら半紙で十分ですが、本格的に書く時は画仙紙か色紙が手頃です。紙には紙肌の粗やにじみの有無など種類もいろいろありますから、実際に使ってみることをおすすめします。

その他の用具

文鎮や水指し、筆巻きなどは、適当なものに替えられます。しかし厚手のラシャやフェルトでできた下敷きは、ぜひ必要です。これがあると、墨の浸透を防ぎ、筆圧を微妙に調整してくれますので、書いた線に深みがでます。

用具の管理

筆

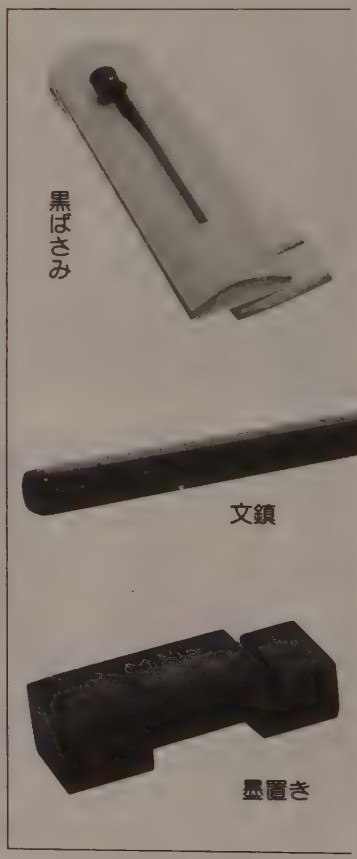
筆には、毛を固めない「捌き筆」とのりで固めた「固め筆」があります。捌き筆は、使った後、必ず全部を下ろして水洗いしましょう。固め筆は、墨のついている部分を水洗いするだけで十分です。水洗いをしておかないと、残った墨が固まって、穂先が割れたりします。

硯

硯を使った後は、水洗いして墨カスを取り除いておくことが大切です。墨カスを残したまま使っていると、硯の肌や筆の穂先を傷めてしまいます。硯を大事にする人は、大根の切り口で墨カスを取っています。硯の丘の鋒鋩（ヤスリ状の小突起）が擦り減って、墨の下りがわるくなった時は、砥石で研ぐと簡単に目（鋒鋩）が立ちます。

墨

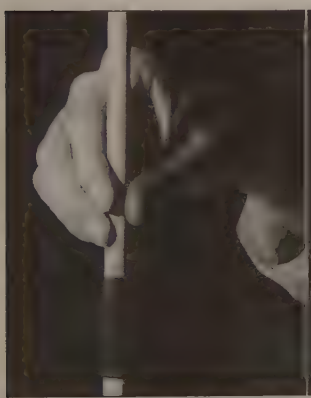
墨を直射日光が当たるところに放置して置くのは禁物です。湿気の多いところも厳禁です。うっかりそんなところに置くと、墨はヒビが入って割れたり、もろくなってボロボロに砕けたりします。磨り終わった墨は、濡れているところを乾いた布で拭き取った後、湿気のないところに保管するようにしましょう。



筆の持ち方 構え方

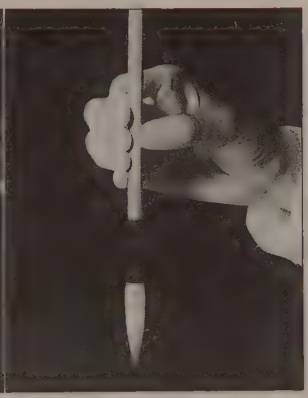
筆は、真っ直ぐに立てて書く(直筆)のが基本です。筆の持ち方は、人差指を筆の前にかけ親指と中指の3本で持つ単鉤法と、人差指と中指を筆の前にかけ親指と薬指の4本で持つ双鉤法があります。

筆を持って書く姿勢に入る時の腕の構えには、筆を持った手の前腕部を机から離す懸腕法、前腕部を机につける提腕法、前腕部を左手の上に乗せる枕腕法があります。



双鉤法　力強い表現向き

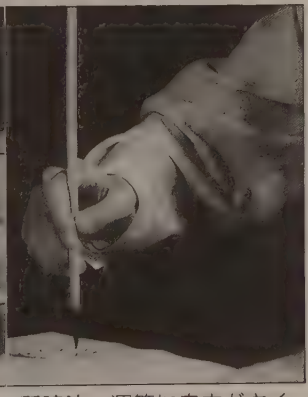
単鉤法　かな、細字向き



直　筆

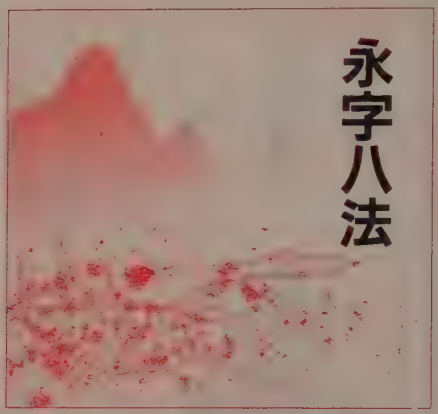
枕腕法　かな、細字向き

提腕法　かな、漢字向き



懸腕法　運筆に自由がきく

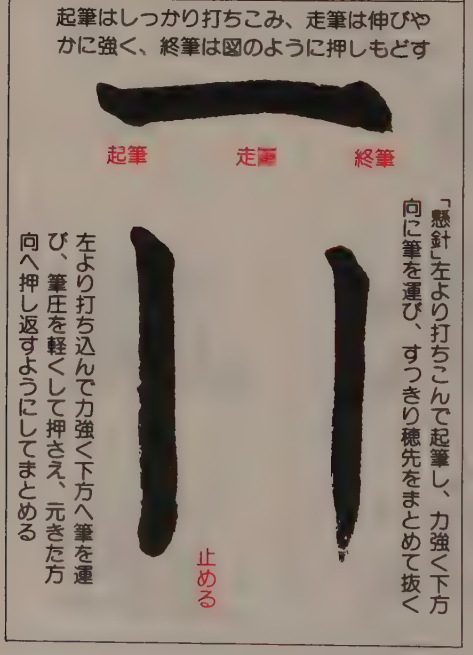
永字八法



「永」という文字には、漢字を構成する基本の点画が、すべて含まれています。

❶側（点）　三折して側立つ
❷勒（横画）　しまりのある筆勢
❸弩（縦画）　弓を強く引く力
❹躍（はね）　弩勢の終筆をおさえて押し出すようにはねる
❺策（右払い）　馬を鞭打つような力と早さ
❻掠（左払い）　長い髪を梳るようにゆったり左に払う
❼啄（短い左払い）　鳥が物をついばむように、強く左に払う
❽磔（右払い）　裂くように強く鈍重な力で引き、最後は勢いよく毟り取るような筆勢で払う

起筆はしっかり打ちこみ、走筆は伸びやかに強く、終筆は図のように押しもどす

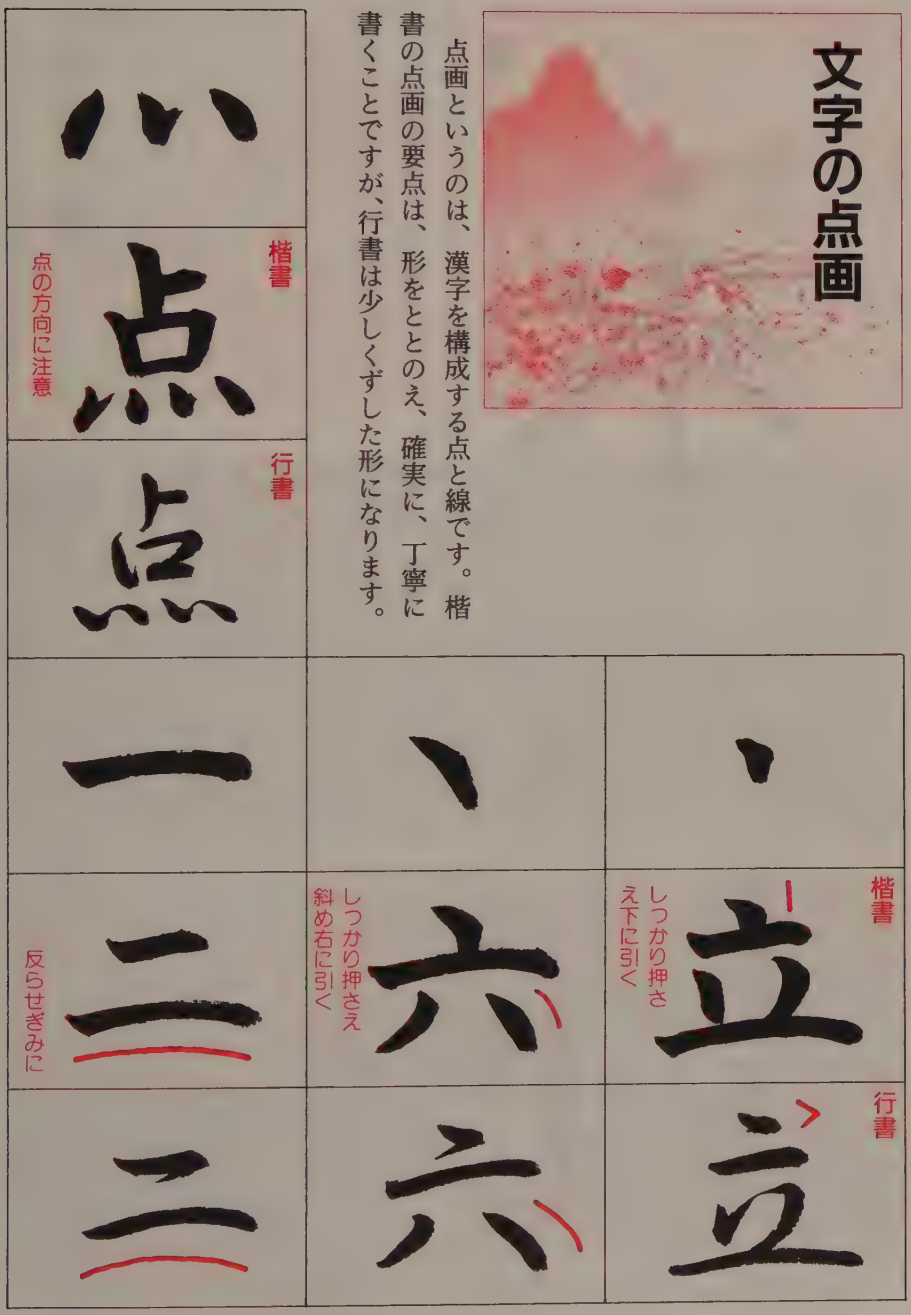


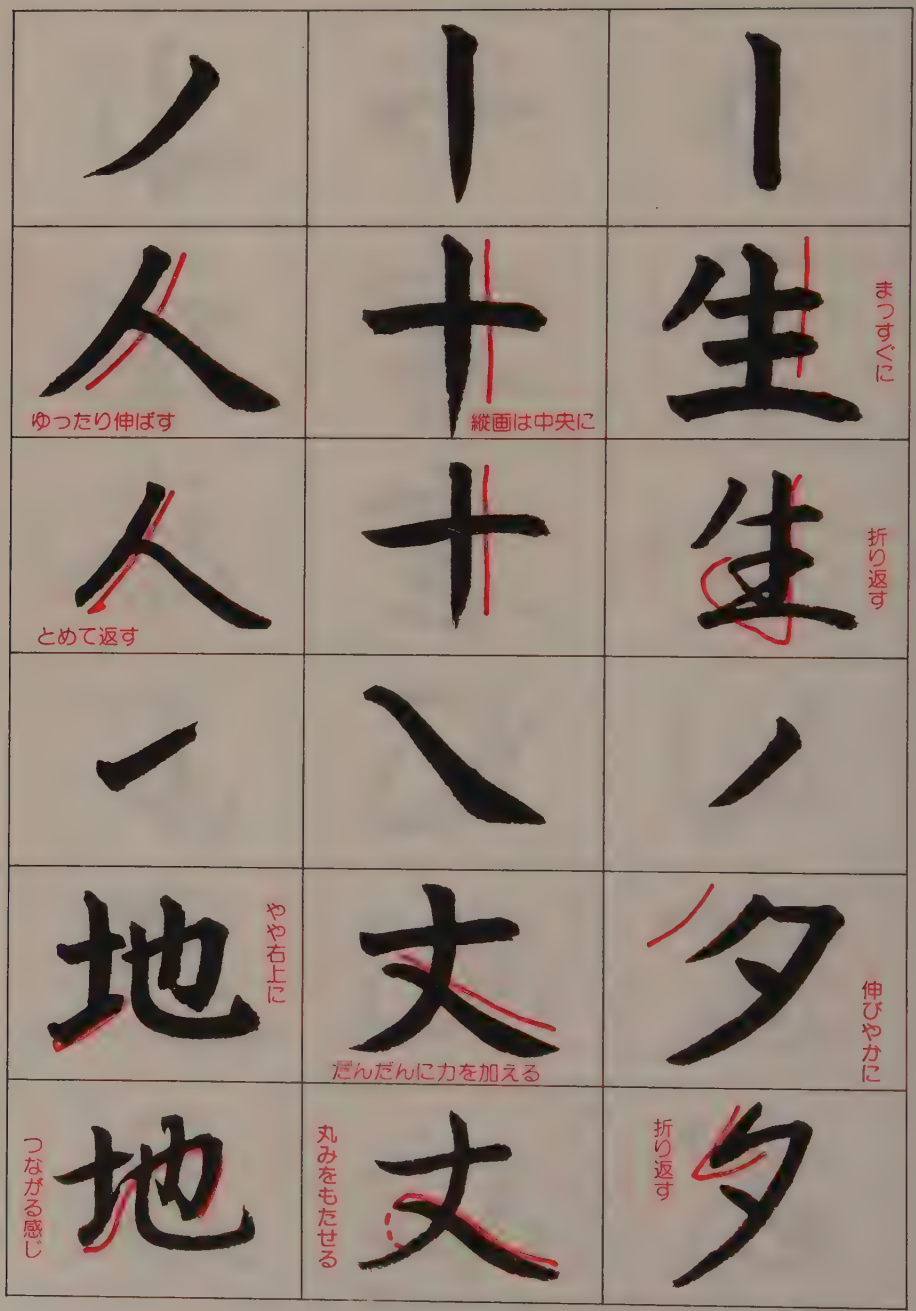
「懸針」左より打ちこんで起筆し、力強く下方向に筆を運び、すっきり穂先をまとめて抜く

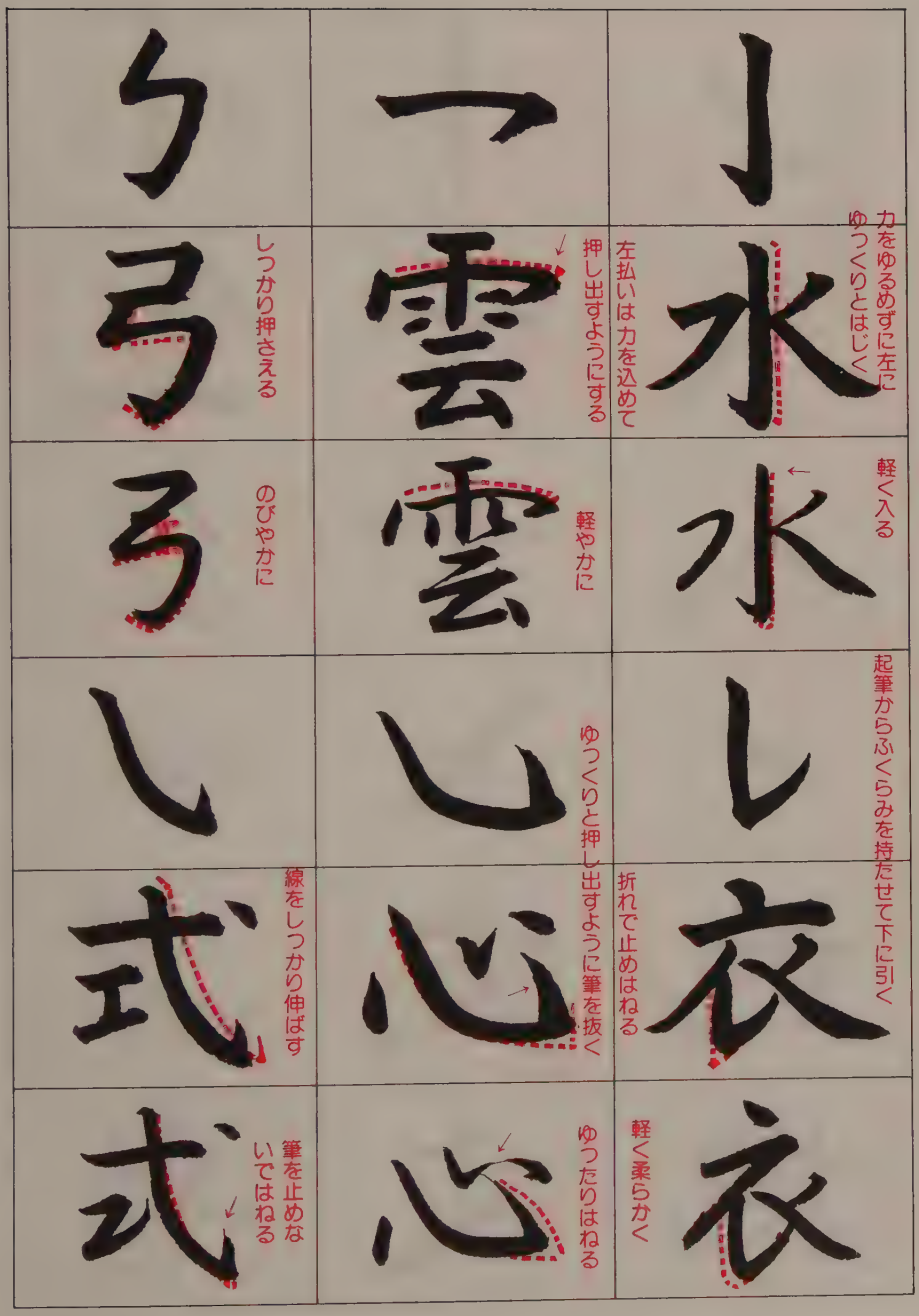
左より打ち込んで力強く下方へ筆を運び、筆圧を軽くして押さえ、元きた方向へ押し返すようにしてまとめる

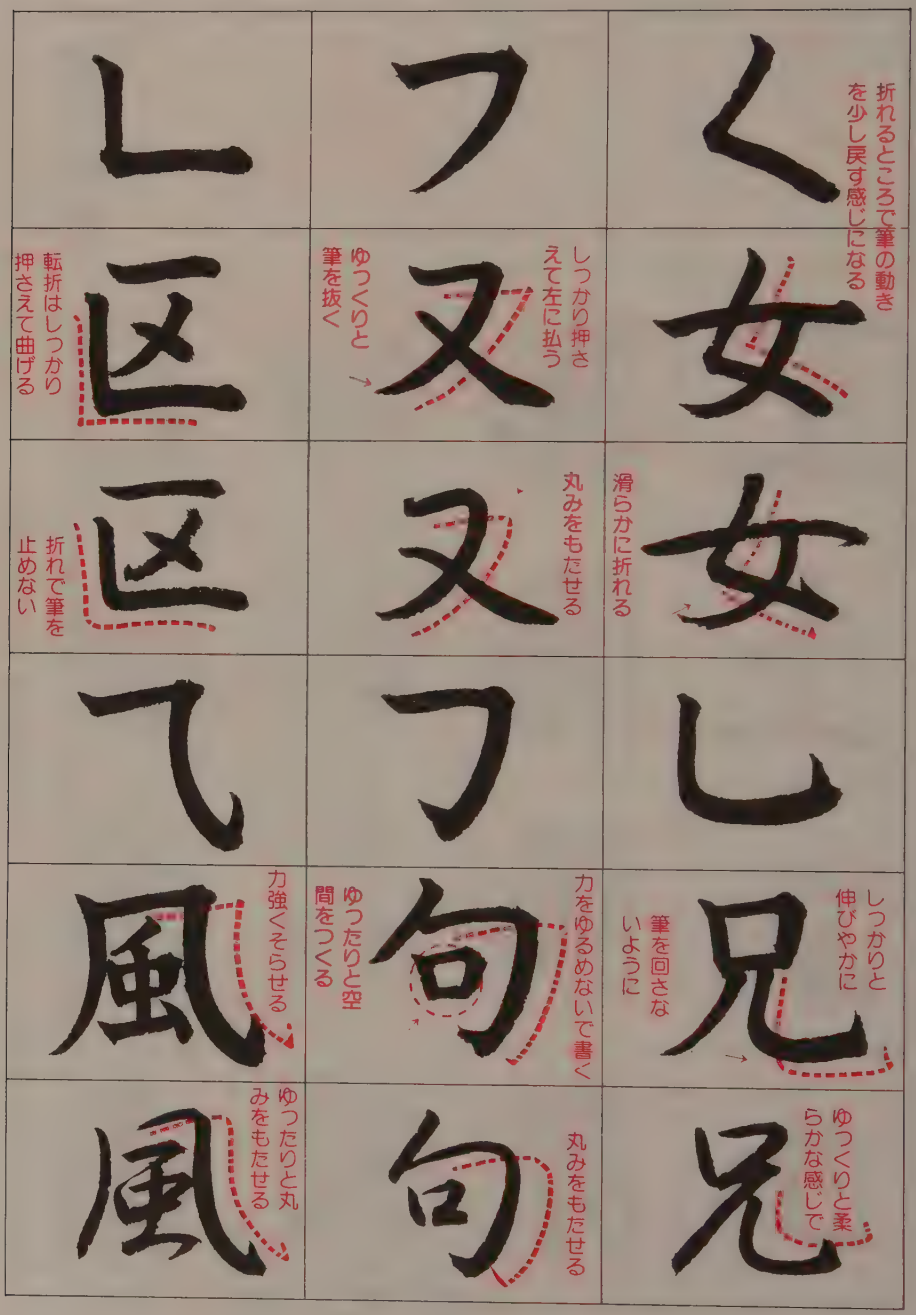
文字の点画

点画というのは、漢字を構成する点と線です。楷書の点画の要点は、形をととのえ、確実に、丁寧に書くことですが、行書は少しくずした形になります。




まっすぐに
縦画は中央に
ゆったり伸ばす
折り返す
とめて返す
伸びやかに
やや右上に
だんだんに力を加える
折り返す
丸みをもたせる
つながる感じ


力をゆるめずに左に
ゆっくりとはじく
左払いは力を込めて
押し出すようにする
しっかり押さえる
軽く入る
軽やかに
のびやかに
起筆からふくらみを持たせて下に引く
ゆっくりと押し出すように筆を抜く
折れで止めはねる
線をしっかり伸ばす
軽く柔らかく
ゆったりはねる
筆を止めない
いではねる

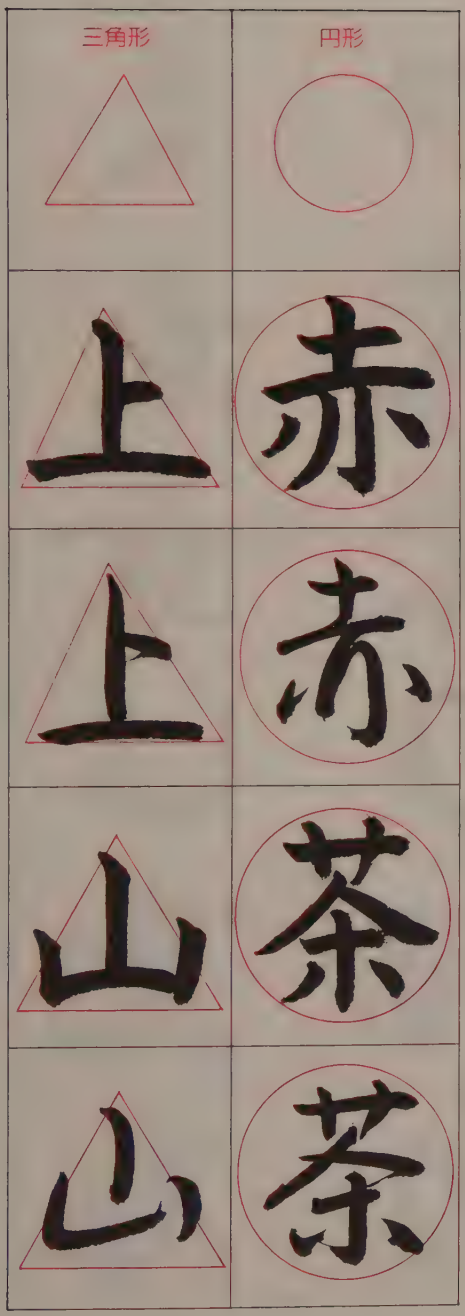

折れるところで筆の動きを少し戻す感じになる
しっかり押さえて左に払う
ゆっくりと筆を抜く
転折はしっかり押さえて曲げる
滑らかに折れる
丸みをもたせる
折れで筆を止めない
しっかりと伸びやかに
筆を回さないように
力をゆるめないで書く
ゆったりと空間をつくる
力強くそらせる
ゆっくりと柔らかな感じで
丸みをもたせる
ゆったりと丸みをもたせる

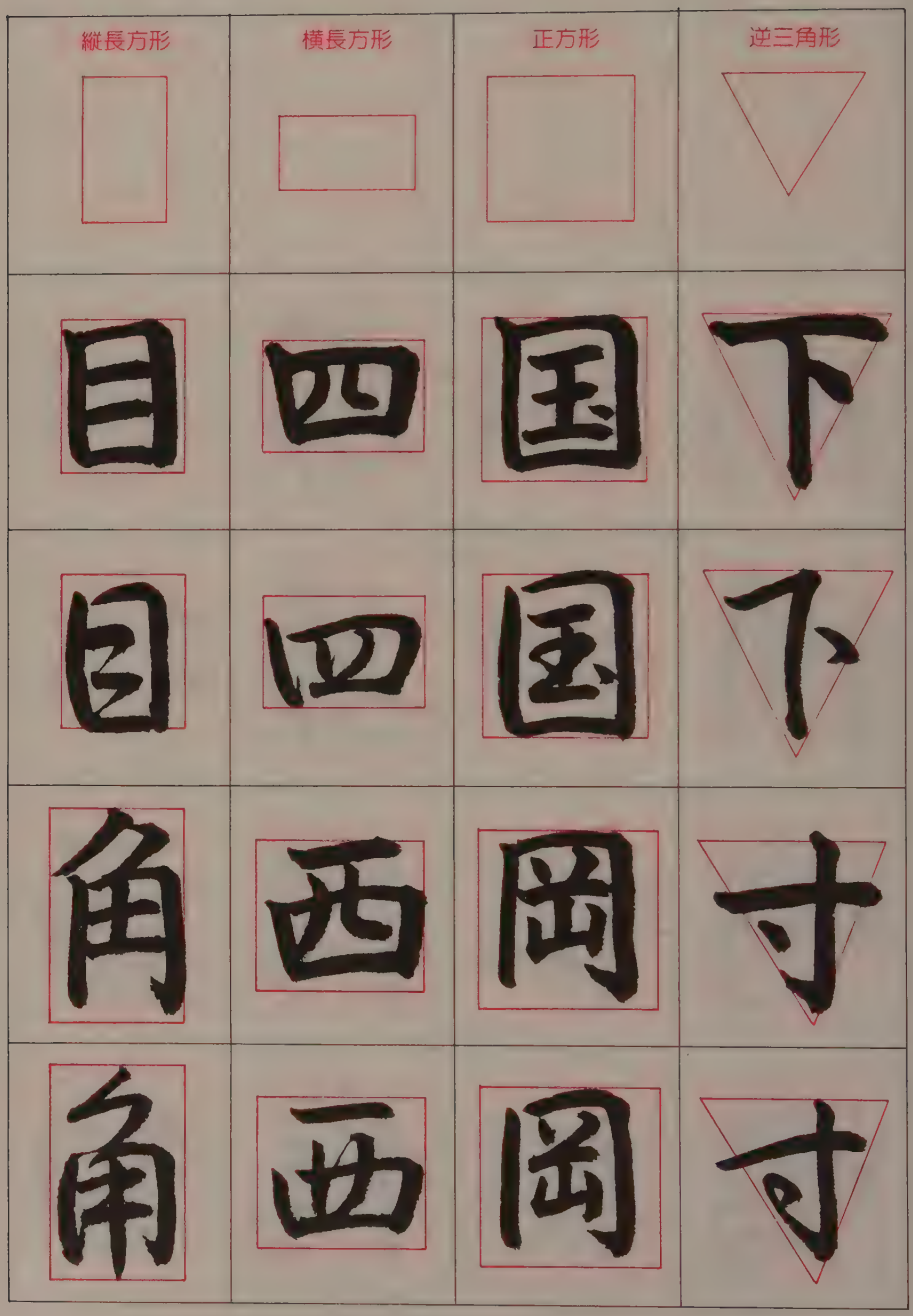
文字の形

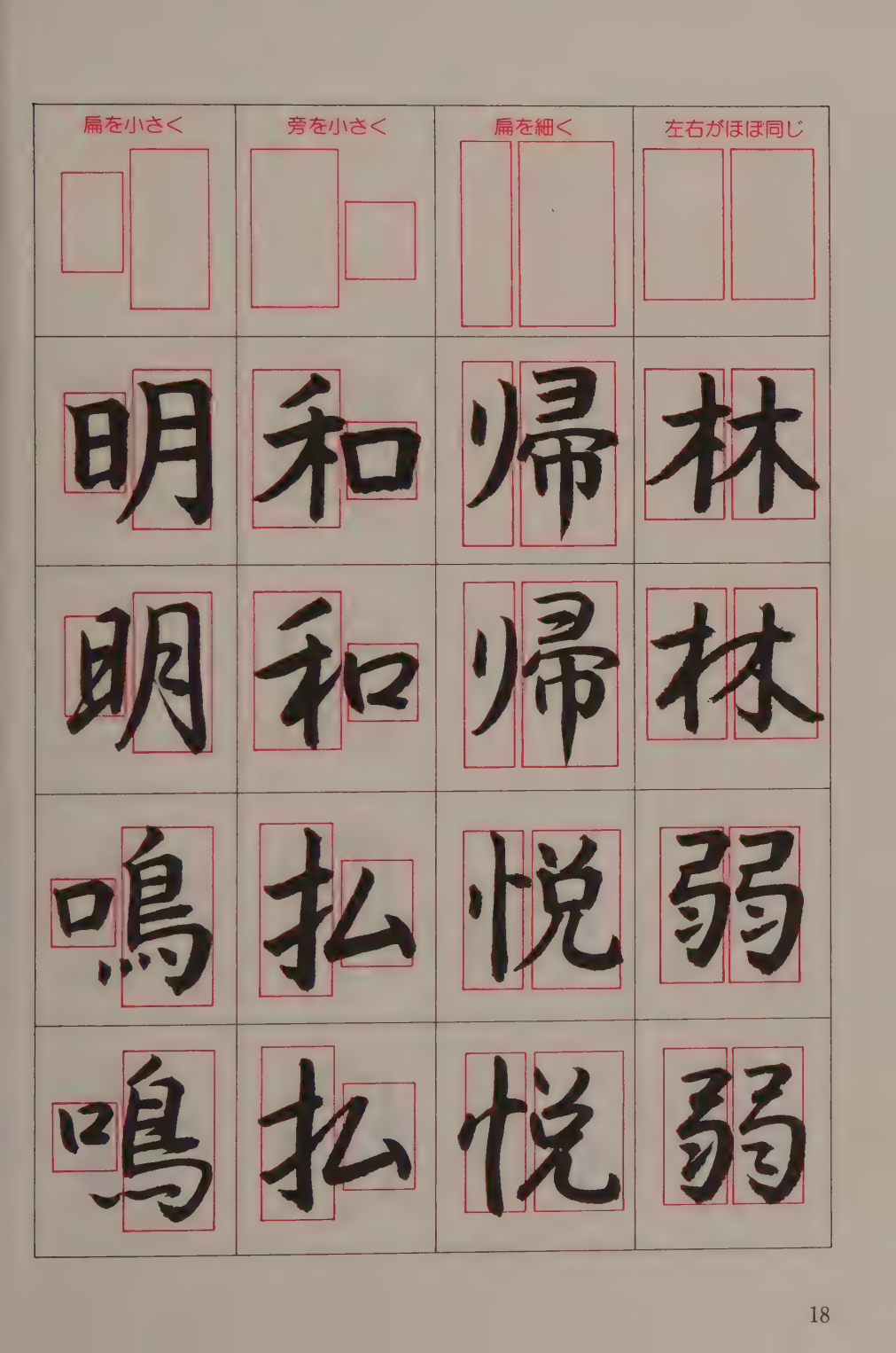
毛筆で書いた文字の美しさは、一目みれば分かります。きれいな字は、形がととのっているからです。しかしその形の判定については、必ずしも皆がみな一致しているわけではありません。書を習っている人は表現された形に美しさを感じますが、習ったことのない人は、とかく印刷物の文字を基準にして見がちです。

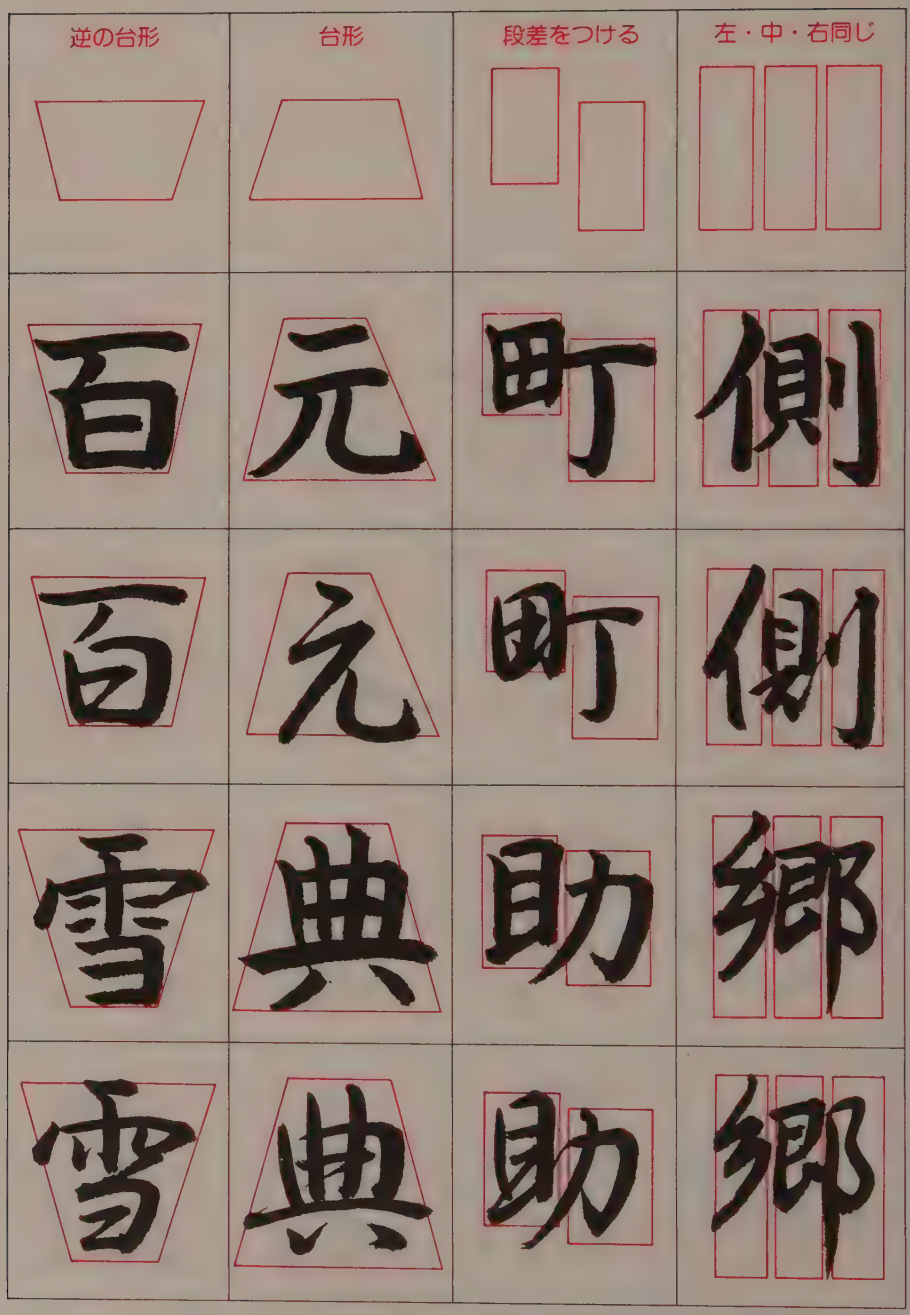
私たちが書く文字は、印刷文字のように均整がとれた形ではありません。しかし、気持ちが形ににじんでいます。ですから、形に個性と味わいがでてきます。

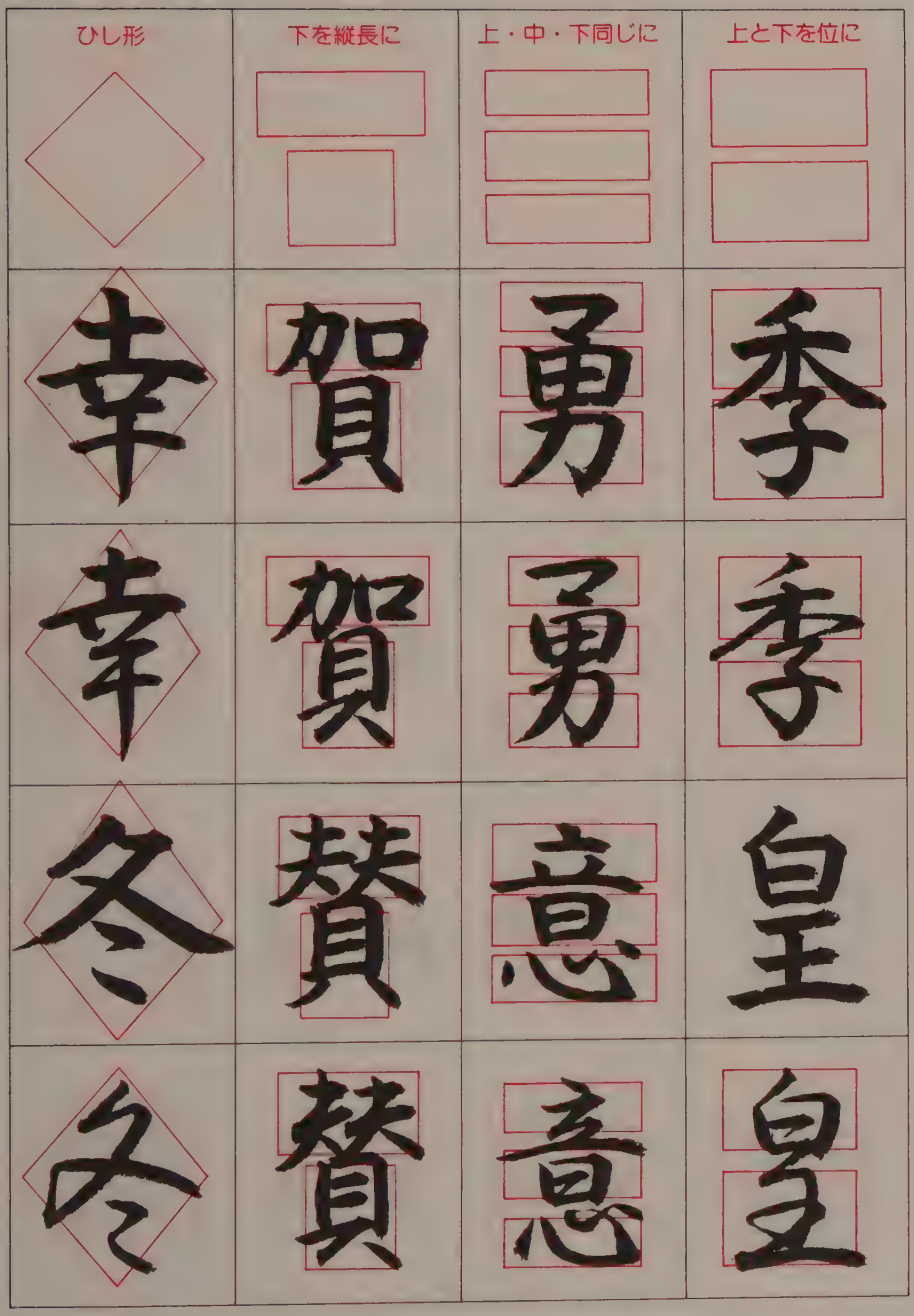
漢字の形にも、四角いものや丸いもの、三角のものなど、いろいろ個性があります。その造形的な特徴をしっかりとらえて、調和のとれた形を、反復練習しましょう。

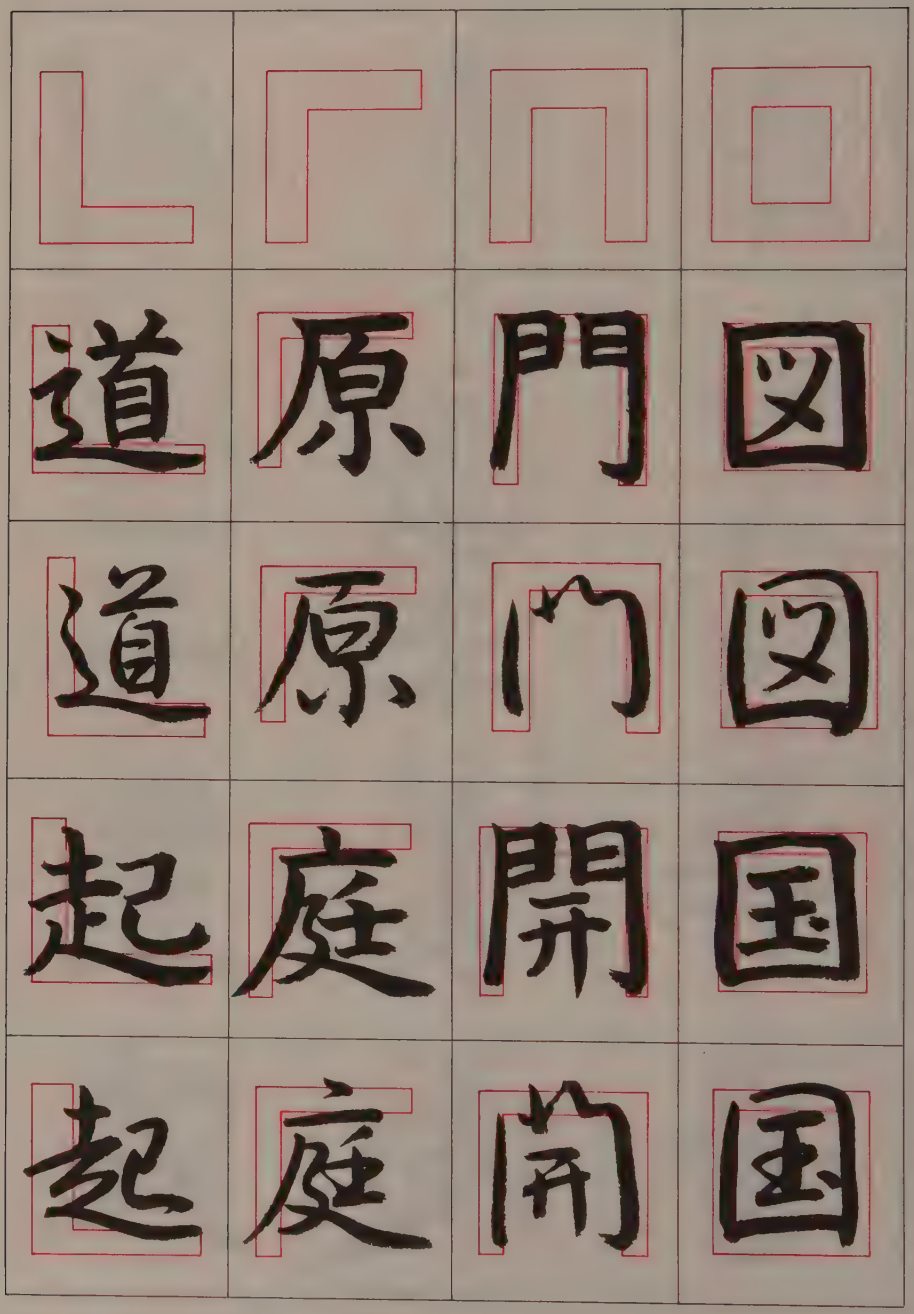



縦長方形
横長方形
正方形
逆三角形
目
四
国
下
目
四
国
下
角
西
岡
寸
角
西
岡
寸


扁を小さく
旁を小さく
扁を細く
左右がほぼ同じ
明
和
帰
林
明
和
帰
林
鳴
払
悦
弱
鳴
払
悦
弱


逆の台形
台形
段差をつける
左・中・右同じ
百
元
町
側
百
元
町
側
雪
典
助
郷
雪
典
助
郷


ひし形
下を縦長に
上・中・下同じに
上と下を位に
幸
賀
勇
季
幸
賀
勇
季
冬
賛
意
皇
冬
賛
意
皇

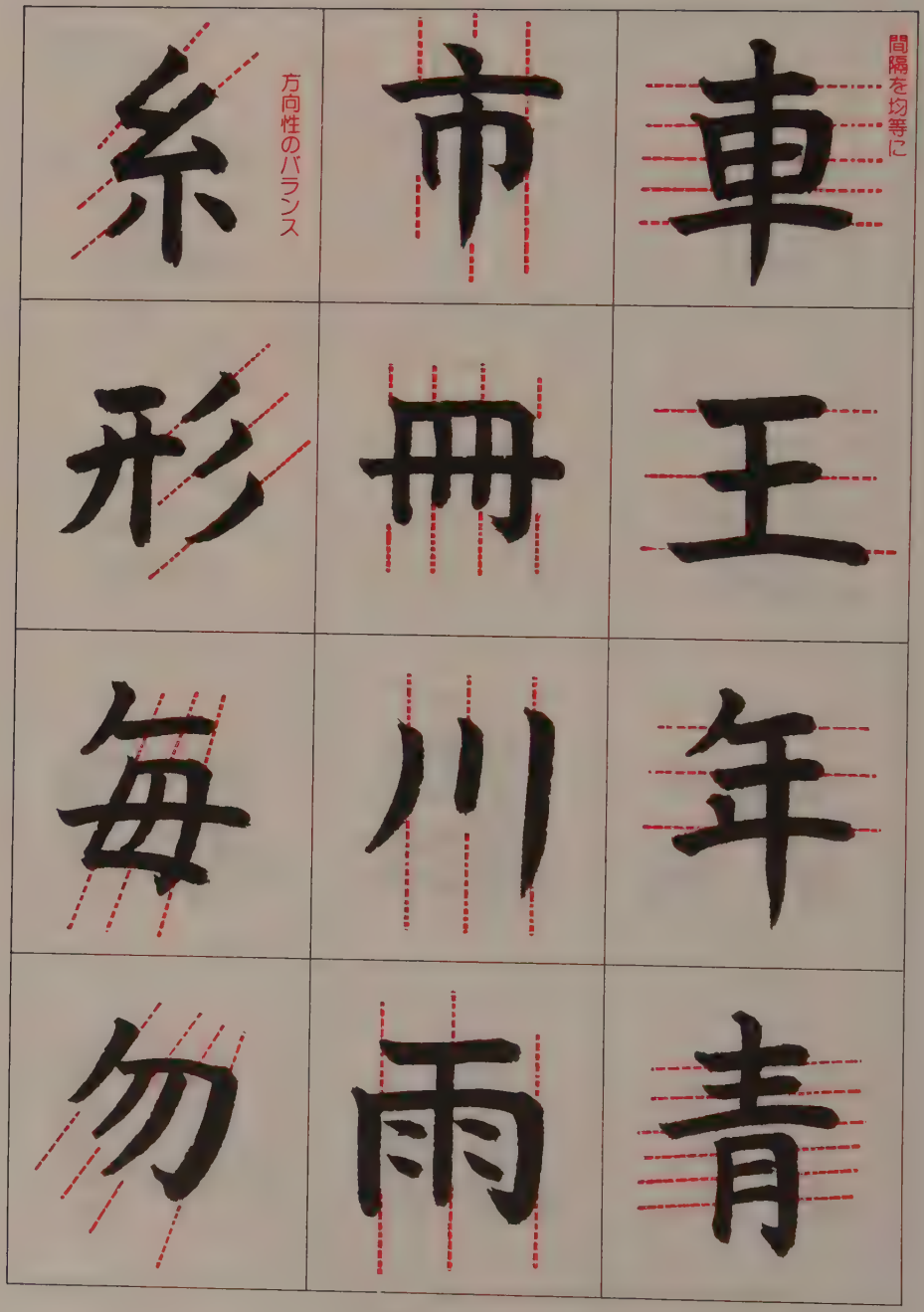

道 原 門 図
道 原 門 図
起 庭 開 国
起 庭 開 国

楷書の書き方
バランスをとる

楷書は、誰にでも分かりやすい書体です。お習字でも、まず楷書から始めます。規則正しい形をしていて、学びやすいからです。

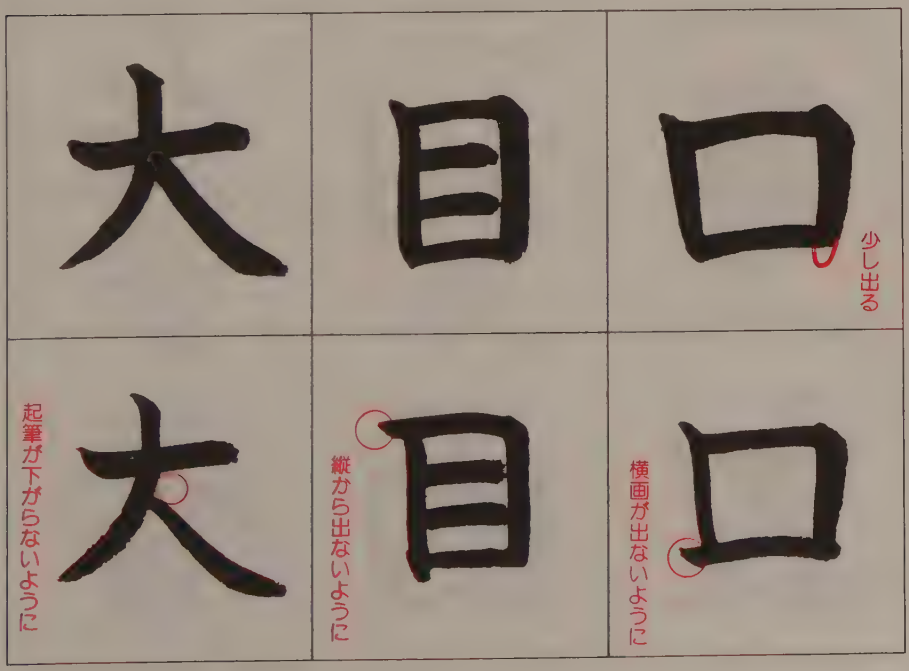
ところが毛筆で楷書を書くとなると、そう簡単ではありません。形にとらわれて書くと、ますますむずかしくなります。

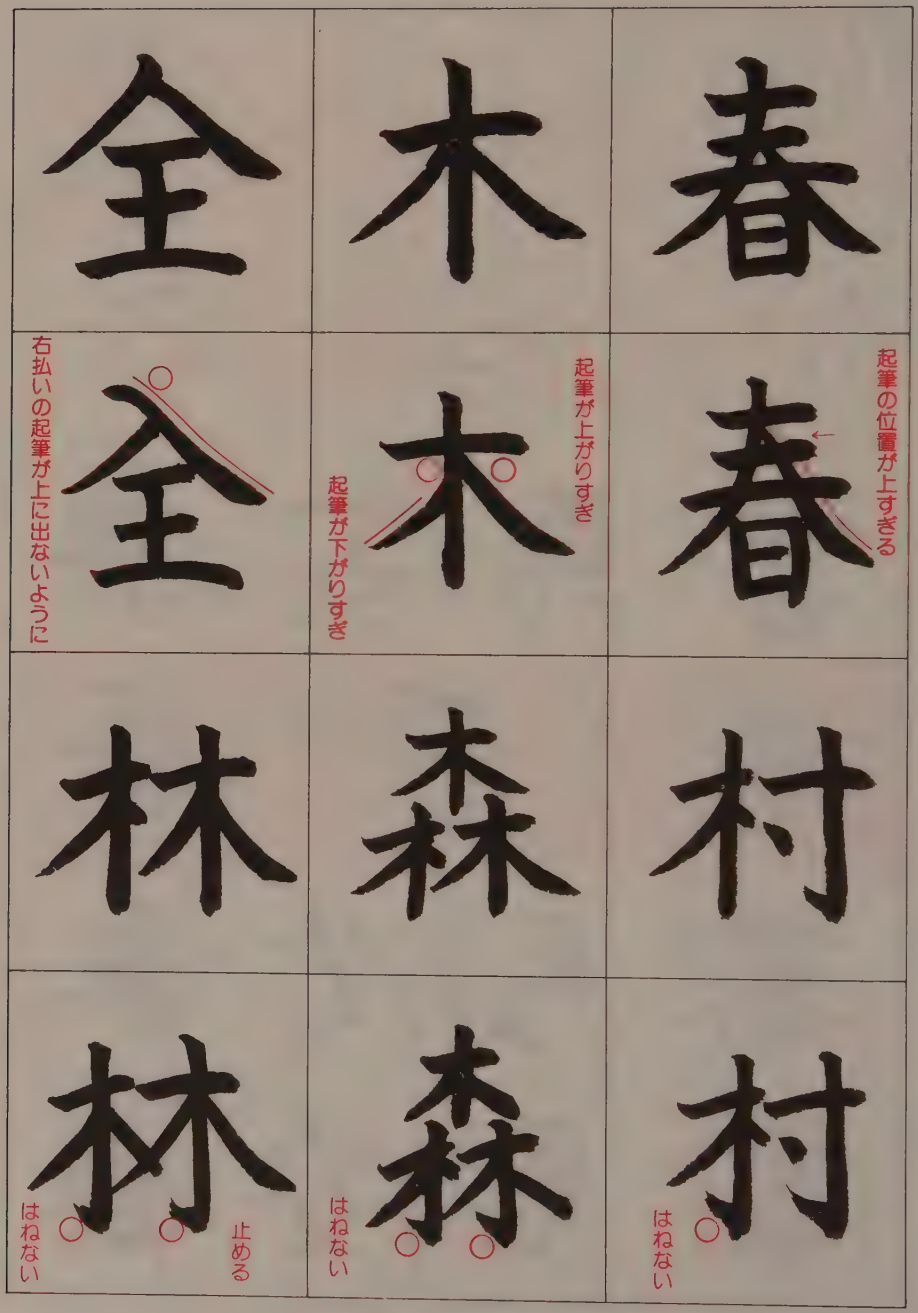
点画の間隔や方向性、筆勢などを考えながら、バランスよく正確に書く練習をしましょう。


間隔を均等に
方向性のバランス
車
王
年
青
市
冊
川
雨
糸
形
毎
勿

楷書
点画の接し方

楷書は、点画を正確に書くことを基本としています。ところが起筆や終筆の位置がずれたり、払いやはねが曖昧な文字をよく見かけます。文字は、点画によって組み立てられています。どの部分の点画が、どのように接しているかということは、楷書の場合、大事なポイントです。それを正確に書かないと、正しい楷書として通用しません。しかし点画の接筆は、必ずしもすべての文字に共通しているわけではありません。口や目の点画の接合部をみても分かるように、文字によっな異なります。日頃から、正しく書くよう心がけましょう。

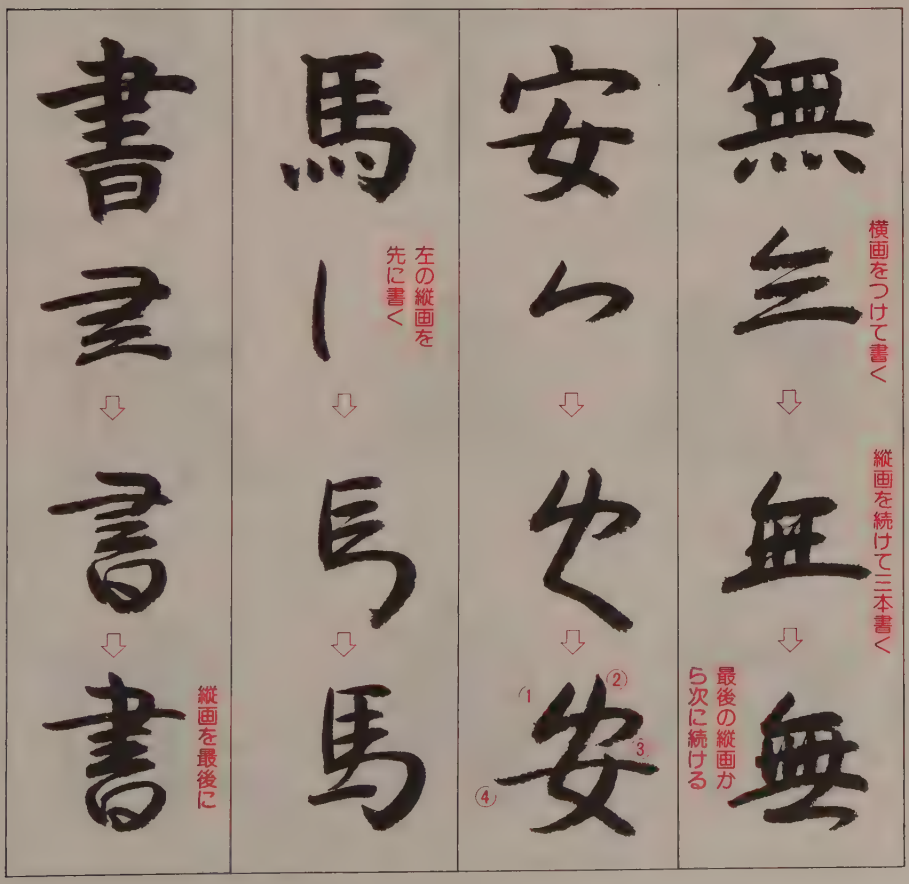



起筆の位置が上すぎる
起筆が上がりすぎ
起筆が下がりすぎ
右払いの起筆が上に出ないように
はねない
はねない
止める
はねない

行書

楷書との違い

行書は、楷書と草書の中間的な存在ですが、最も実用的な字です。読みやすさは、ほとんど楷書と変わりません。しかし、すらすらと草書に近い筆の動きで書けます。ですから文字によっては、楷書と書く時の筆順が違うものもあります。行書の美しい形となめらかな線は、楷書にないものです。筆順を追いながら、行書と楷書の違いを確認してください。

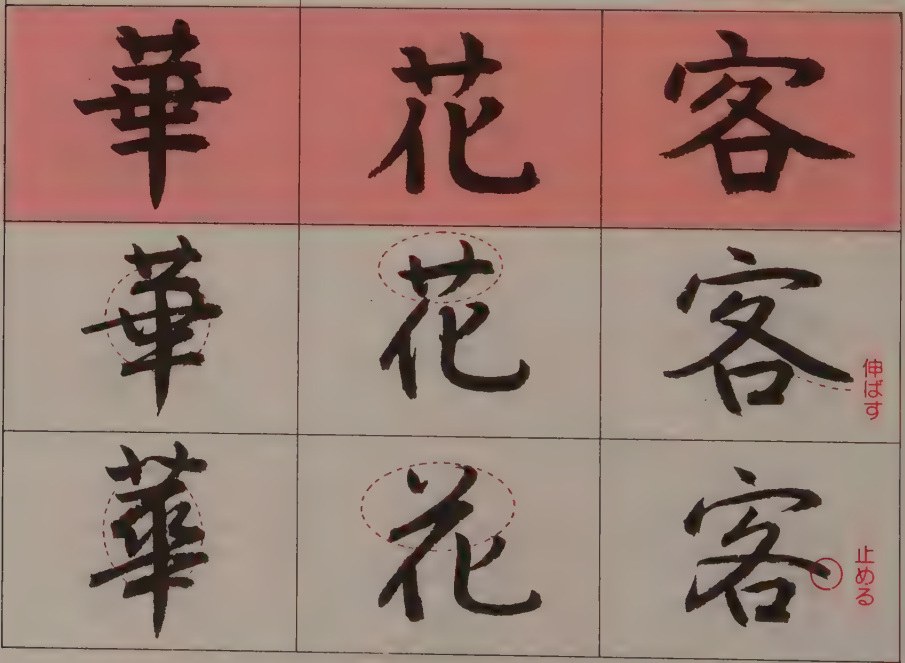


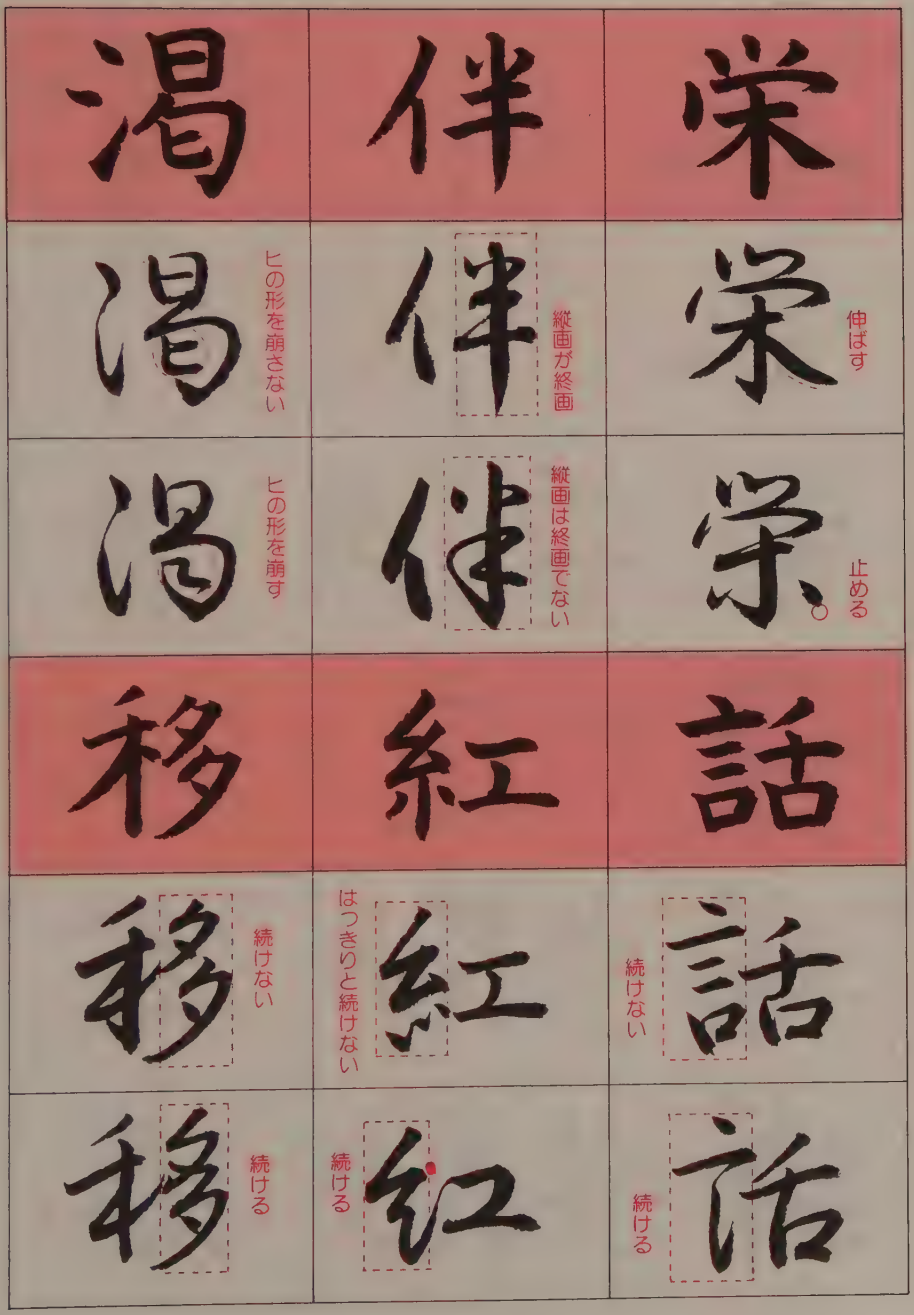
行書

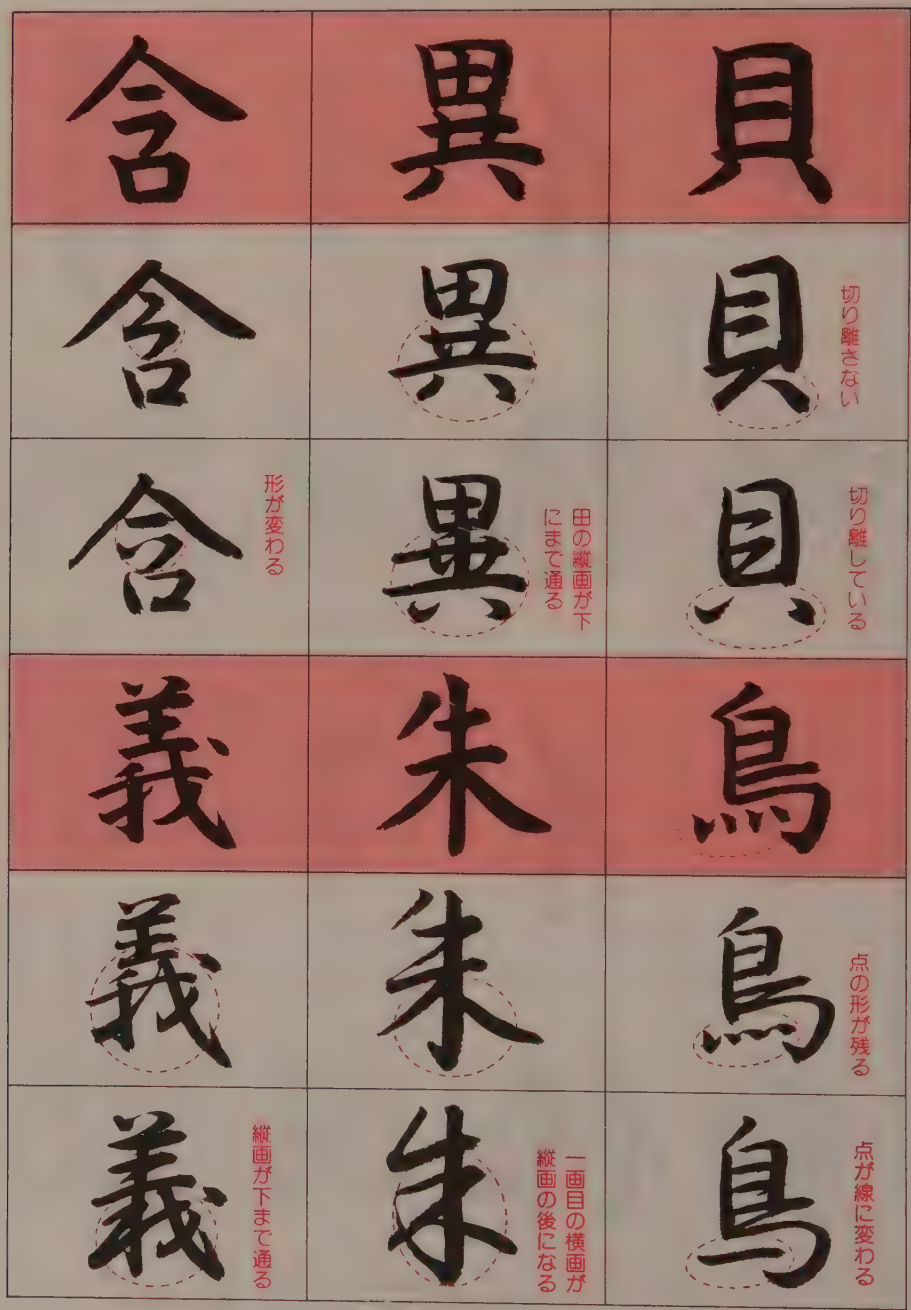
文字の変形

行書には、楷書に近い書体と草書に近い書体があります。同じ文字でも変形することが可能ですから、表現に幅があり、楷書より美しい字が書けます。

上段は楷書




渇
伴
栄
ヒの形を崩さない
縦画が終画
伸ばす
ヒの形を崩す
縦画は終画でない
止める
移
紅
話
続けない
はっきりと続けない
続ける
続ける
続ける


貝
異
合
切り離さない
切り離している
田の縦画が下にまで通る
形が変わる
鳥
朱
義
点の形が残る
点が線に変わる
一画目の横画が縦画の後になる
縦画が下まで通る

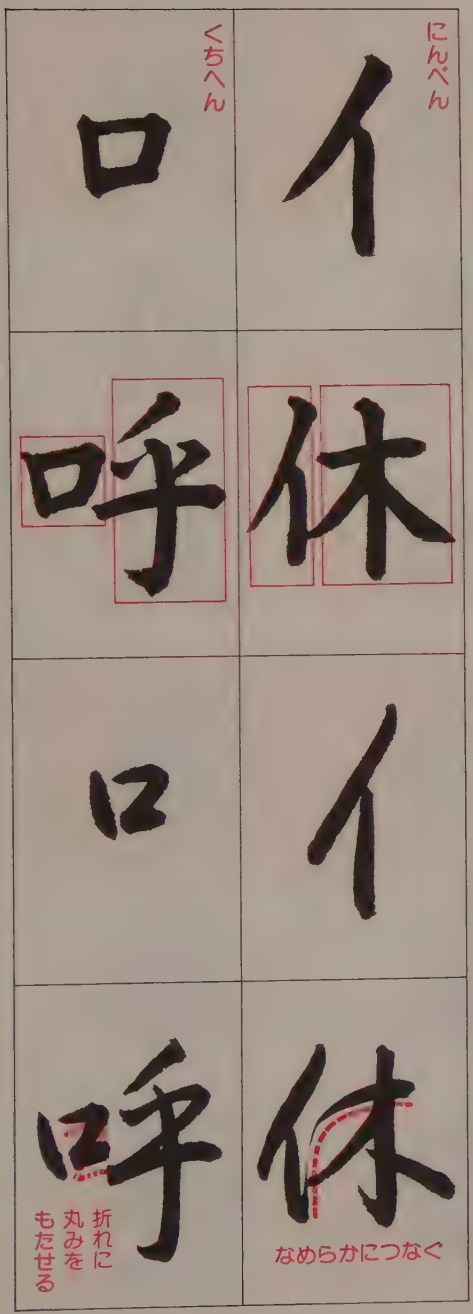
漢字を構成する部首

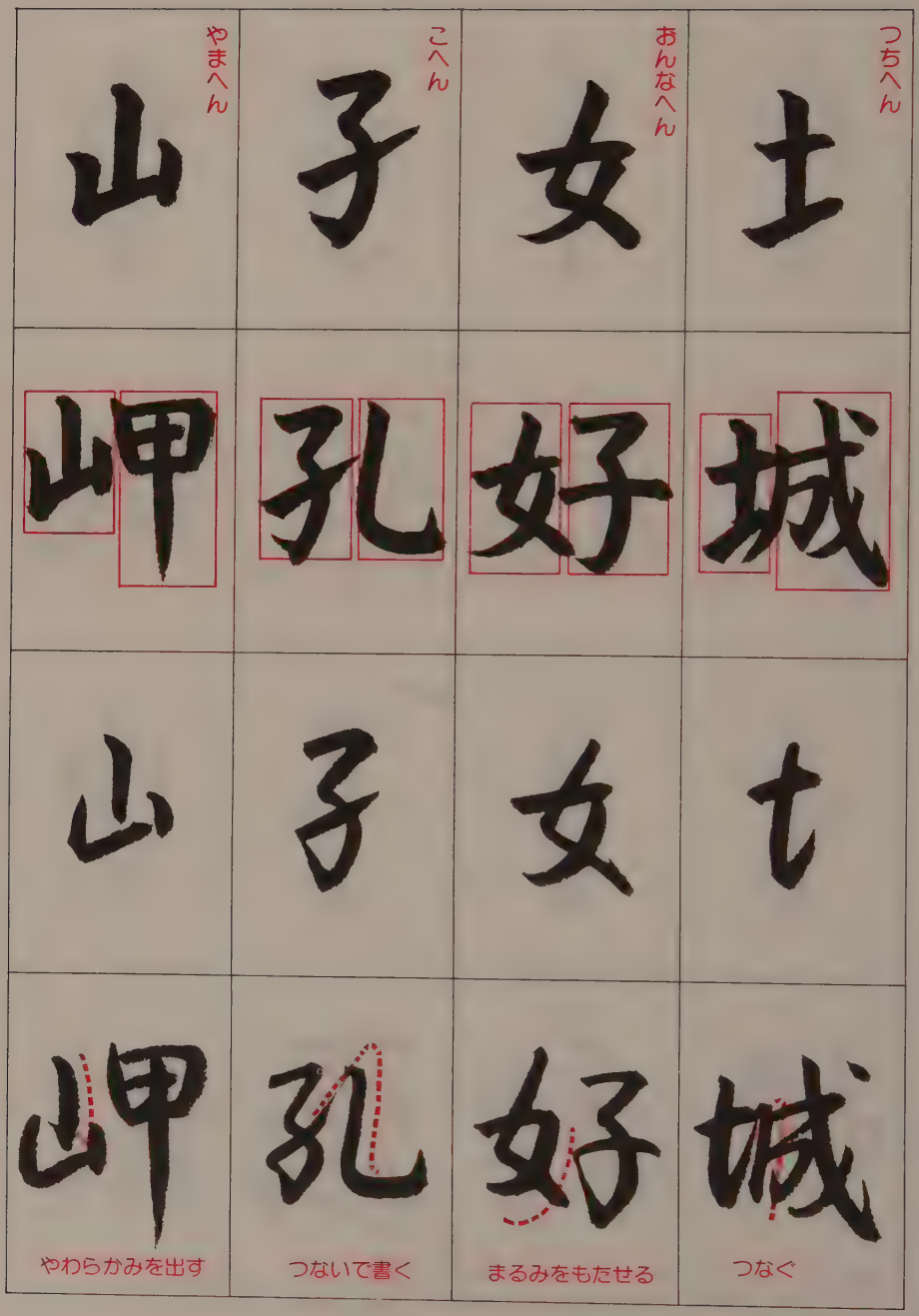
漢字は、それぞれに異なる形をしています。簡単なものもあれば、複雑過ぎて、なかなか覚えられないものもあります。

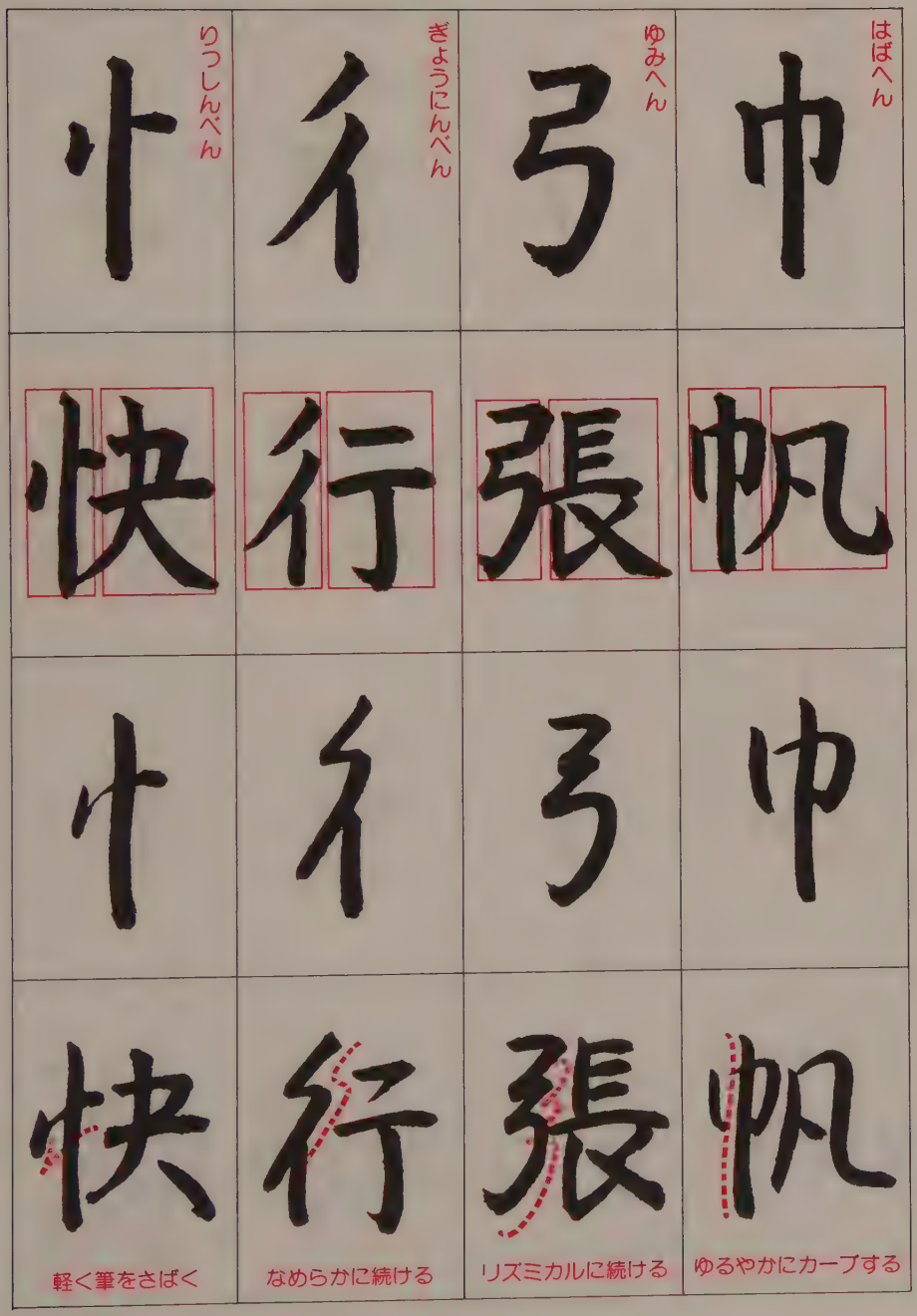
しかしそれぞれの漢字は、他のいくつかの漢字と、部分的に共通する形をもっています。それは、漢字辞典でお馴染みの部首です。

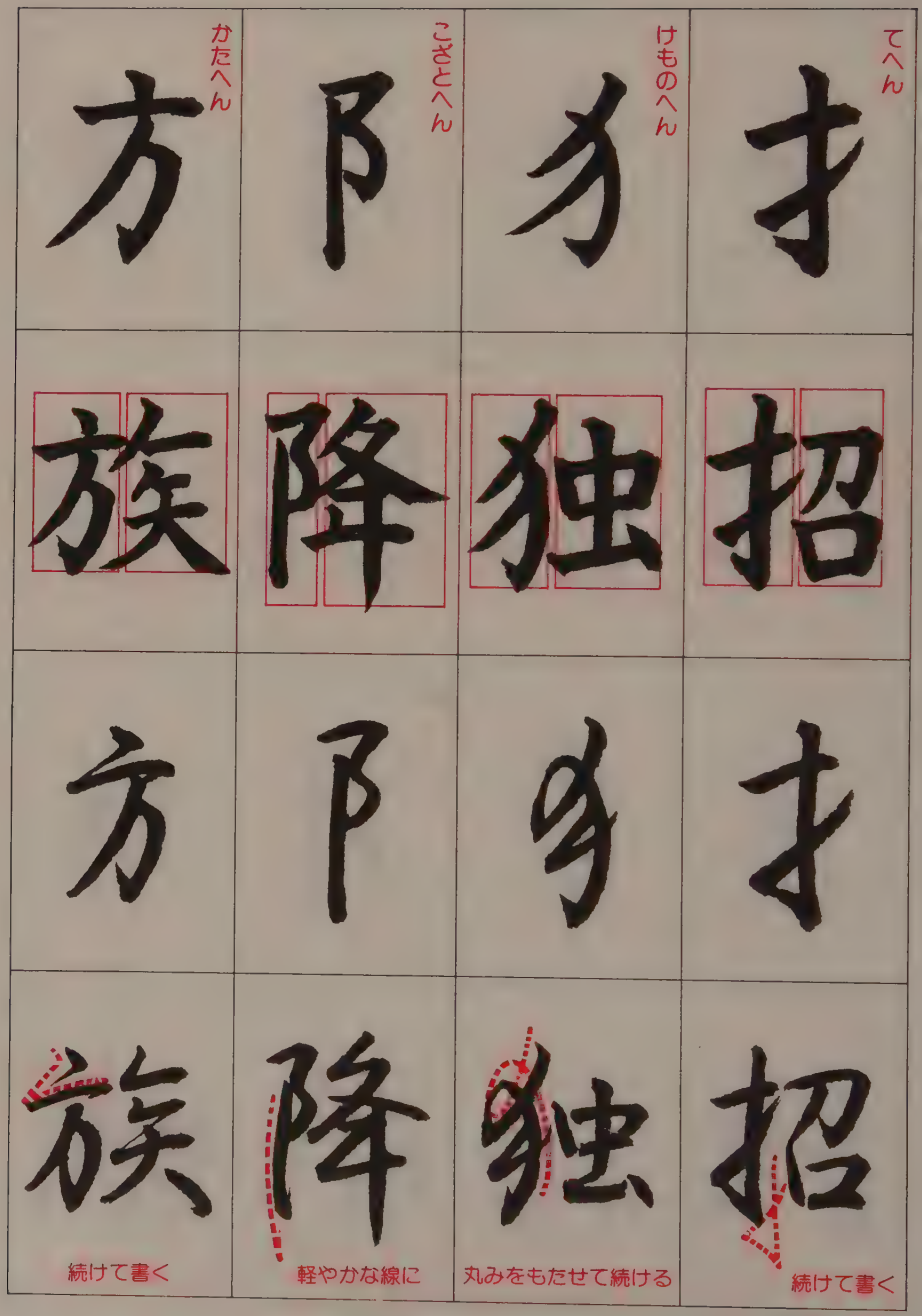
漢字は、この部首を主に、いろいろな組み合わせの変化でできています。ですから、部首のバランス感覚を養うことが大切です。

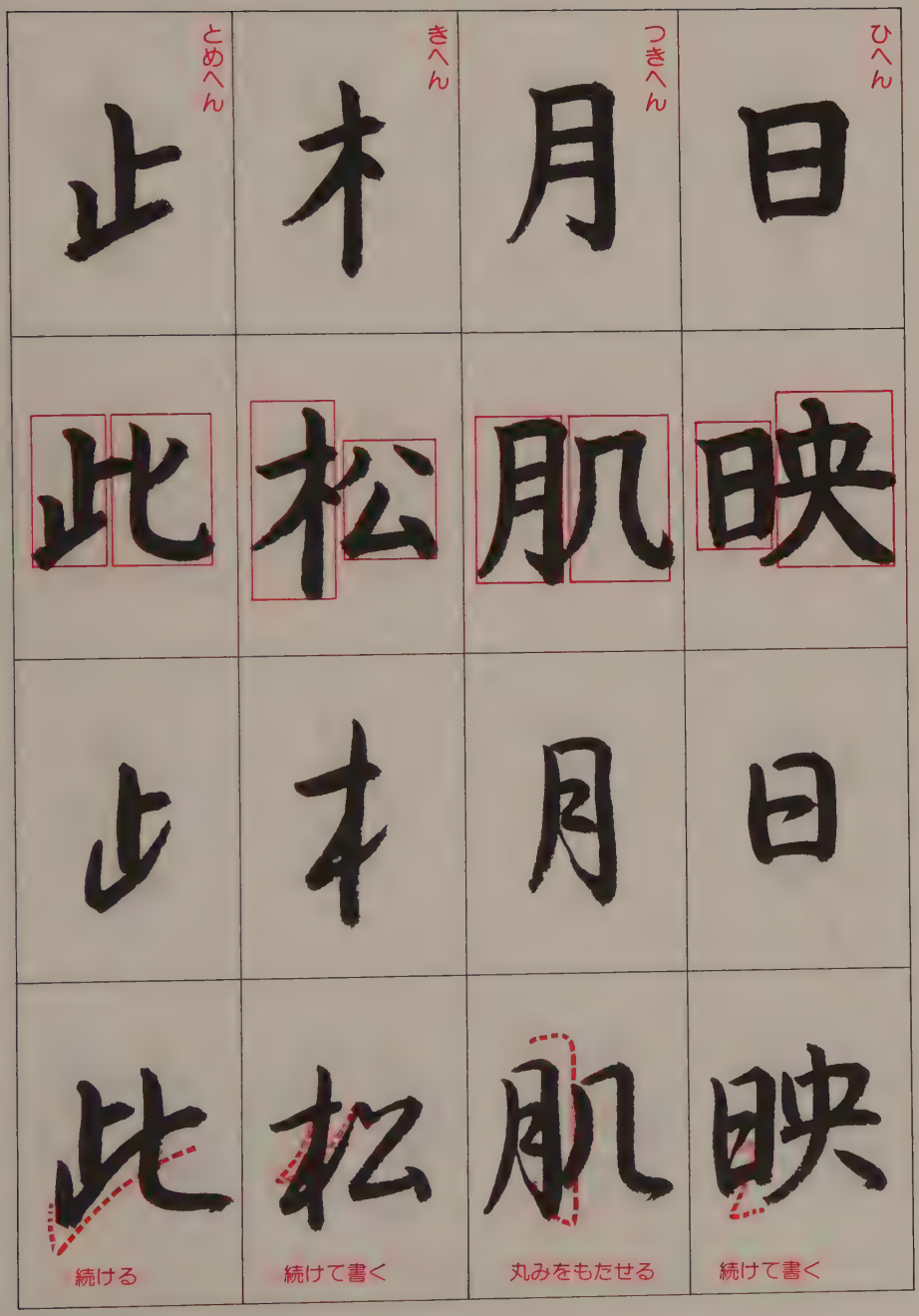
同じ字であっても、偏になった場合と冠になったものでは、形が違ってきます。偏の場合は縦長の形になり、冠になった時は扁平です。もちろんその大きさも、字画の粗密によって、異なります。常に、上下、左右のバランスを考えながら、書くようにしましょう。

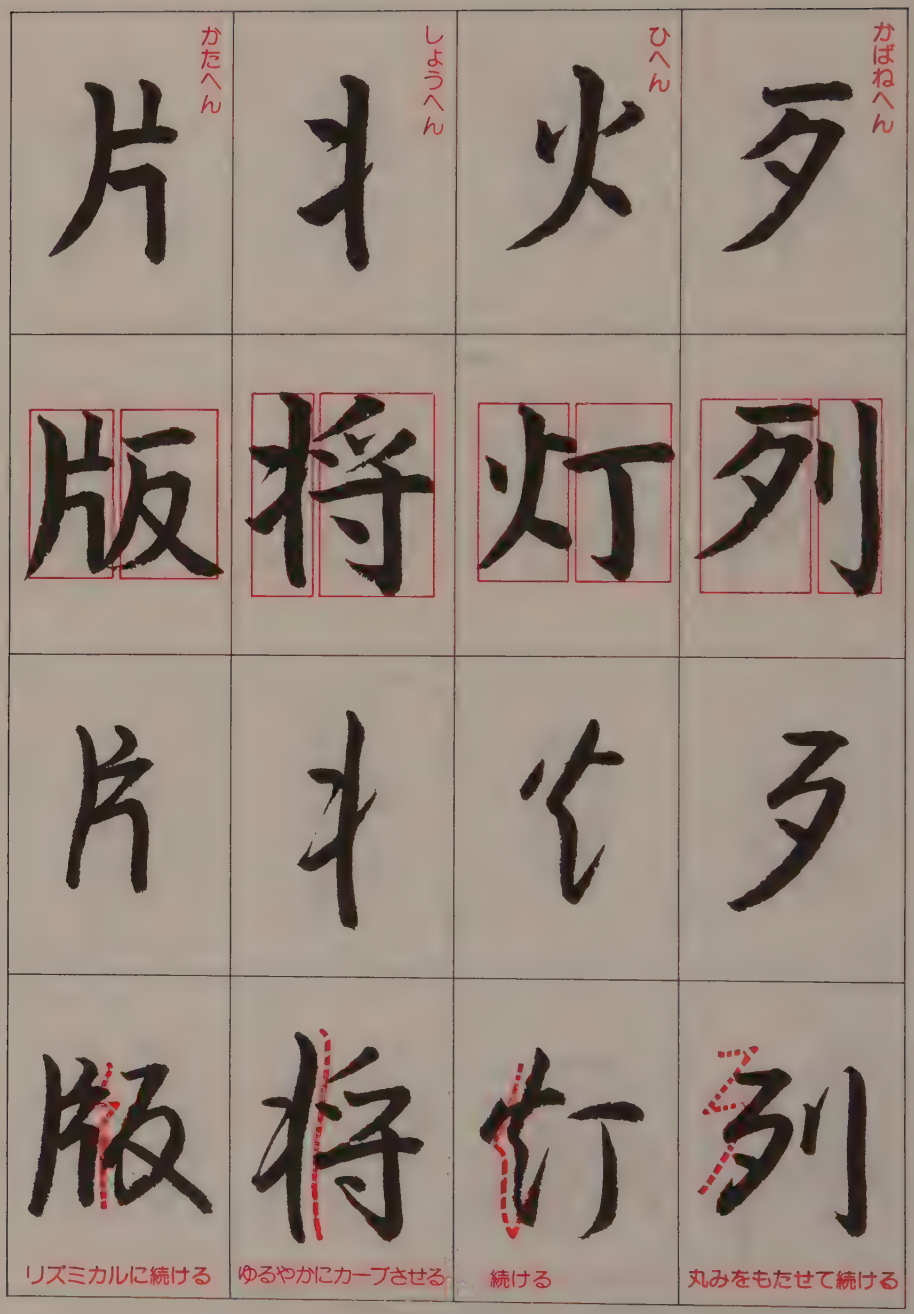


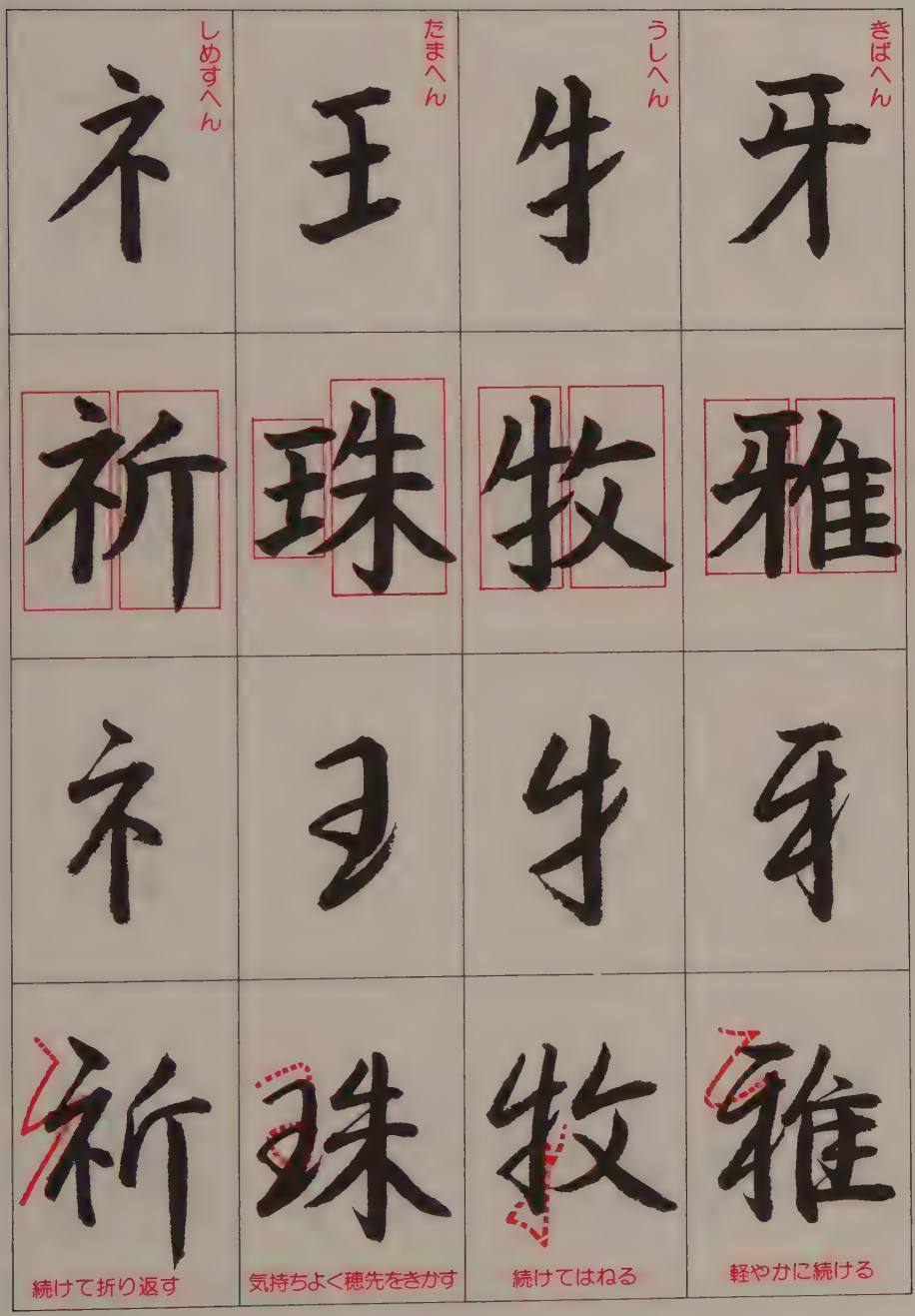

つちへん
おんなへん
こへん
やまへん
やわらかみを出す
つないで書く
まるみをもたせる
つなぐ

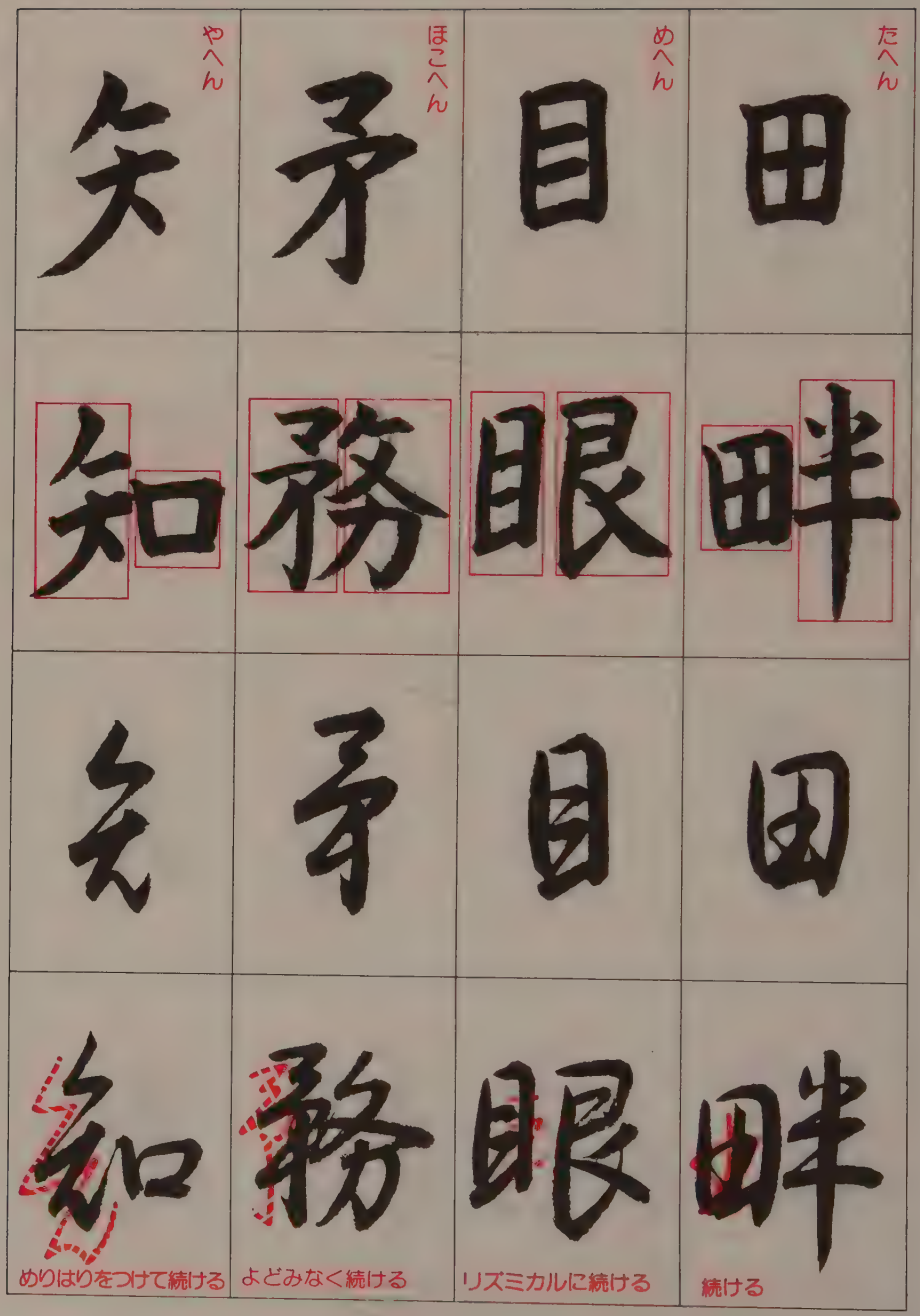

はばへん
ゆみへん
ぎょうにんべん
りっしんべん
軽く筆をさばく
なめらかに続ける
リズミカルに続ける
ゆるやかにカーブする

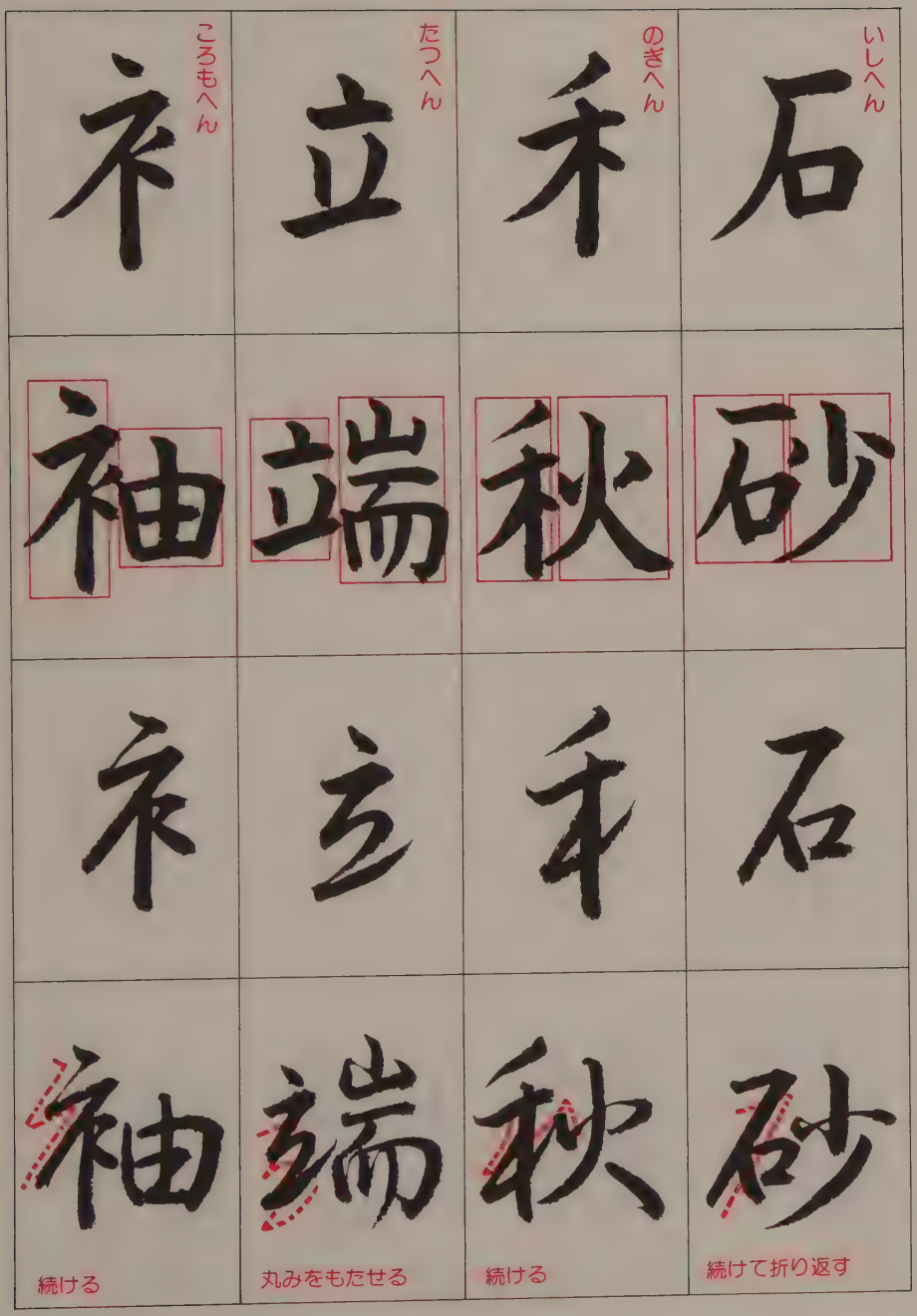

てへん
けものへん
こざとへん
かたへん
続けて書く
軽やかな線に
丸みをもたせて続ける
続けて書く

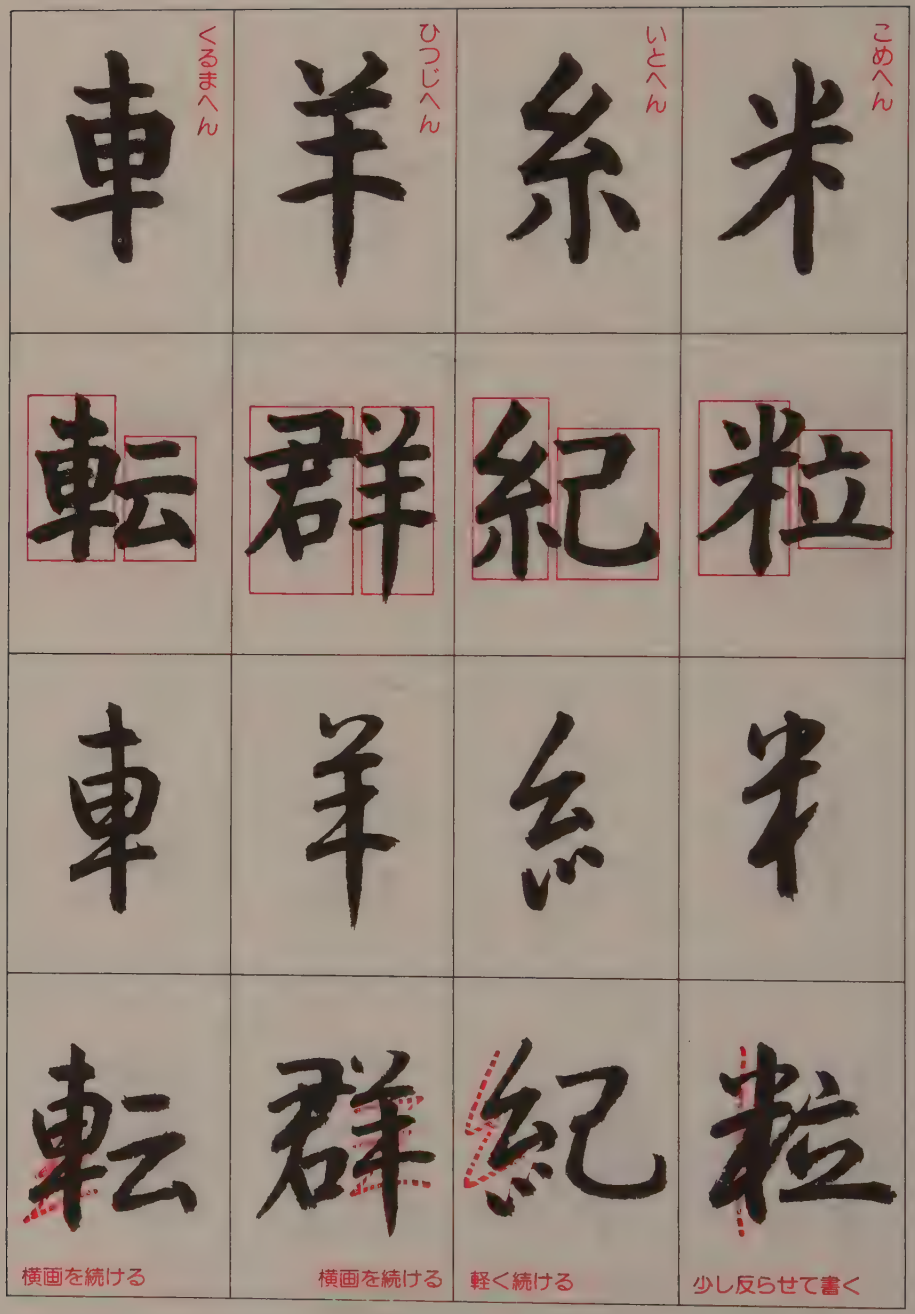

とめへん
きへん
つきへん
ひへん
続ける
続けて書く
丸みをもたせる
続けて書く

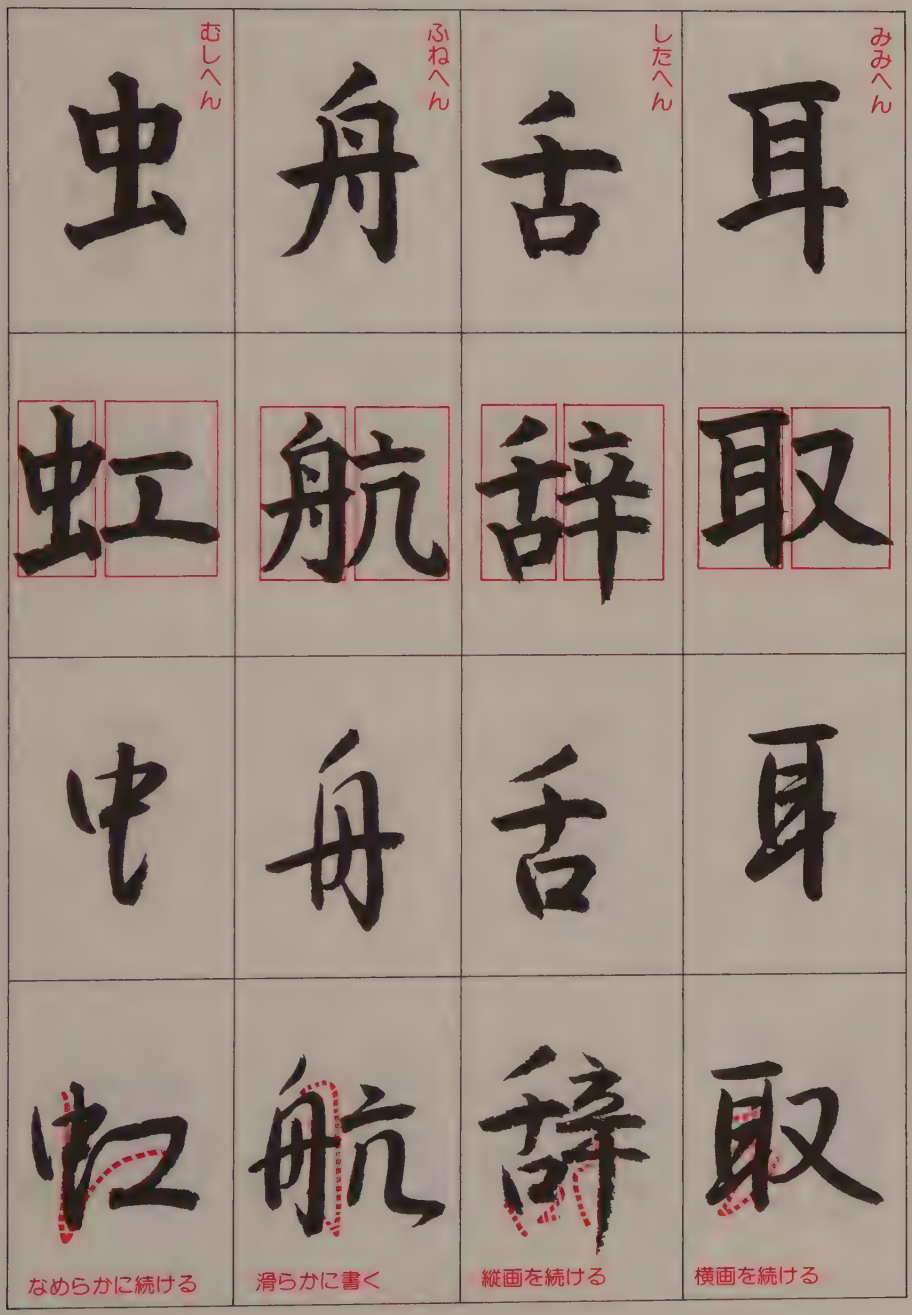

かばねへん
ひへん
しょうへん
かたへん
リズミカルに続ける
ゆるやかにカーブさせる
続ける
丸みをもたせて続ける

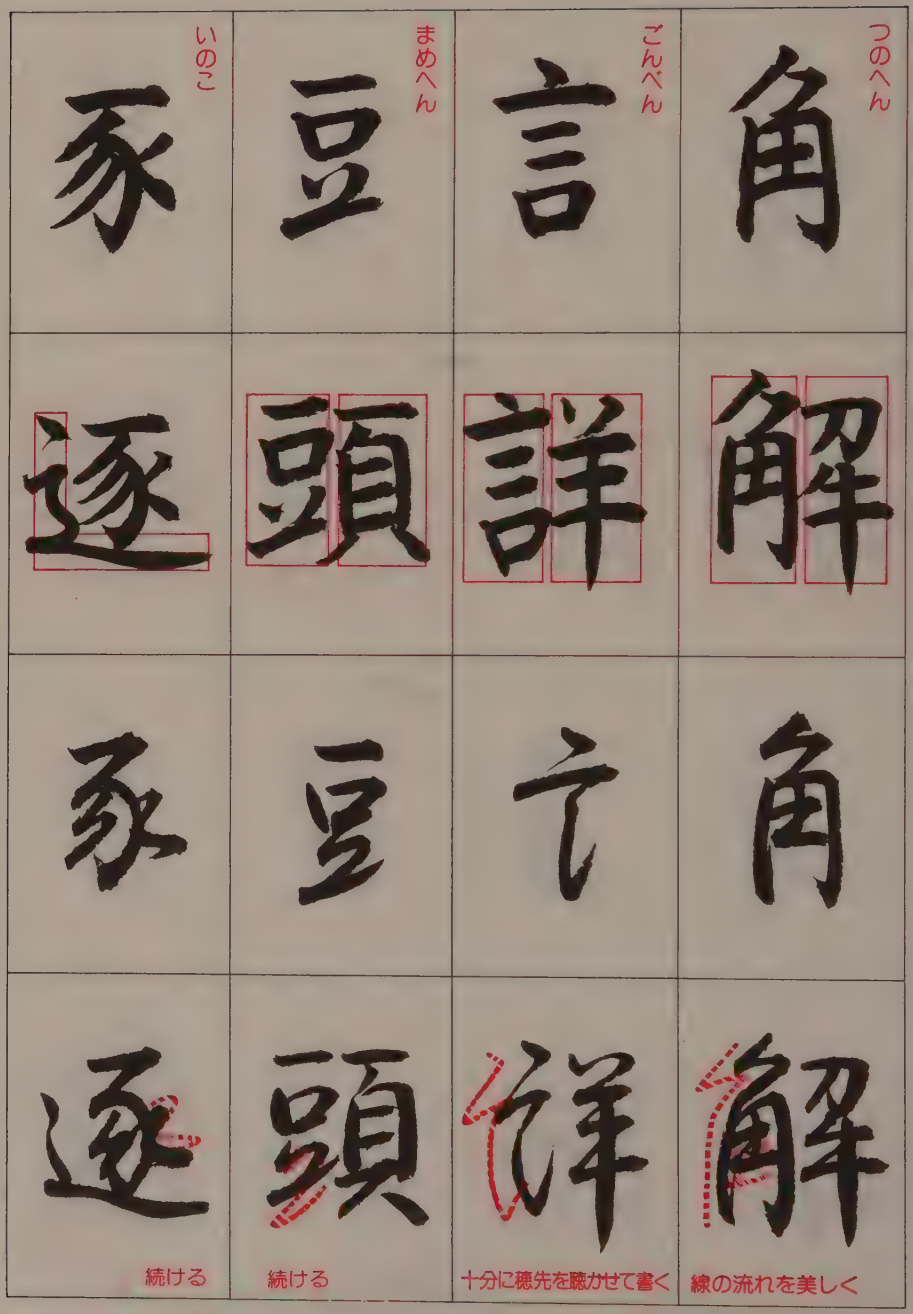

きばへん
うしへん
たまへん
しめすへん
軽やかに続ける
続けてはねる
気持ちよく穂先をきかす
続けて折り返す

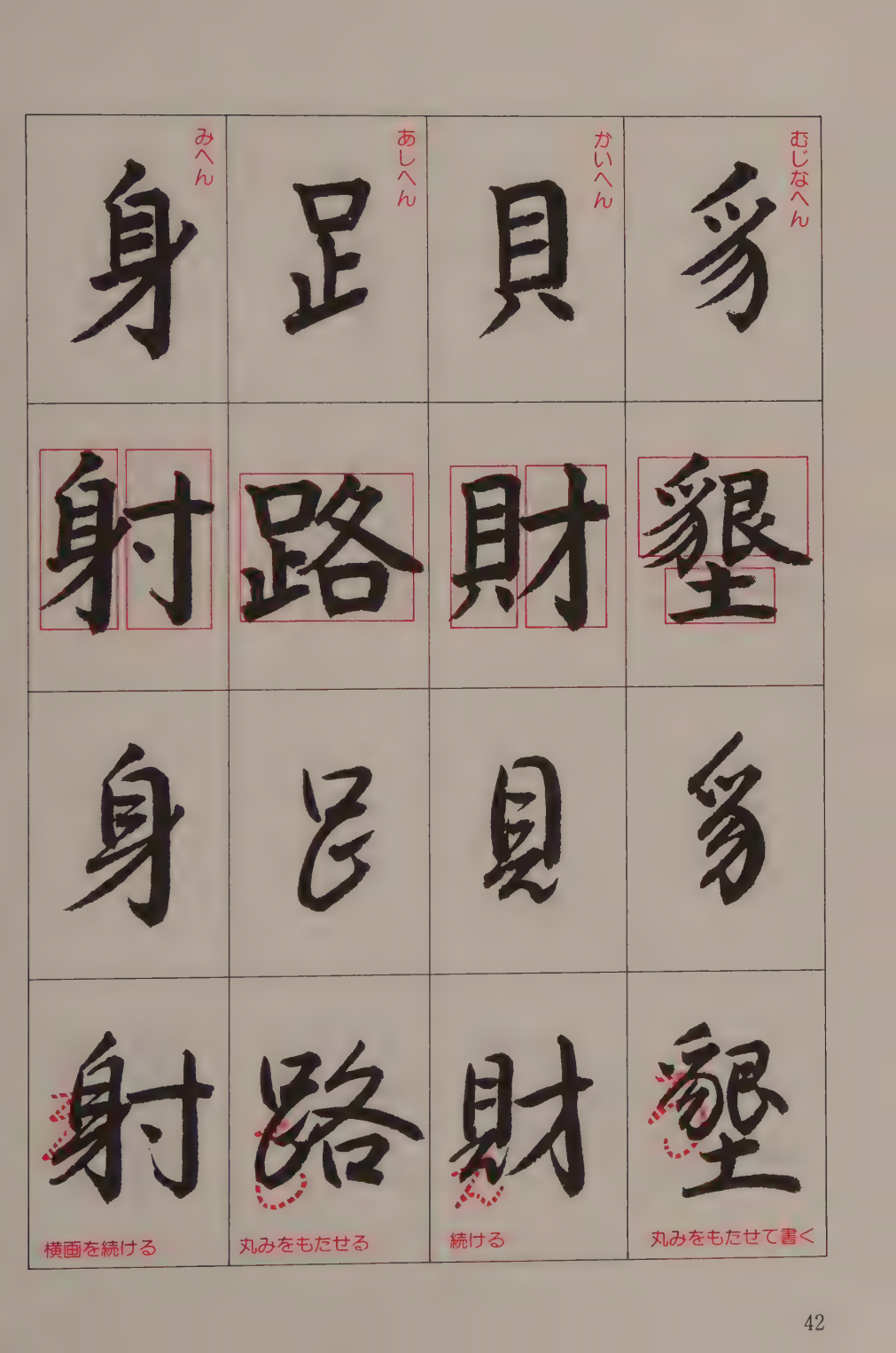

たへん
めへん
ほこへん
やへん
めりはりをつけて続ける
よどみなく続ける
リズミカルに続ける
続ける

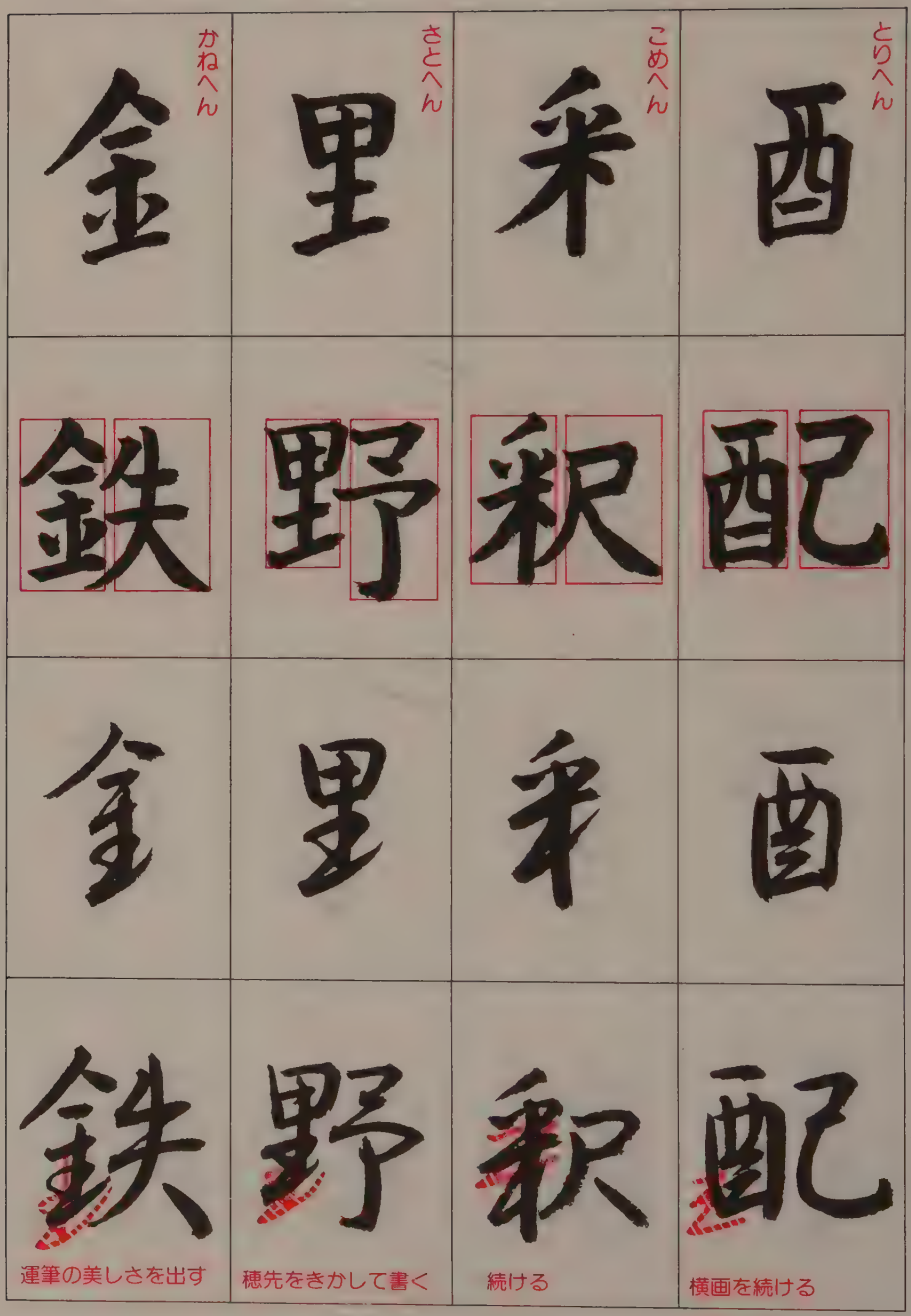

いしへん
のぎへん
たつへん
ころもへん
続けて折り返す
続ける
丸みをもたせる
続ける


くるまへん
ひつじへん
いとへん
こめへん
横画を続ける
横画を続ける
軽く続ける
少し反らせて書く


みみへん
したへん
ふねへん
むしへん
横画を続ける
縦画を続ける
滑らかに書く
なめらかに続ける


つのへん
角
ごんべん
言
まめへん
豆
いのこ
豕
解
詳
頭
逐
角
亡
豆
豕
解
詳
頭
逐
線の流れを美しく
十分に穂先を聴かせて書く
続ける
続ける


みへん
あしへん
かいへん
むじなへん
横画を続ける
丸みをもたせる
続ける
丸みをもたせて書く

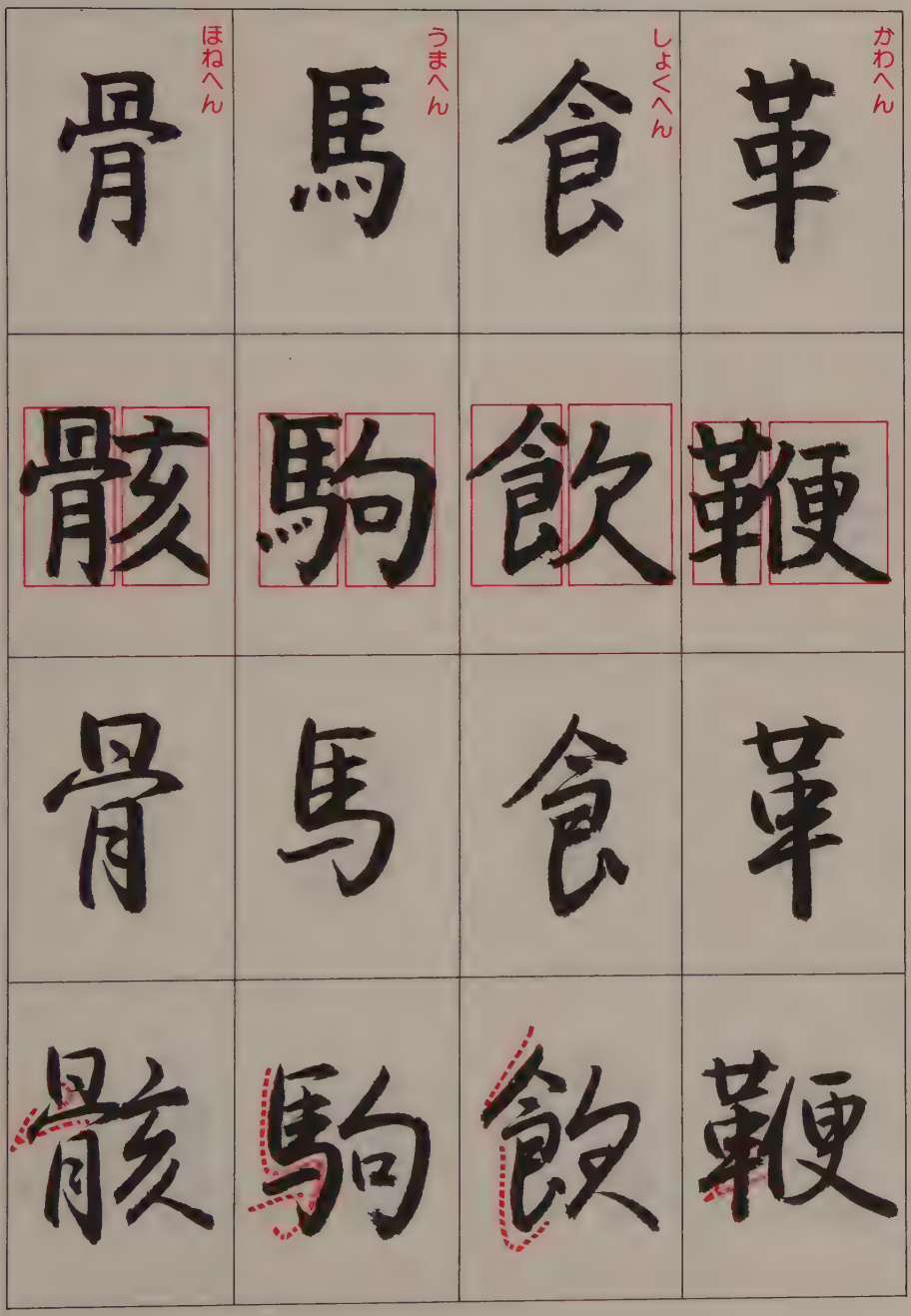

とりへん
こめへん
さとへん
かねへん
運筆の美しさを出す
穂先をきかして書く
続ける
横画を続ける

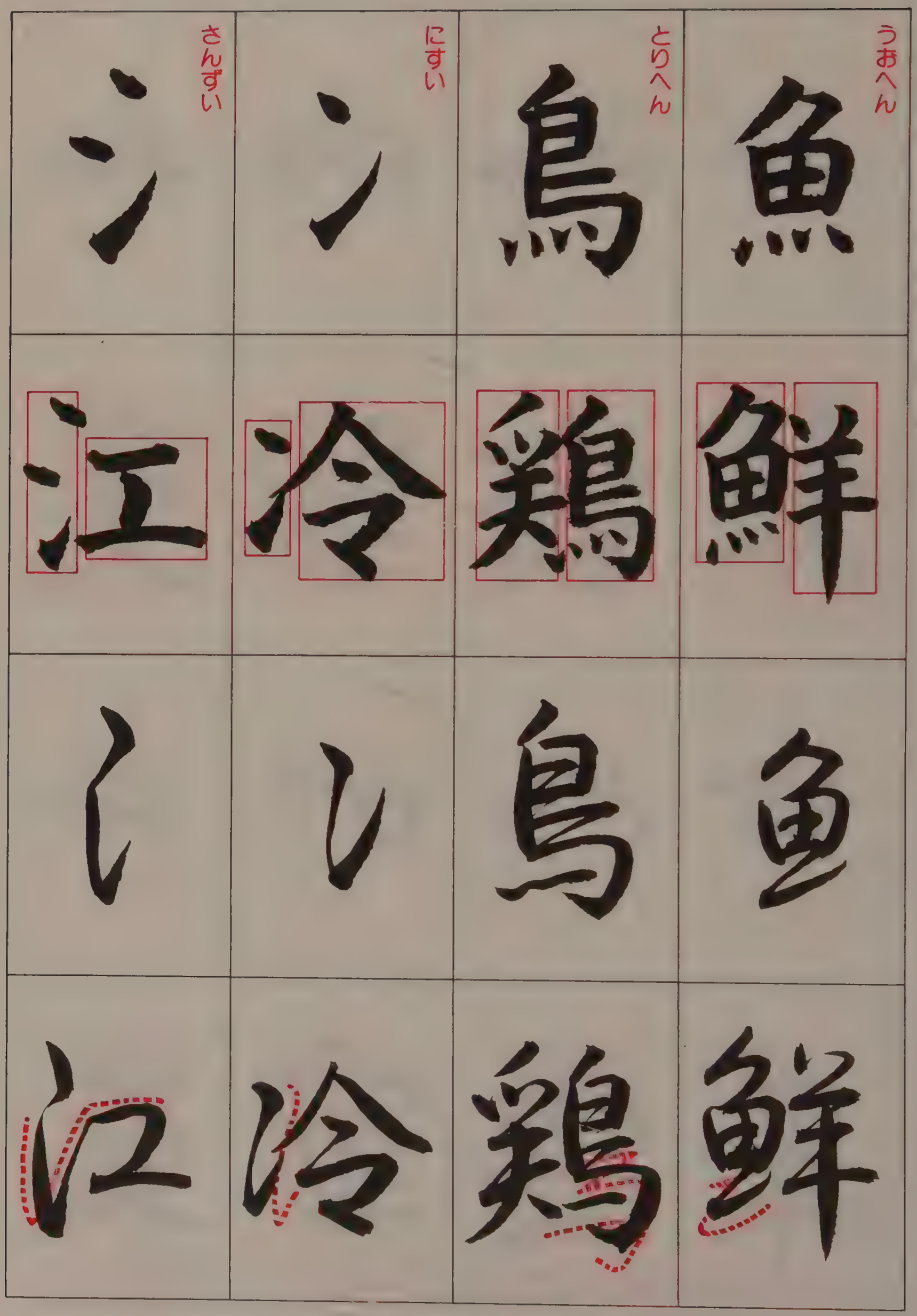
かわへん

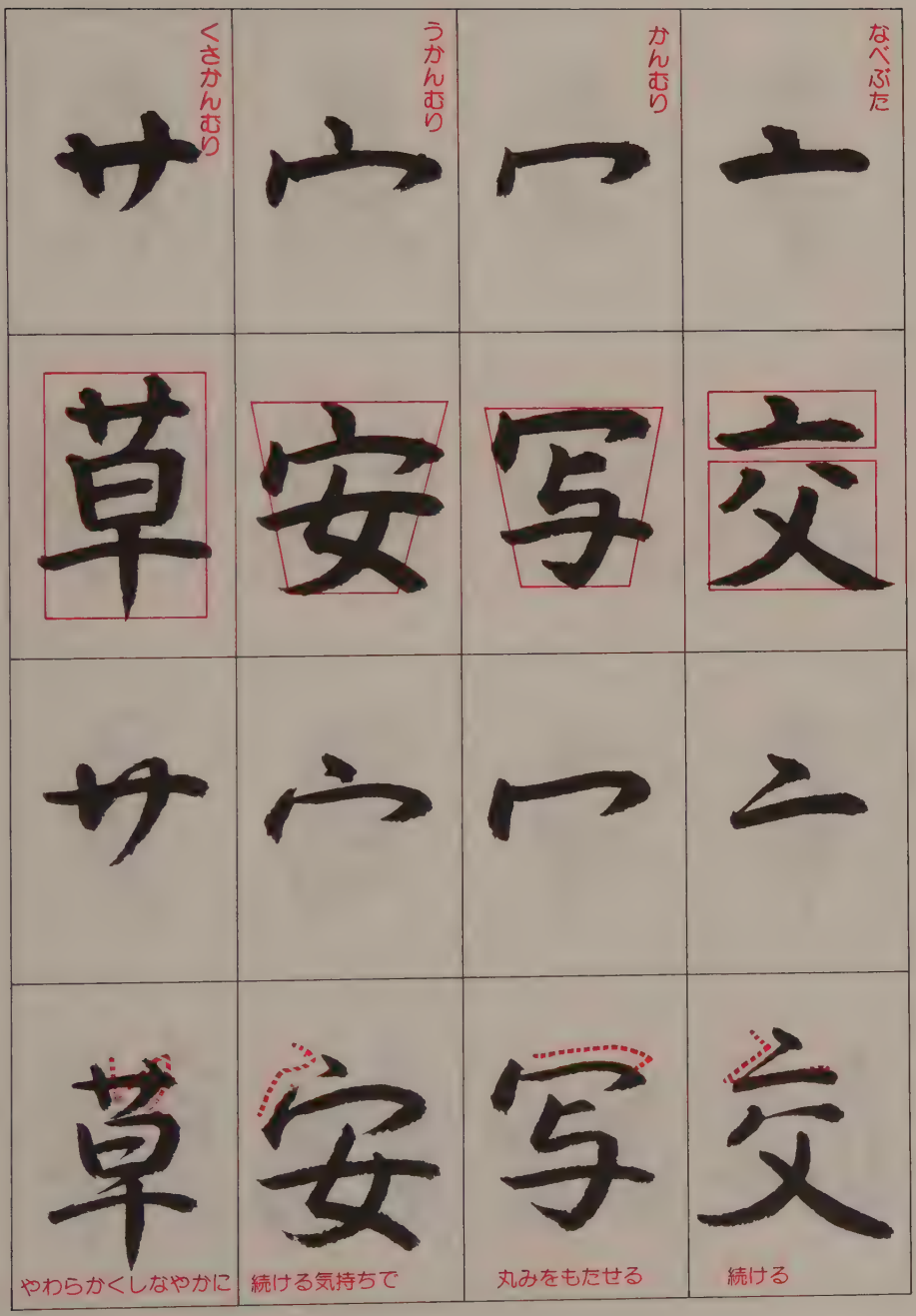
しょくへん

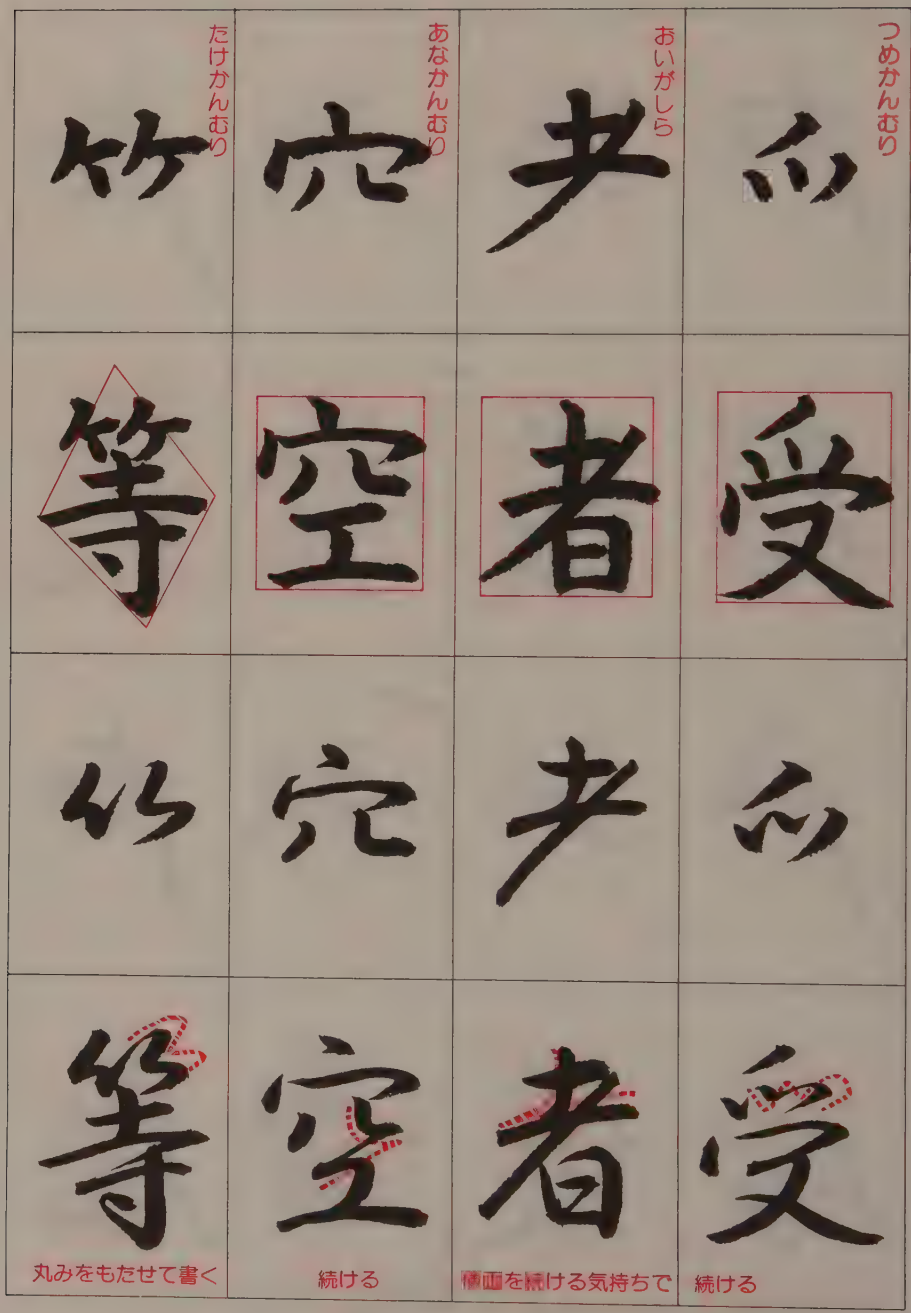
うまへん

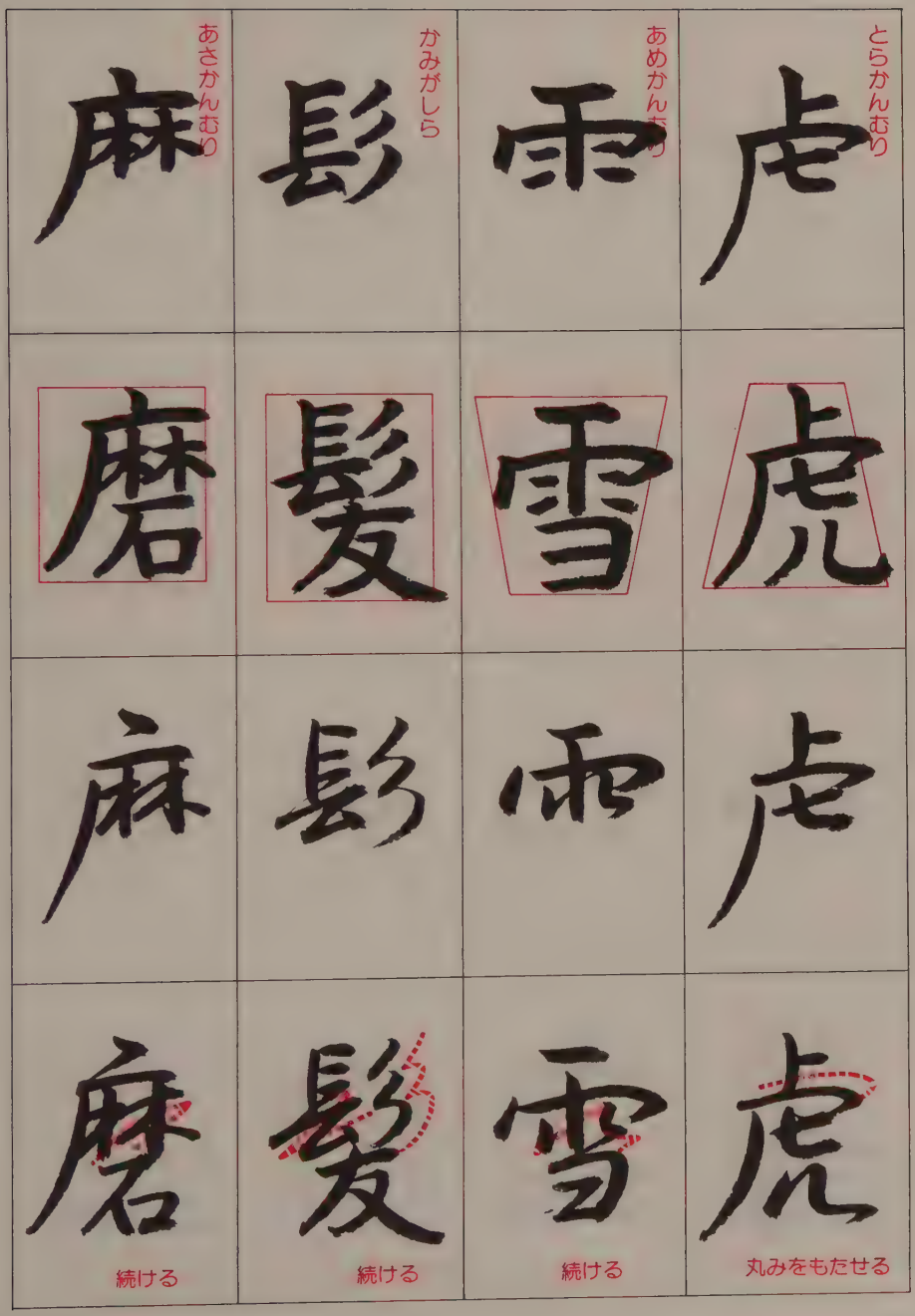
ほねへん

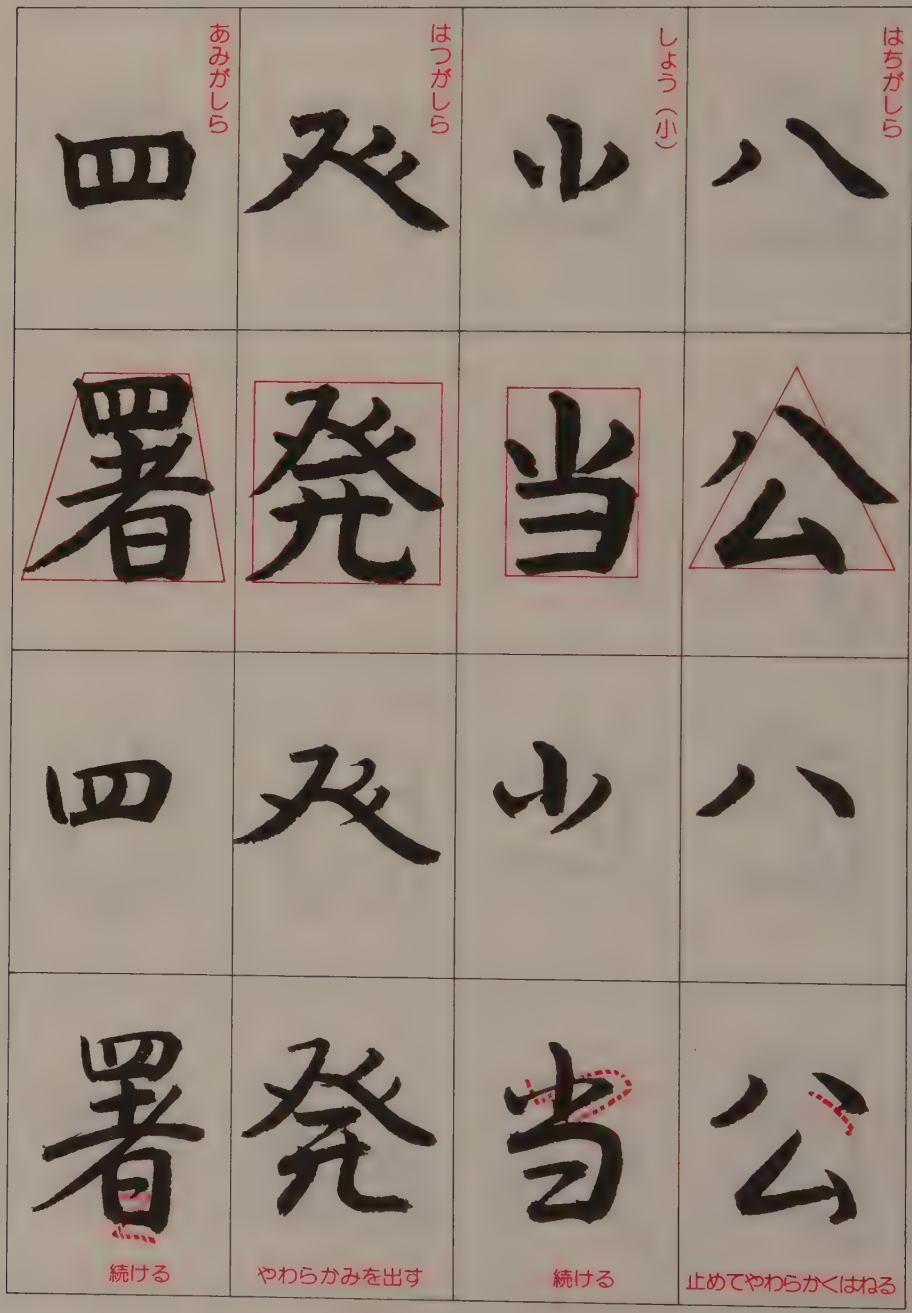


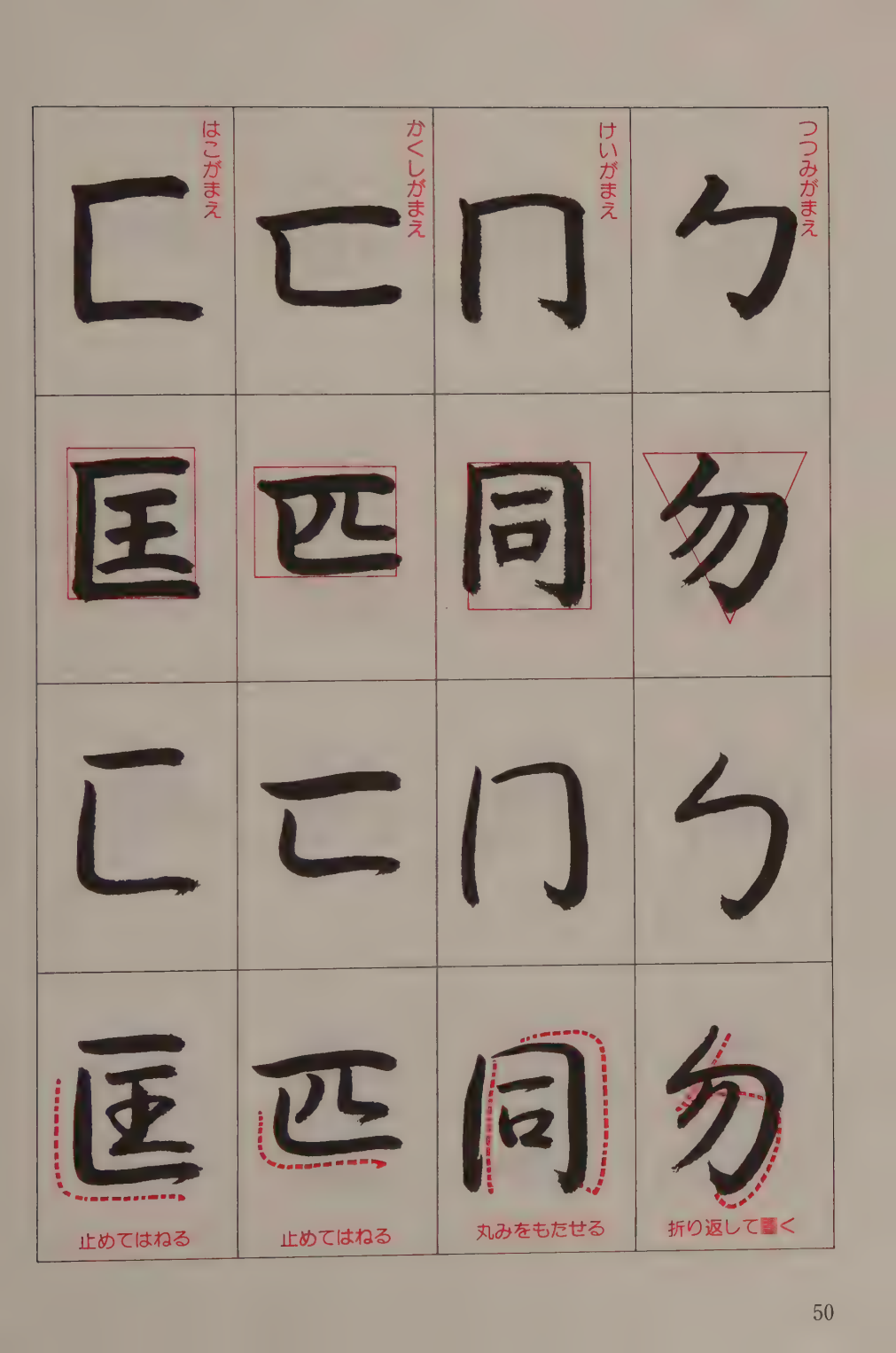

うおへん
魚
とりへん
鳥
にすい
冫
さんずい
氵
鮮
鶏
冷
江
魚
鳥
冷
鶏
鮮
江

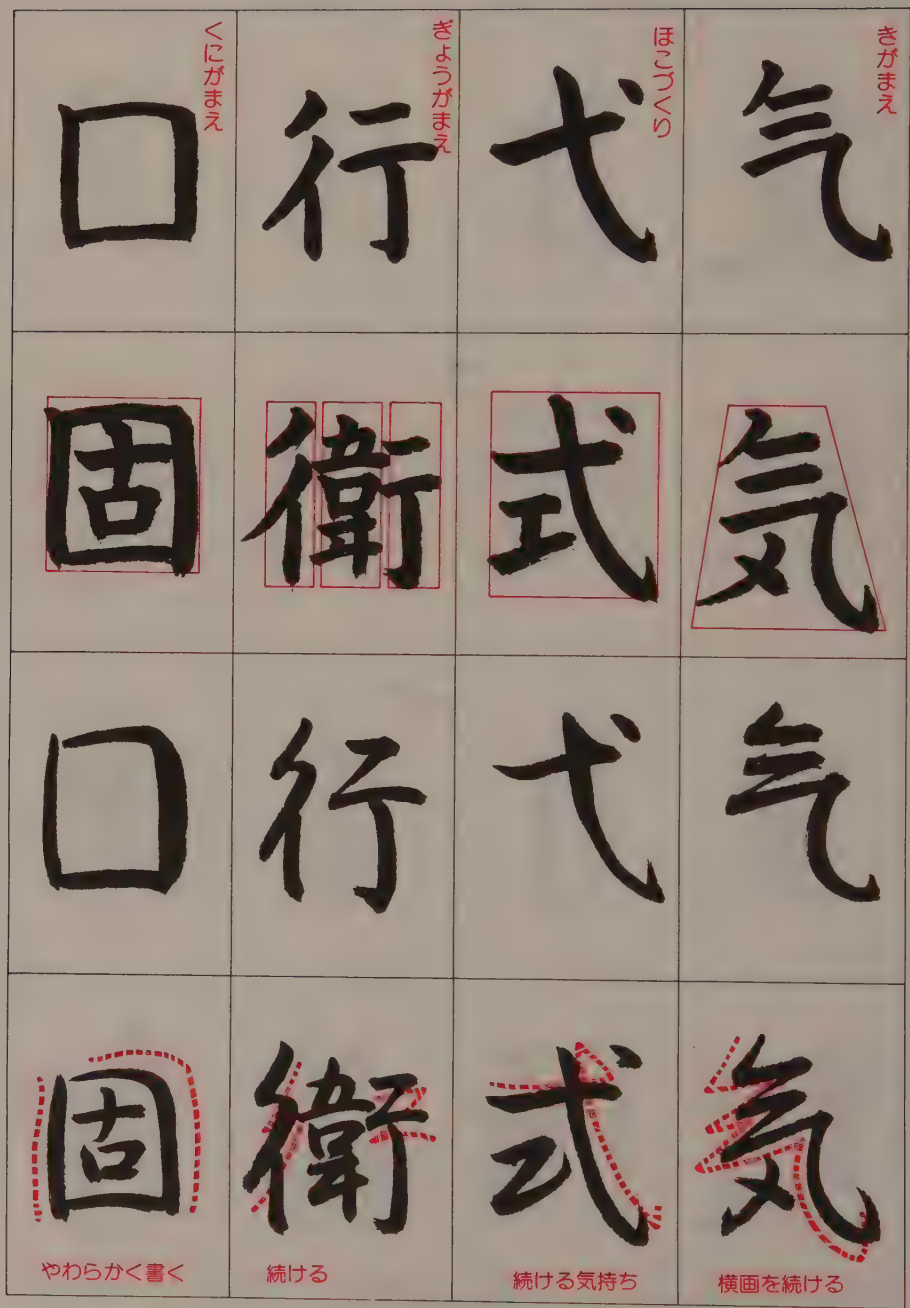

なべぶた
かんむり
うかんむり
くさかんむり
続ける
丸みをもたせる
続ける気持ちで
やわらかくしなやかに

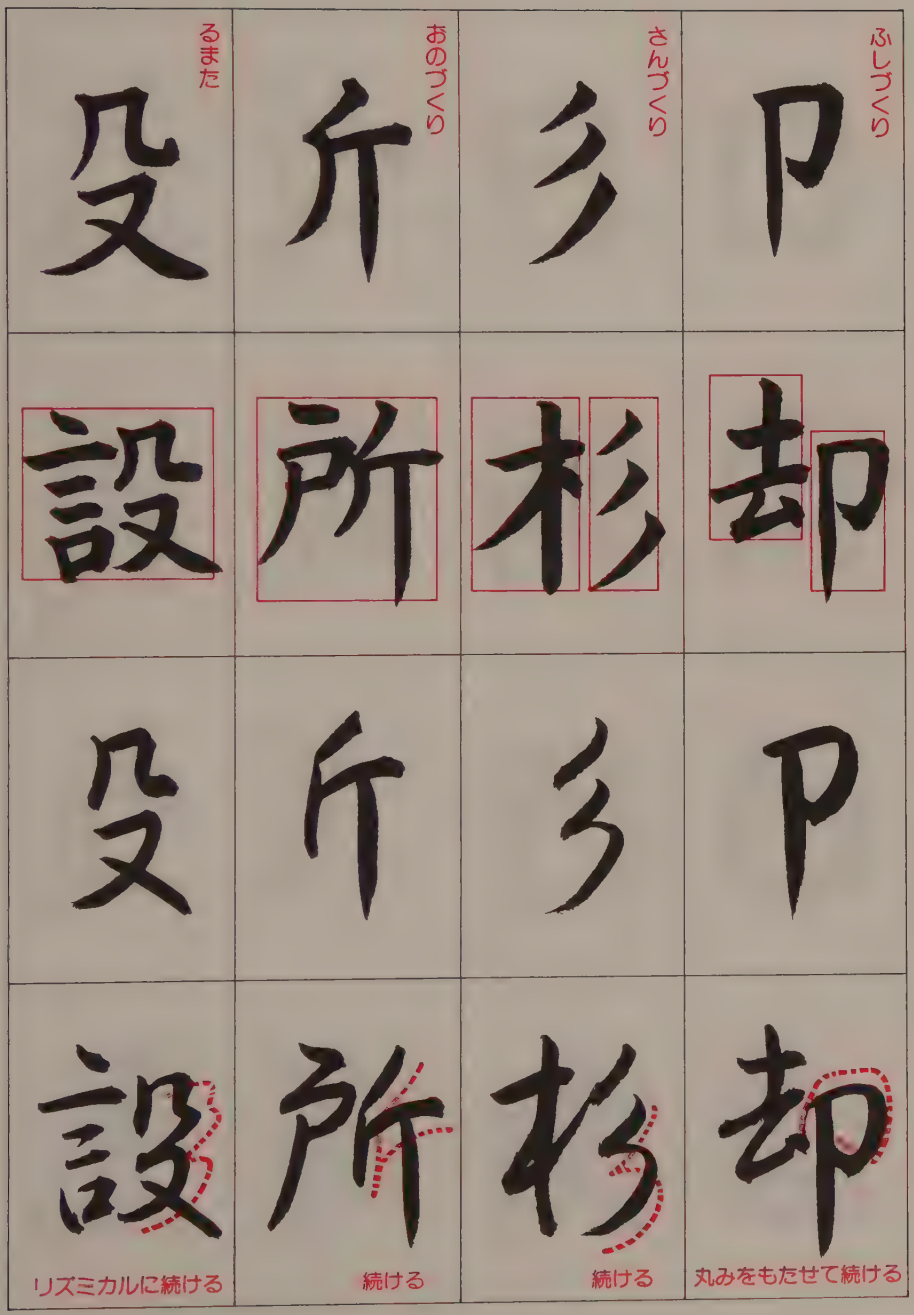

つめかんむり
おいがしら
あなかんむり
たけかんむり
受
者
空
等
受
者
空
等
丸みをもたせて書く
続ける
横画を続ける気持ちで
続ける

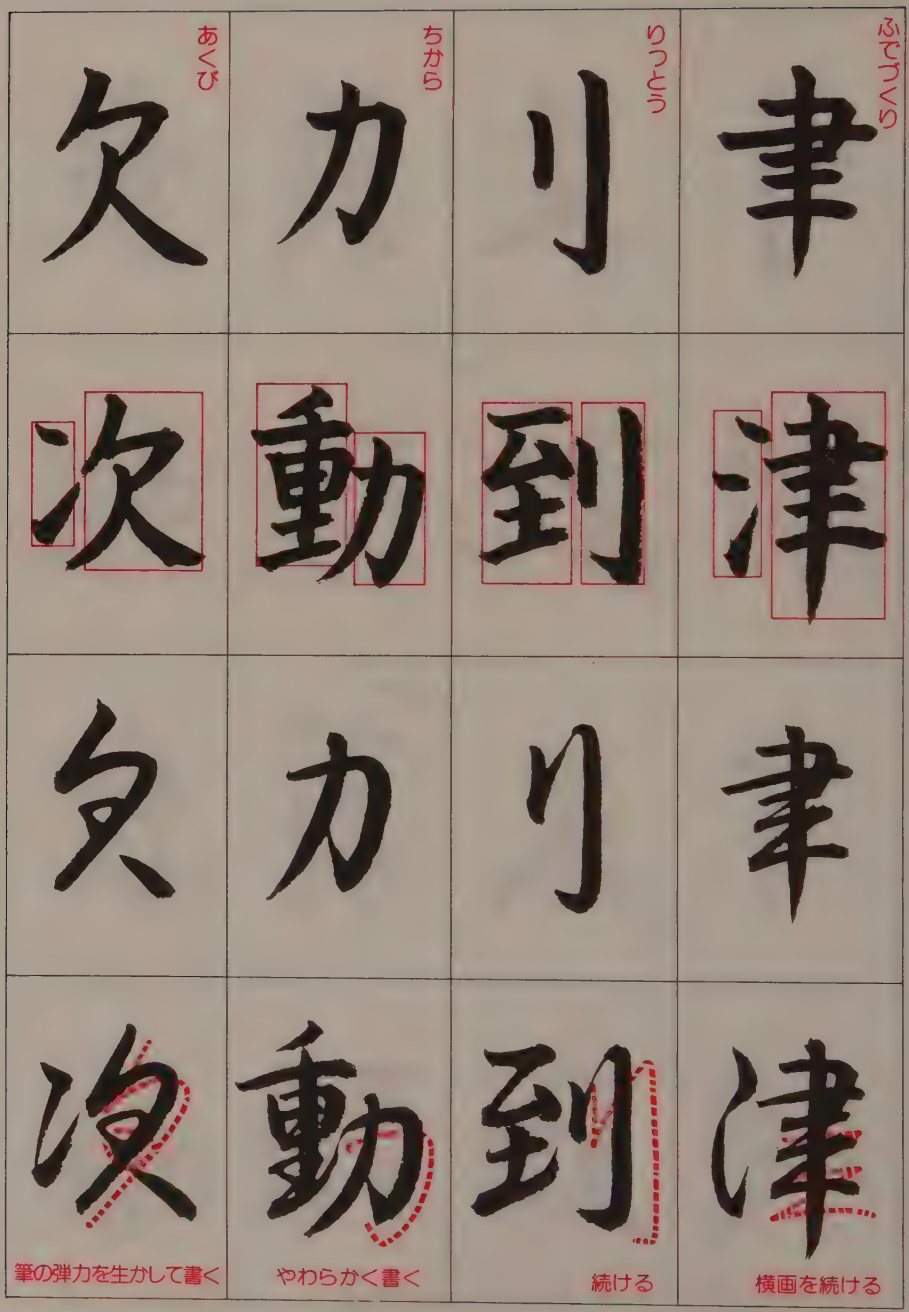

とらかんむり
あめかんむり
かみがしら
あさかんむり
丸みをもたせる
続ける
続ける
続ける

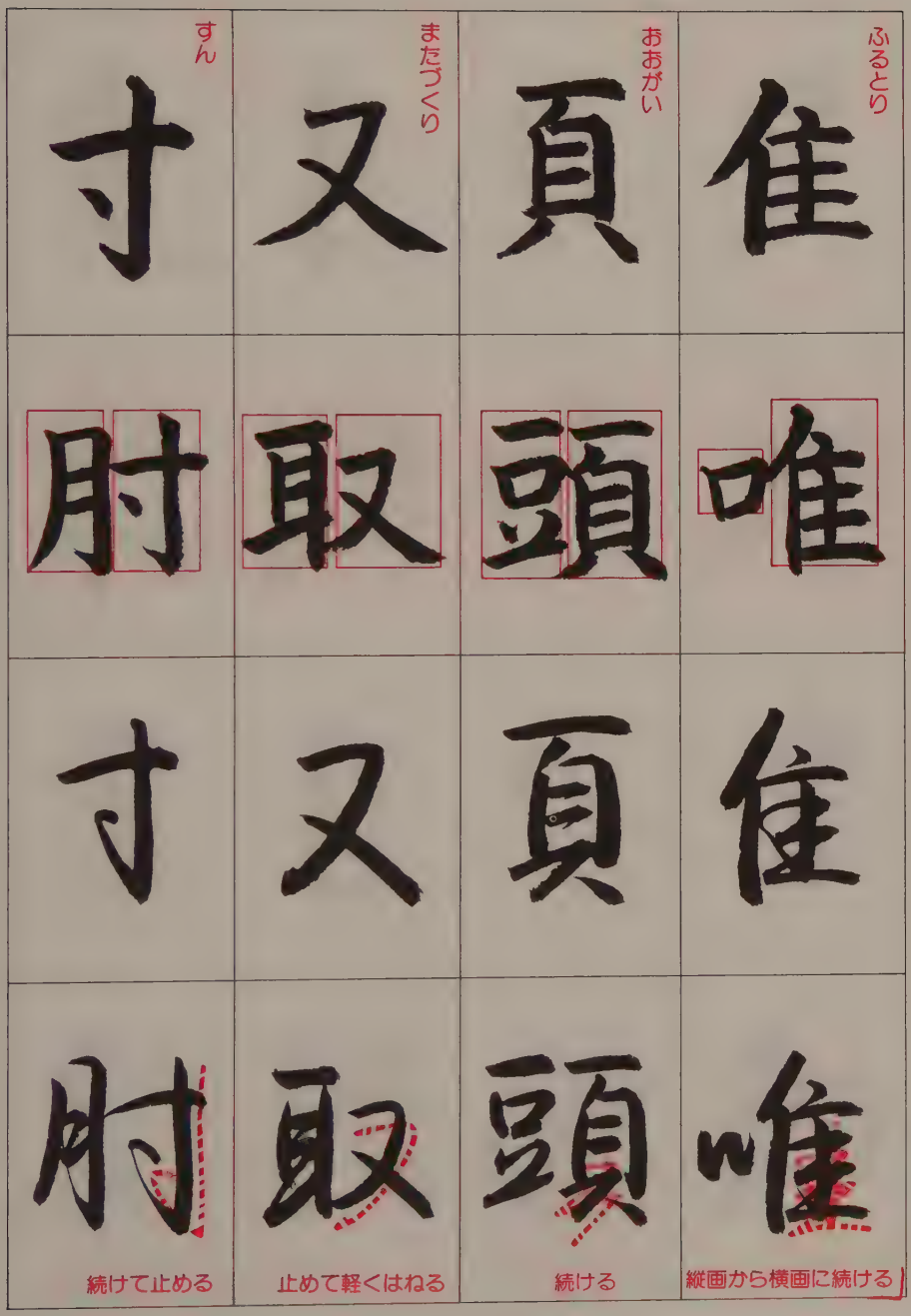

はちがしら
しょう（小）
はつがしら
あみがしら
止めてやわらかくはねる
続ける
やわらかみを出す
続ける

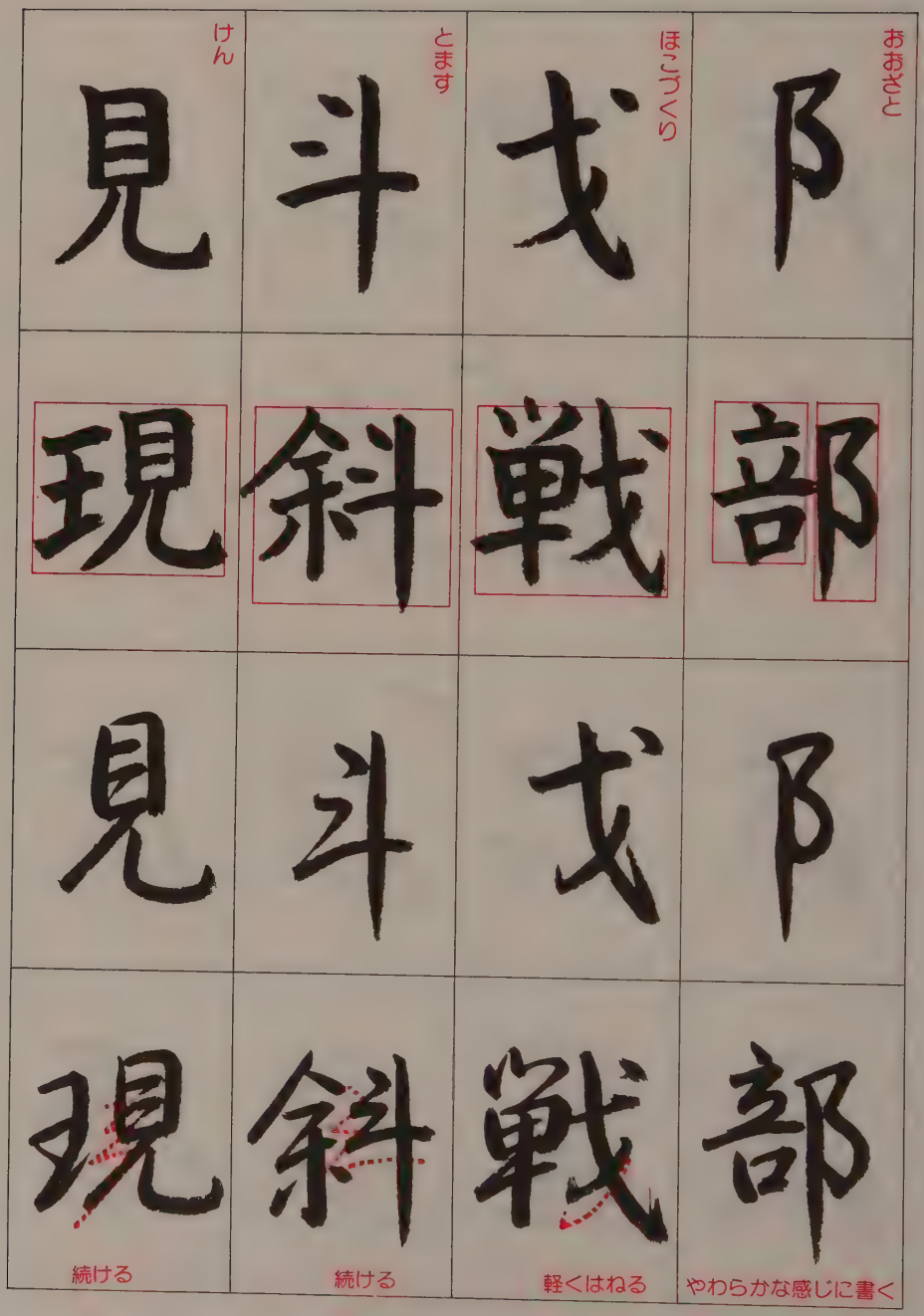

つつみがまえ
けいがまえ
かくしがまえ
はこがまえ
止めてはねる
止めてはねる
丸みをもたせる
折り返して書く

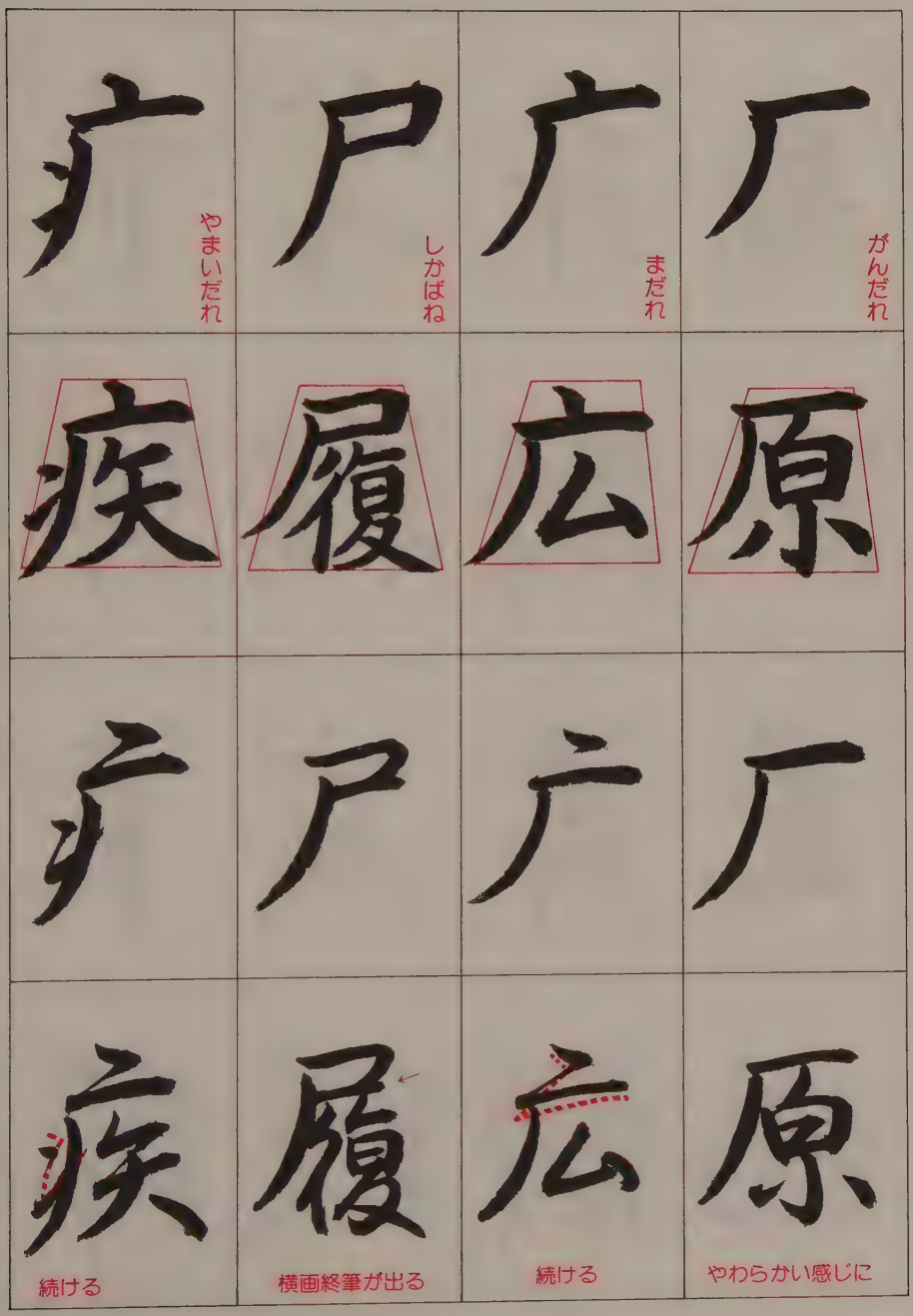

きがまえ
ほこづくり
ぎょうがまえ
くにがまえ
やわらかく書く
続ける
続ける気持ち
横画を続ける

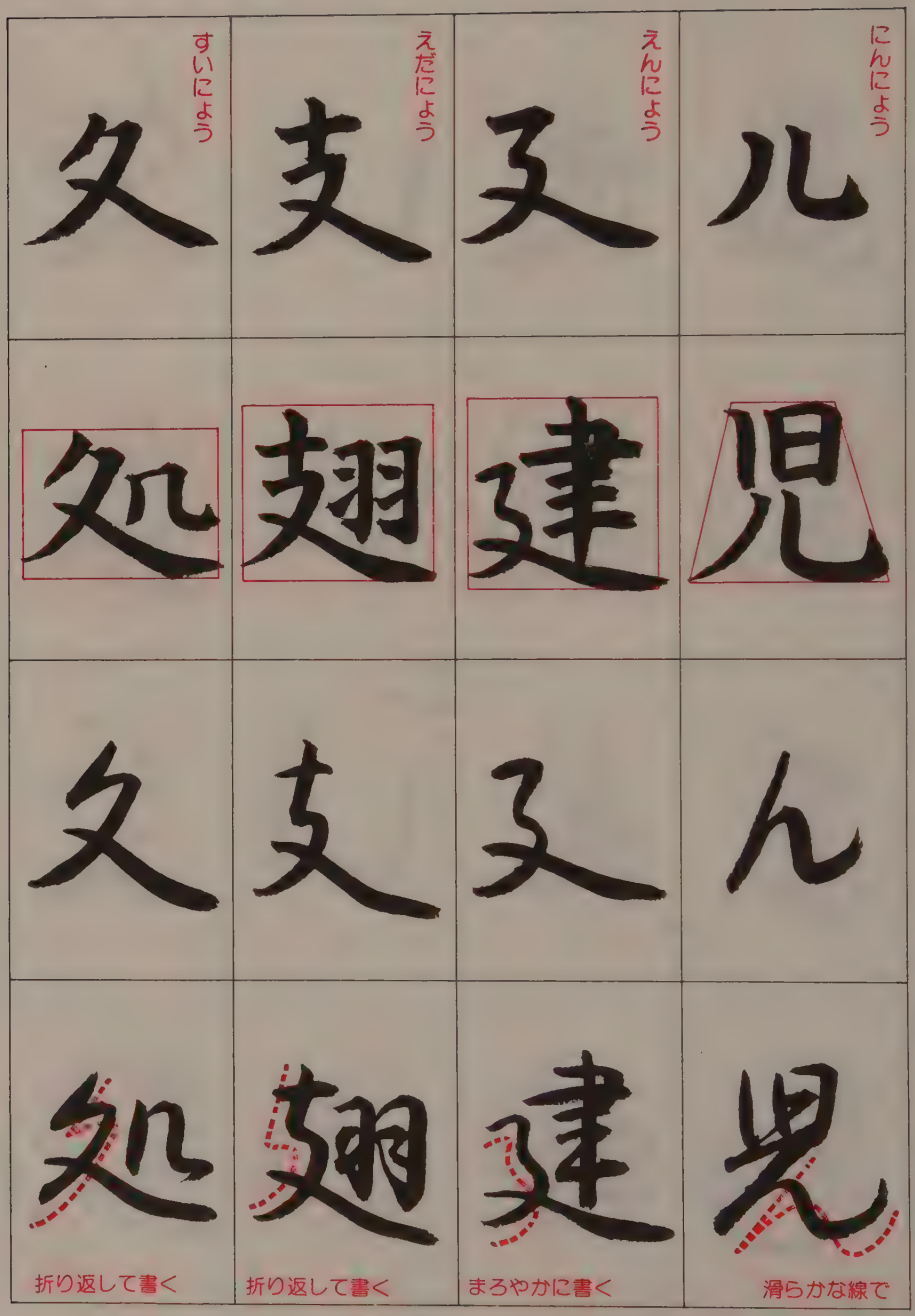

ふしづくり
さんづくり
おのづくり
るまた
丸みをもたせて続ける
続ける
続ける
リズミカルに続ける

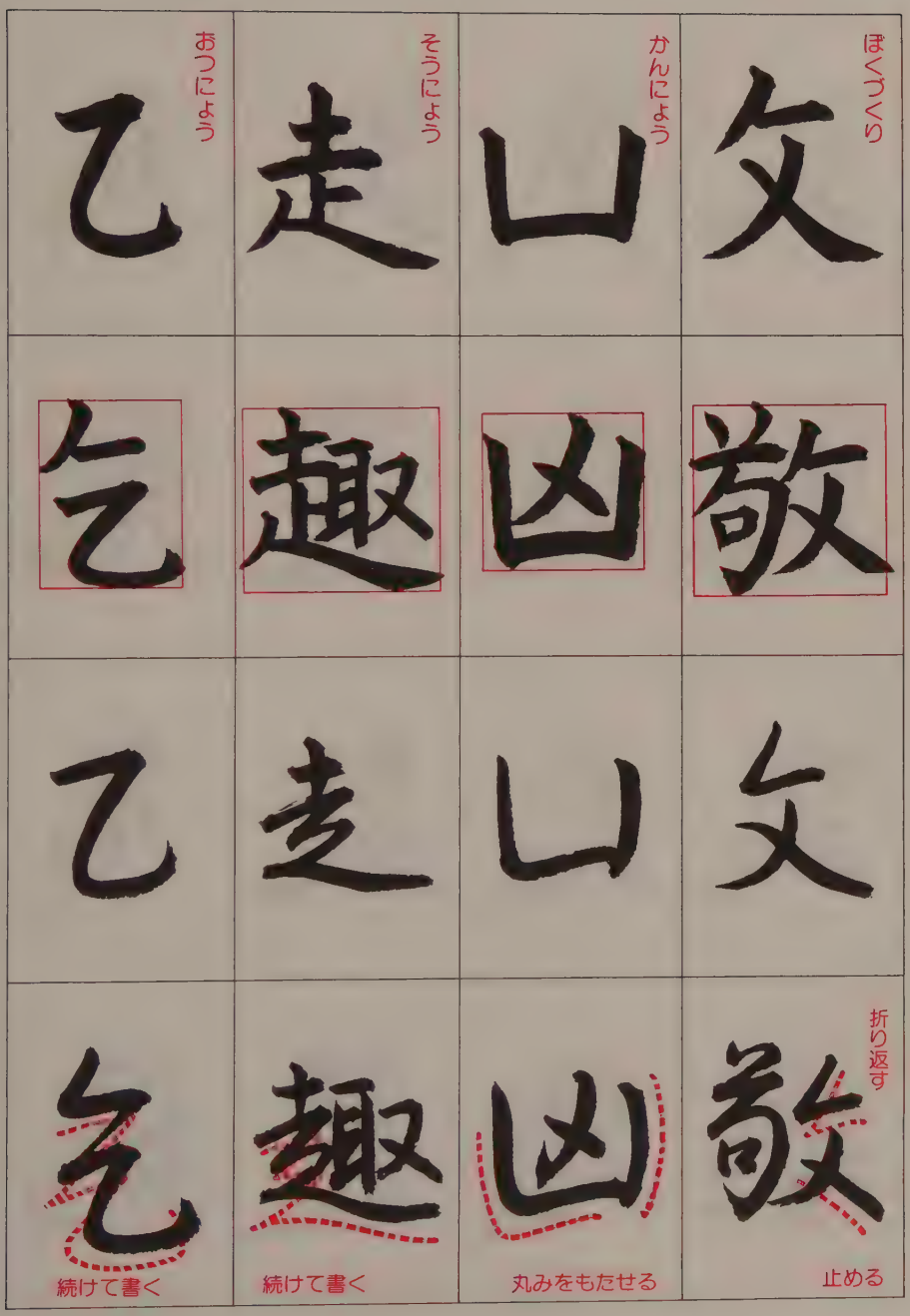

ふでづくり
りっとう
ちから
あくび
筆の弾力を生かして書く
やわらかく書く
続ける
横画を続ける

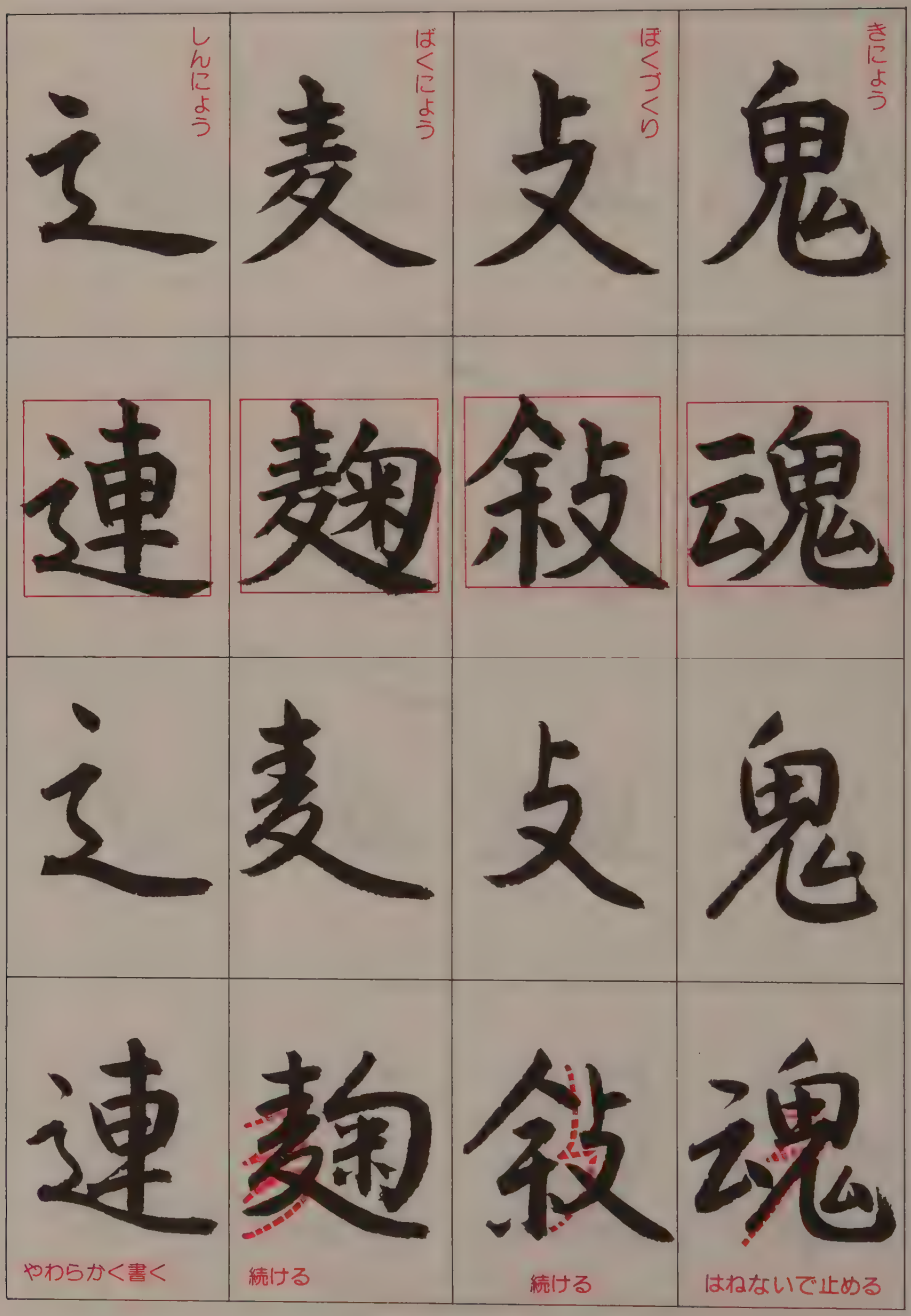

すん
寸
肘
寸
肘
続けて止める
またづくり
又
取
又
取
止めて軽くはねる
おおがい
頁
頭
頁
頭
続ける
ふるとり
隹
唯
隹
唯
縦画から横画に続ける


おおざと
ほこづくり
とます
けん
部
戦
斗
見
部
戦
斗
見
部
戦
斗
見
やわらかな感じに書く
軽くはねる
続ける
続ける

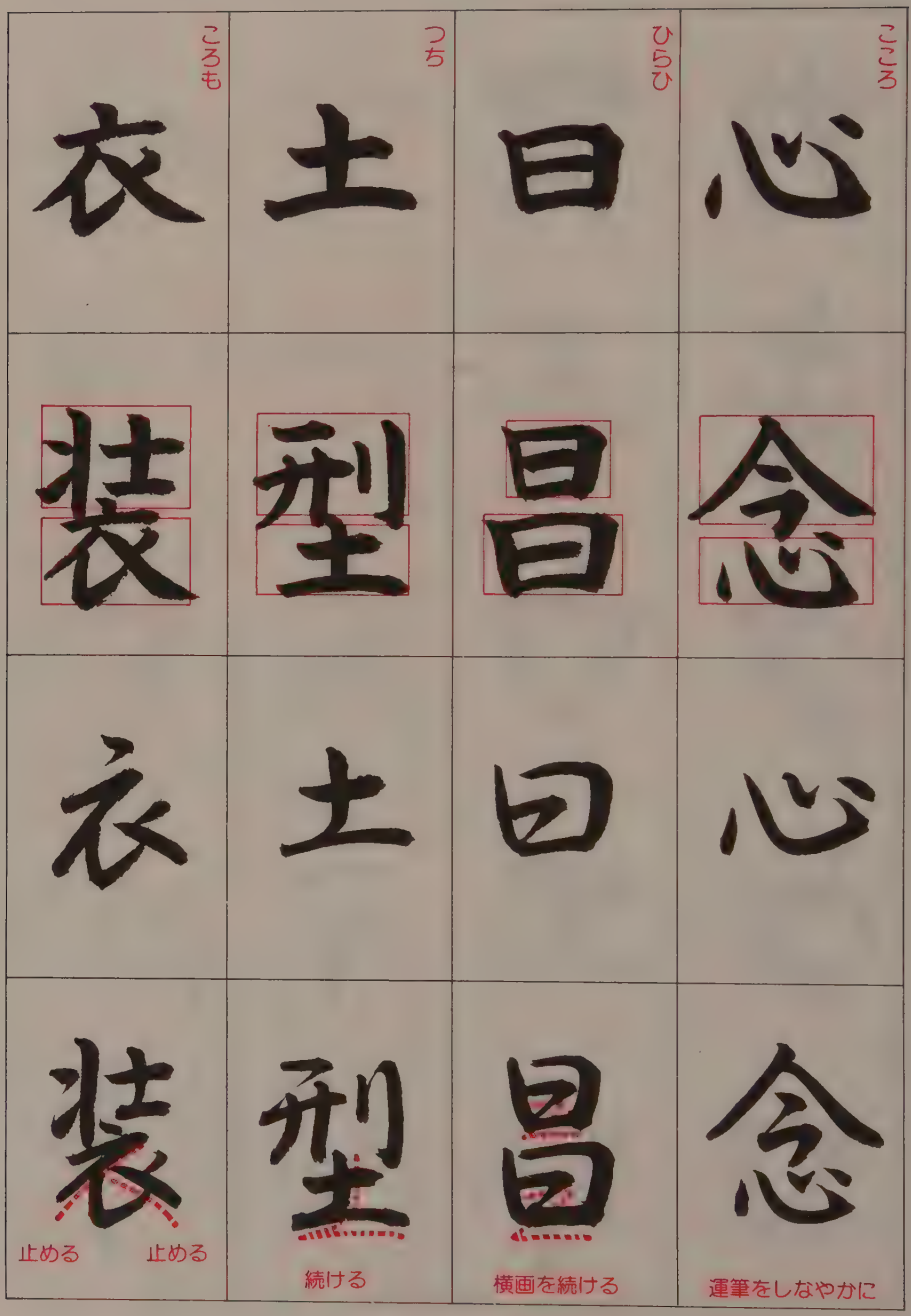

やまいだれ
しかばね
まだれ
がんだれ
疾
履
広
原
疾
履
広
原
続ける
横画終筆が出る
続ける
やわらかい感じに


にんにょう
えんにょう
えだにょう
すいにょう
折り返して書く
折り返して書く
まろやかに書く
滑らかな線で

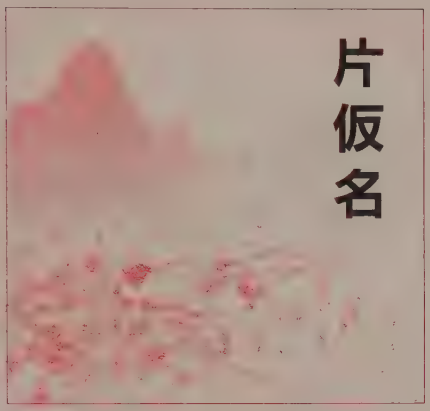

ぼくづくり
かんにょう
そうにょう
おつにょう
折り返す
止める
丸みをもたせる
続けて書く
続けて書く


きにょう
鬼
ぼくづくり
攴
ばくにょう
麦
しんにょう
辶
魂
殺
麹
連
鬼
攴
麦
辶
魂
殺
麹
連
はねないで止める
続ける
続ける
やわらかく書く

心 こころ	皿 さら	水 みず	灬 れつか
恭	監	泉	点
心	皿	水	灬
恭 続ける	監 続ける	泉 ソフトに書く	点 続ける


こころも
つち
ひらひ
こころ
衣
土
日
心
裝
型
昌
念
衣
土
日
心
裝
型
昌
念
止める
止める
続ける
横画を続ける
運筆をしなやかに

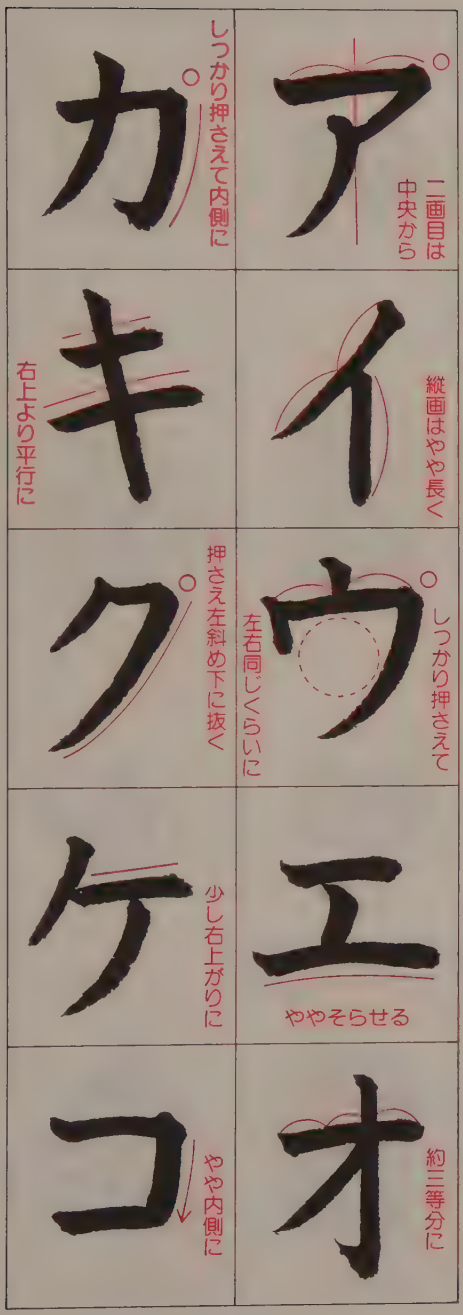
片仮名

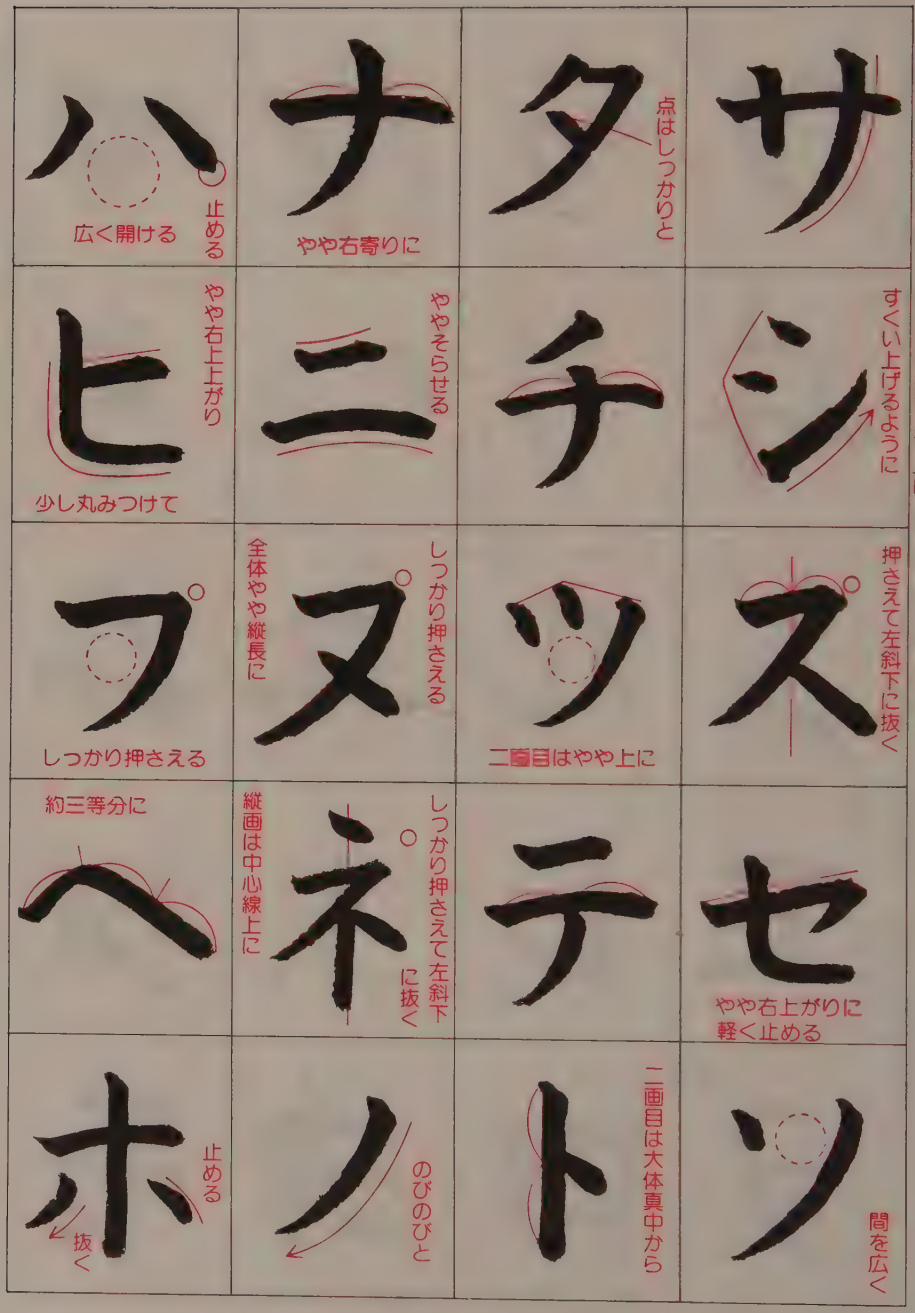


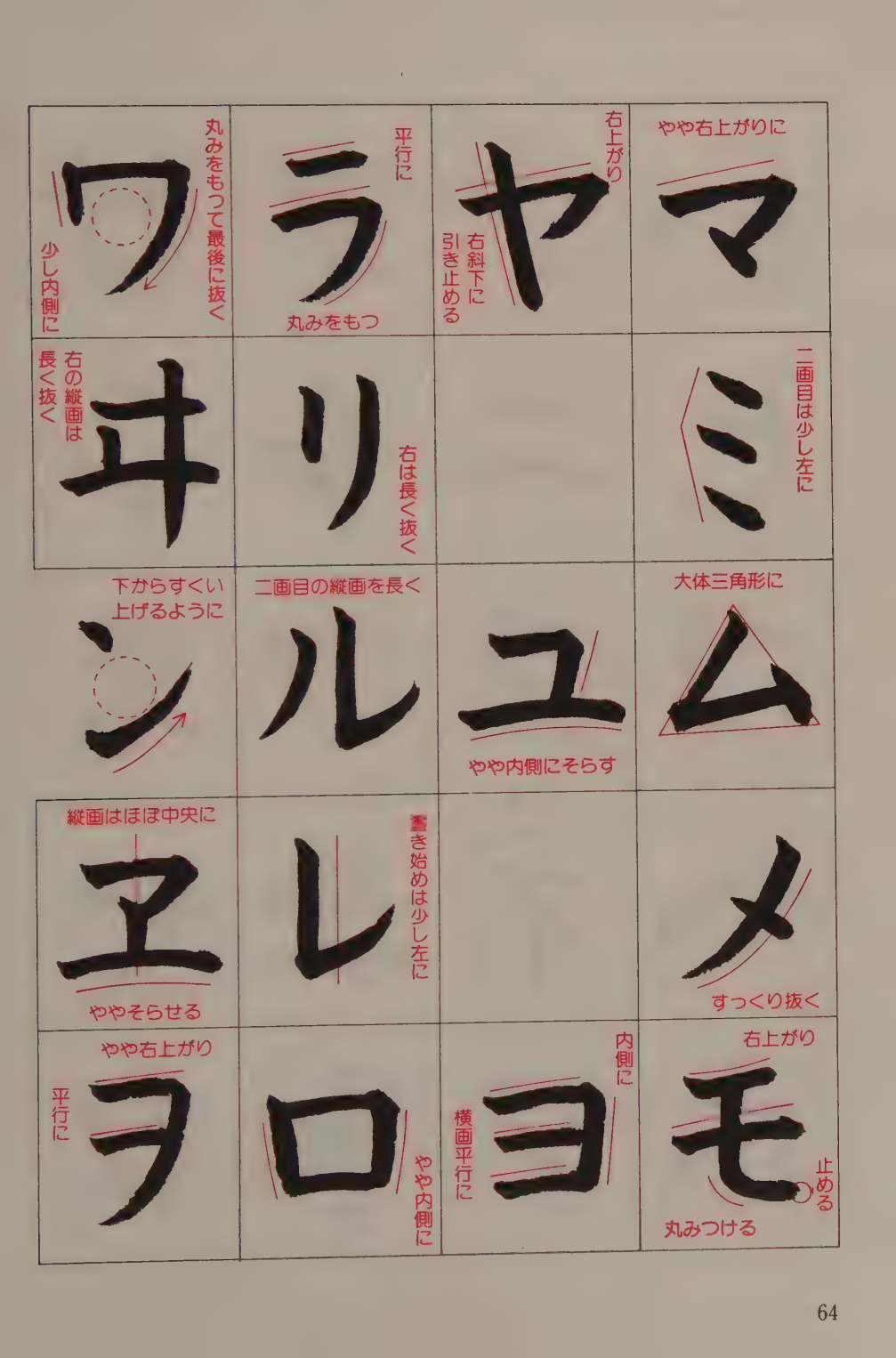
片仮名は、漢字の一部をとってつくられたものです。画数が少なく、形が単純で分かりやすいので、漢字の基本点画を勉強するのに、とても役立ちます。

もちろん、片仮名にも文字としての美しさがあります。それは、どちらかというと楷書の美しさです。一見、形がはっきりしていて書きやすいようにみえますが、点画のバランスが狂うと、みっともない字になります。ちょっとした違いで、別の字と間違えられることもありますので、一点、一画を曖昧に書くことは許されません。

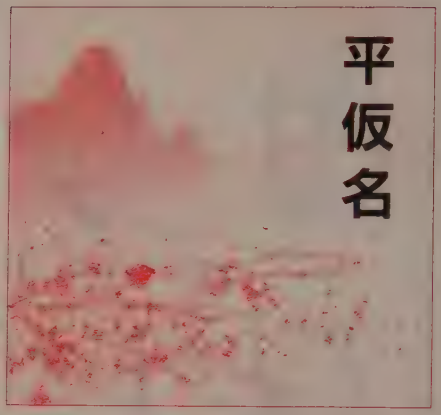
ですから楷書を書く時と同じように、起筆、終筆、転折など、点画をきちんと書くことが大事です。正しい形をしっかり書くことが、片仮名を美しくみせるコツです。




丸みをもって斜下に抜く
点はしっかりと
ややそらせる
しっかり押さえて上に
すくい上げるように
ハ
止める
広く開ける
ナ
ややそらせる
タ
チ
シ
ヒ
ややそらせる
ややそらせる
ニ
ヒ
ややそらせる
ヒ
少し丸みつけて
プ
しっかり押さえる
ヌ
しっかり押さえる
全体やや縦長に
ツ
二画目はやや上に
ス
押さえて左斜下に抜く
ヘ
約三等分に
ネ
しっかり押さえて左斜下に抜く
縦画は中心線上に
テ
セ
やや右上がりに
軽く止める
ホ
止める
抜く
ノ
のびのびと
ト
二画目は大体真中から
ソ
間を広く


ワ
丸みをもって最後に抜く
少し内側に
ラ
平行に
丸みをもつ
ヤ
右上がり
右斜下に
引き止める
マ
やや右上がりに
ヰ
右の縦画は
長く抜く
リ
右は長く抜く
ミ
二画目は少し左に
シ
下からすくい
上げるように
ル
二画目の縦画を長く
ユ
やや内側にそらす
ム
大体三角形に
ヱ
縦画はほぼ中央に
ややそらせる
レ
書き始めは少し左に
メ
すっくり抜く
ヲ
やや右上がり
平行に
ロ
やや内側に
ヨ
内側に
横画平行に
モ
右上がり
止める
丸みつける

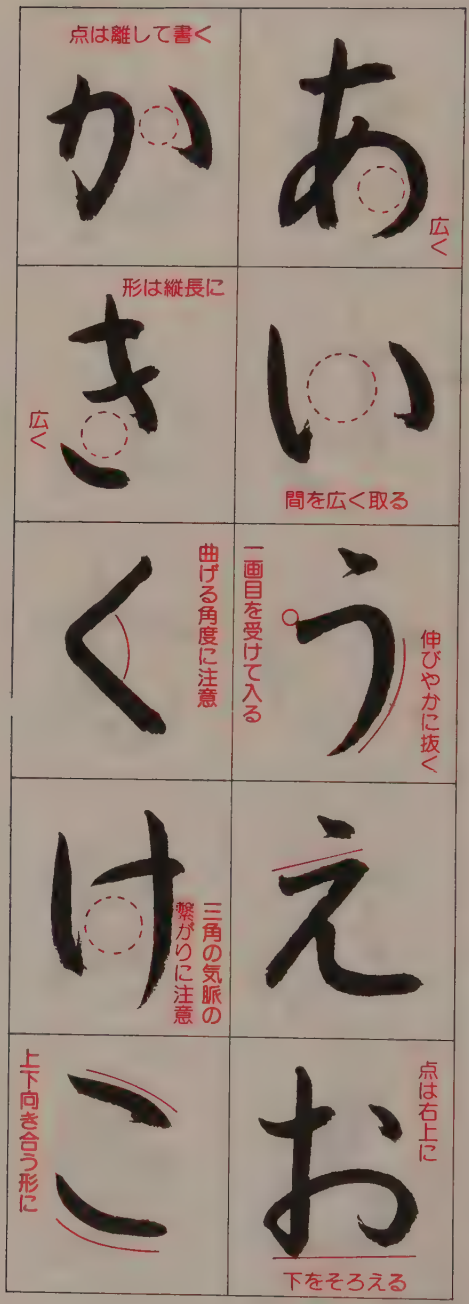
平仮名

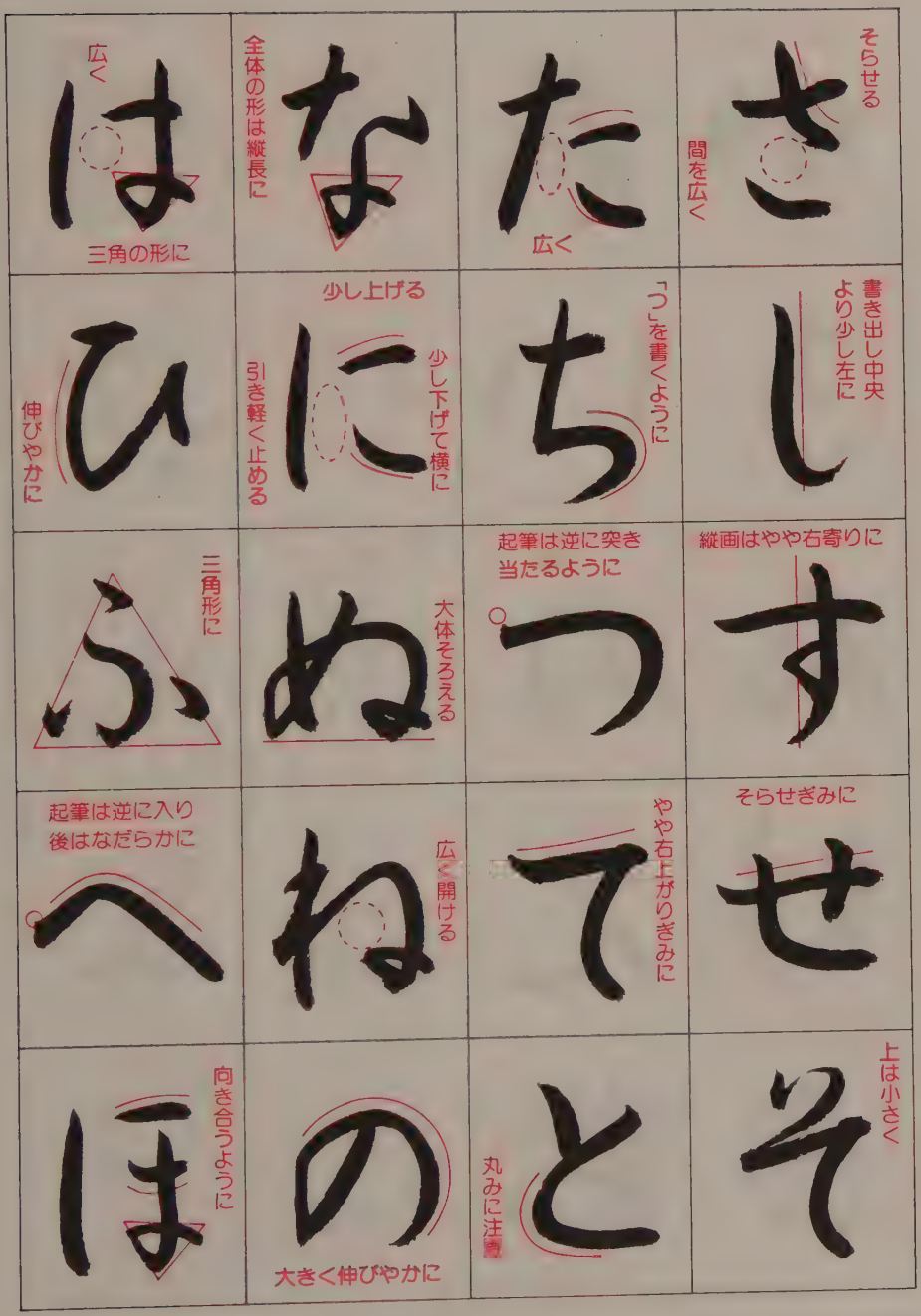


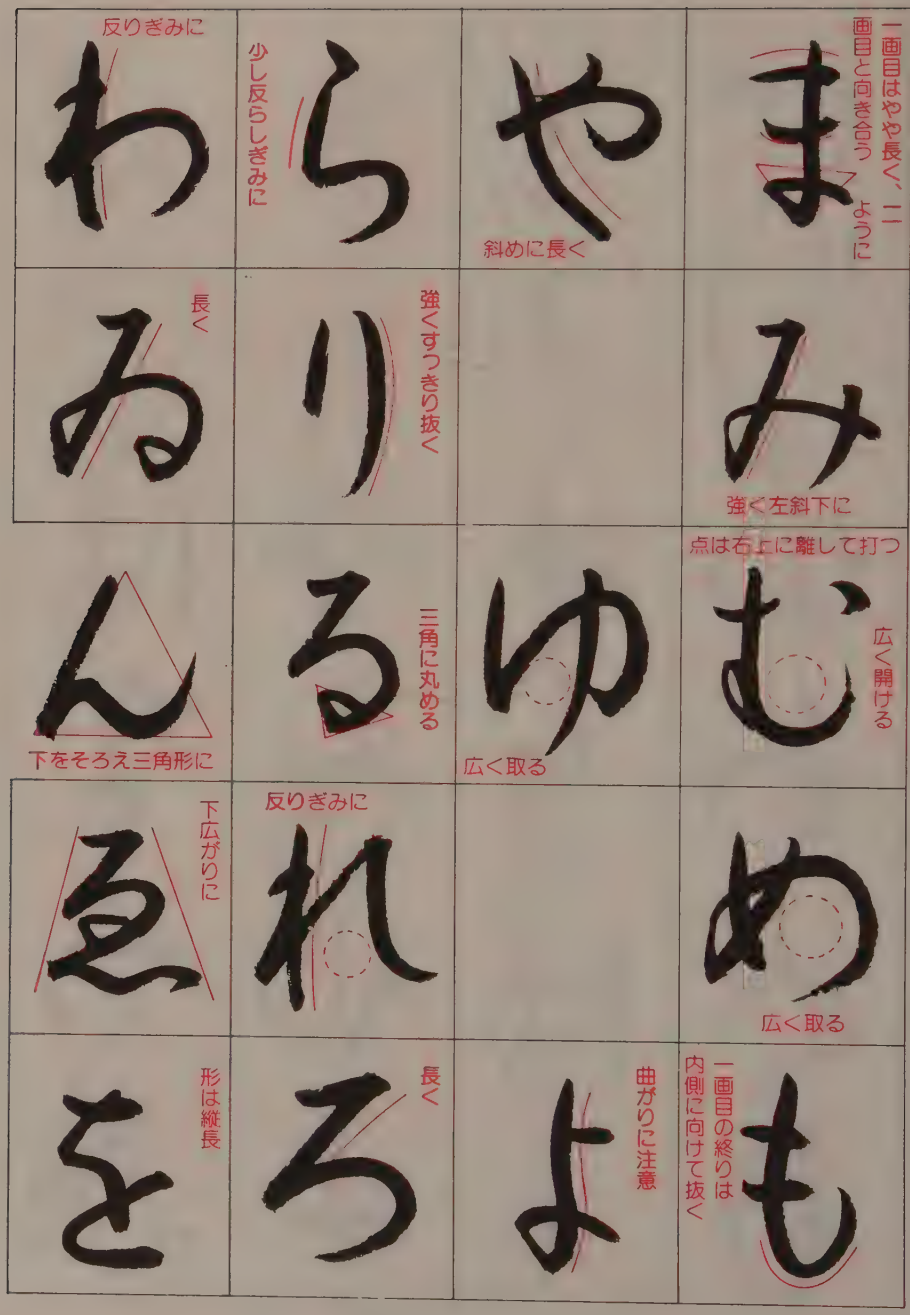
平仮名は、漢字の草書から発展してできたものです。点画が省略され、書きやすいことに加え、柔らかいみやびな線と平仮名特有のリズム感が、それまでの漢字にはなかったこともあって、最初のころは女手の文字とされていました。

しかし自由奔放な筆さばきで変化に富んだ表現ができるということは、当時としても画期的なことだったに違いありません。やがて書の世界にも、仮名書道の全盛期が訪れ数々の名作が生まれました。

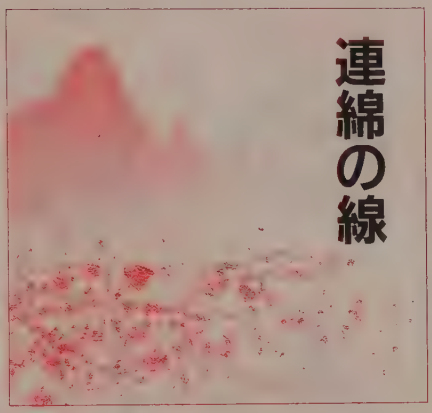
平仮名の魅力は、一にも二にも、流れるような線の美しさにあります。筆圧の強弱による線の変化、緩急によるリズム感を注意深く確認しながら、筆の運び方、抜き方、止め方、返し方などを、繰り返し練習しましょう。




そらせる
間を広く
さ
広く
た
全体の形は縦長に
な
広く
三角の形に
は
書き出し中央
より少し左に
し
「つ」を書くように
ち
少し上げる
少し下げて横に
引き軽く止める
に
伸びやかに
ひ
縦画はやや右寄りに
す
起筆は逆に突き
当たるように
つ
大体そろえる
ぬ
三角形に
ふ
そらせぎみに
せ
やや右上がりぎみに
て
広く開ける
ね
起筆は逆に入り
後はなだらかに
へ
上は小さく
そ
丸みに注意
と
大きく伸びやかに
の
向き合うように
ほ


一画目はやや長く、二画目と向き合うように
ま
斜めに長く
や
少し反らしぎみに
ら
反りぎみに
わ
強く左斜下に
み
強くすっきり抜く
り
長く
る
点は右上に離して打つ
広く開ける
む
広く取る
ゆ
三角に丸める
る
下をそろえ三角形に
ん
広く取る
め
反りぎみに
れ
下広がりに
ゑ
一画目の終りは内側に向けて抜く
も
曲がりに注意
よ
長く
ろ
形は縦長
を

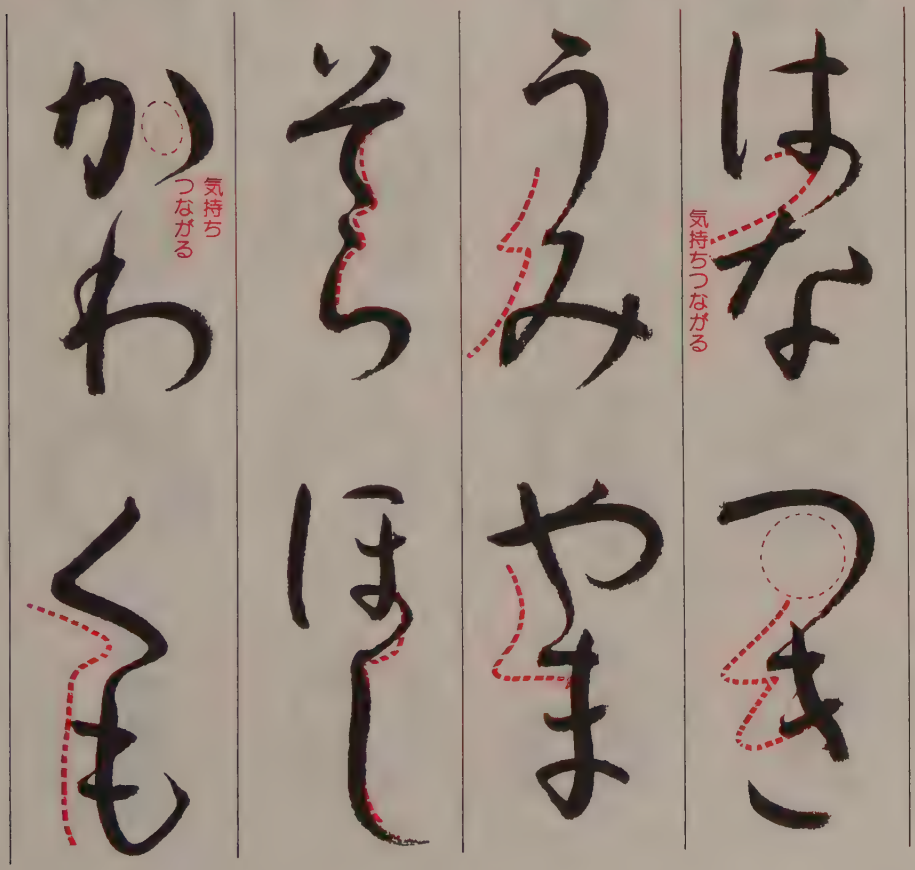
連綿の線

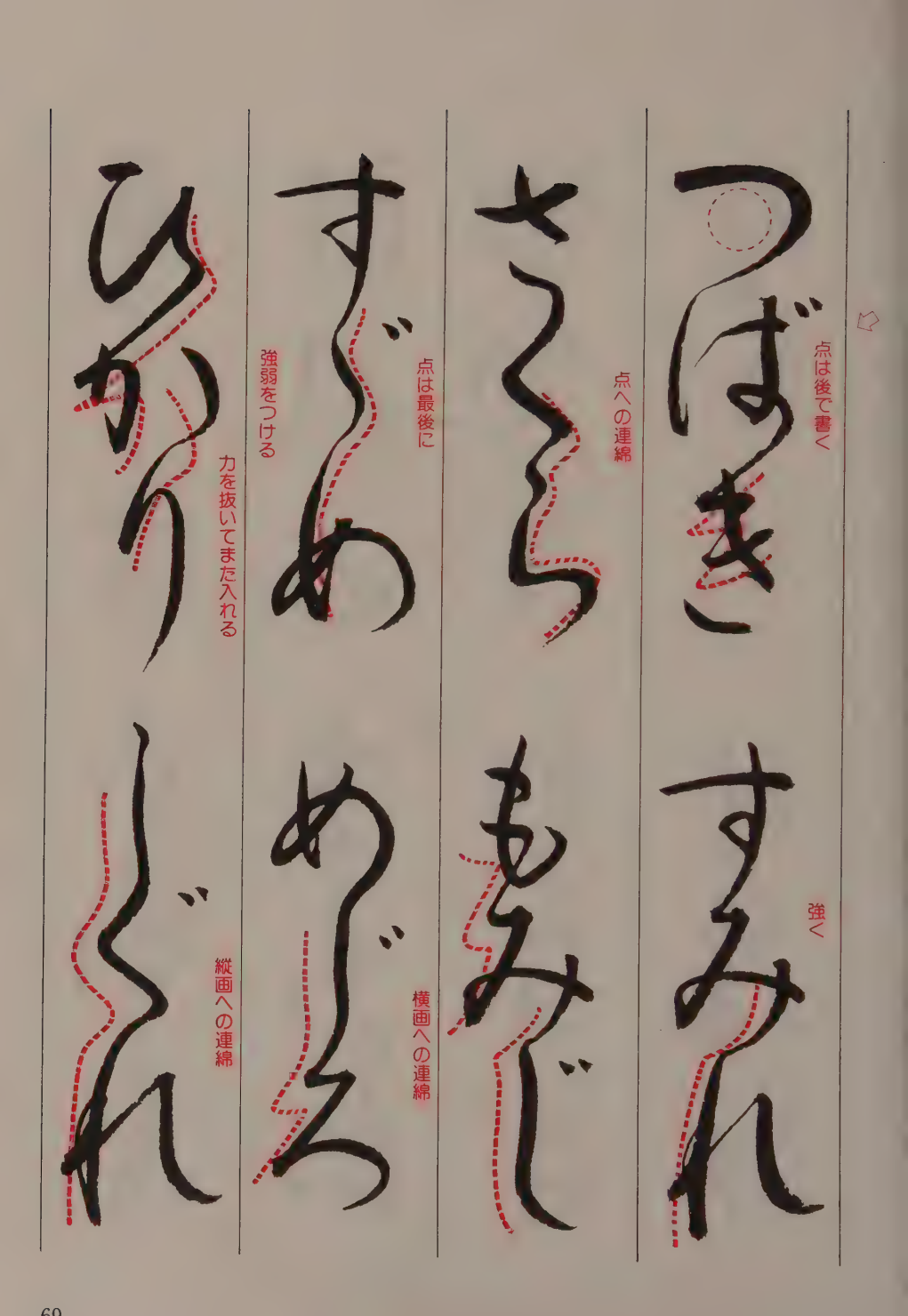


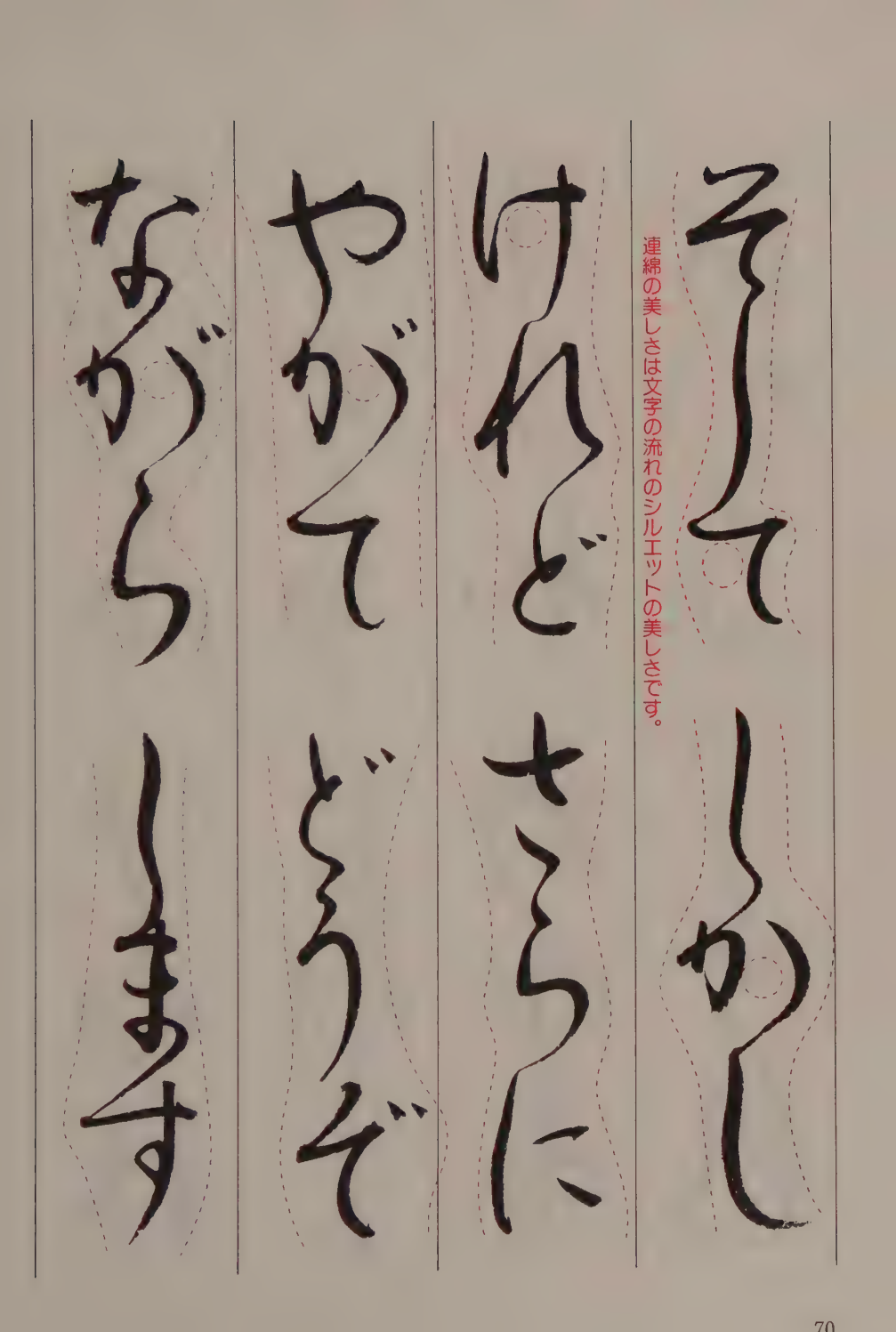
続けて書いた文字を連綿体といいますが、この変化に富む連綿の線は、平仮名の美しさを強調する最も特徴的なものです。

しかし連綿には、きまった用筆法はありません。すべて臨機応変ですから、書いた人の書の力量がそれで分かります。

基本の形を習得した上で、形の大小、線の太細、運筆の緩急などを工夫しながら練習しましょう。




点は後で書く
強く
点への連綿
横画への連綿
点は最後に
強弱をつける
力を抜いてまた入れる
縦画への連綿



連綿の美しさは文字の流れのシルエットの美しさです。

ゆきどけ　はるかぜ

ひまわり　ゆうだち

ほしぞら　しらつゆ

こがらし　はつしも

このたびは　こころから
おかげさま　つきまして
とりあえず　いずれまた
さらやかな　あらためて

海に浮かぶ寝殿造りや朱塗りの大鳥居など宮島はまるで竜宮城のよう　扁　昭

うみにうかぶ
しんでんづくりや
しゅぬりの
おおとりい　など
みやじまは　まるで
りゅうぐうじょう
のよう

漢字仮名まじり文

私たちが日常的に書く文章は、漢字と平仮名のまじったものがほとんどです。楷、行の漢字と平仮名では、もともと形が違います。しかしこの異なる書体を混ぜて書くと、お互いの特徴的な美しさが相互作用で生きてきます。

楷書の場合は筆脈がとぎれないように注意し、行書の場合は連綿の流れを意識して、全体の調和をとりながら書く練習をしましょう。

漢字はやや大きめに書く

早春、日当りの

よい野原には

りんどうの花が

咲いています。

訪れる度に新鮮な感動を
覚える大都会、上海。モダンな
街並みと明るい雰囲気が
調和した開放的な町です。

水は誠に不思議なもの
流れ淀み、騒ぎ、荒れる
その変幻で周辺の景色や
環境、人々の生活を変える。

男体山　女体山の双峰からなり　歴史とロマンを秘めた筑波山

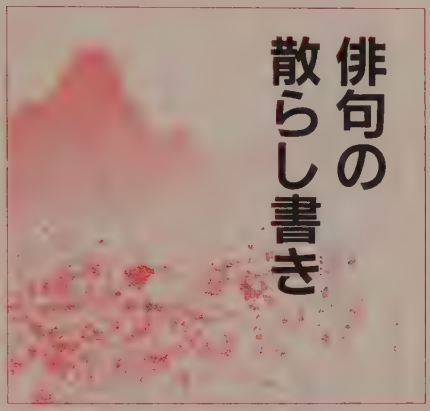
男体山 女体山の
双峰からなり

歴史と
ロマンを
秘めた筑波山

頭をそろえないで変化させる

空間の流れ

俳句の散らし書き

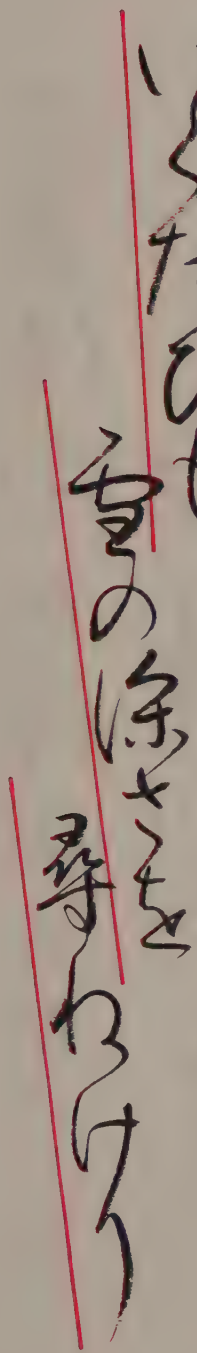


楷書、行書、仮名、連綿を一通り学んできました。しかし毛筆の文字となると、やはり紙面の空間を巧みに生かす「散らし書き」にも挑戦してみたくなります。

最近は俳句が大変なブームです。この世界にも類例のない、五七五のリズムをきざむ十七字（音）の短い詩型は、散らし書きの勉強には格好のものです。

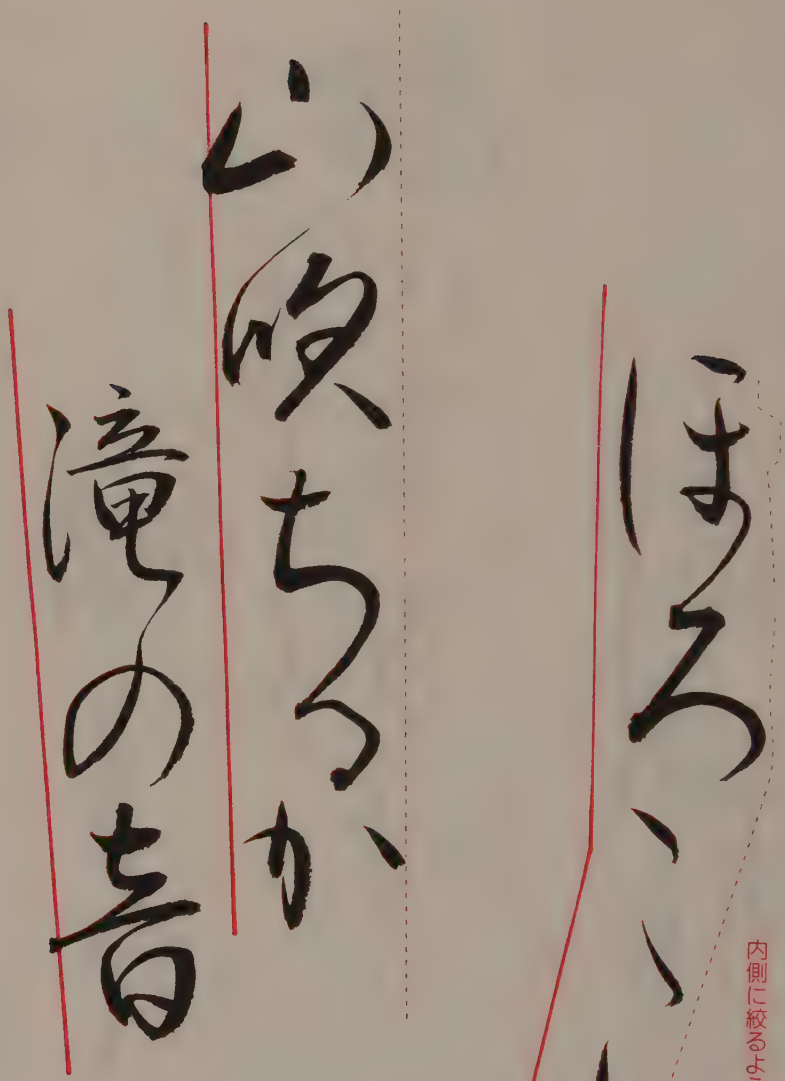
散らし書きには、とくに決められた形があるわけではありませんが、暗黙の用筆法があります。それは行の書き出しや終わりの部分を揃えないということです。また筆に墨をつぐ時も、各行の同じ高さの位置でしないのがふつうです。

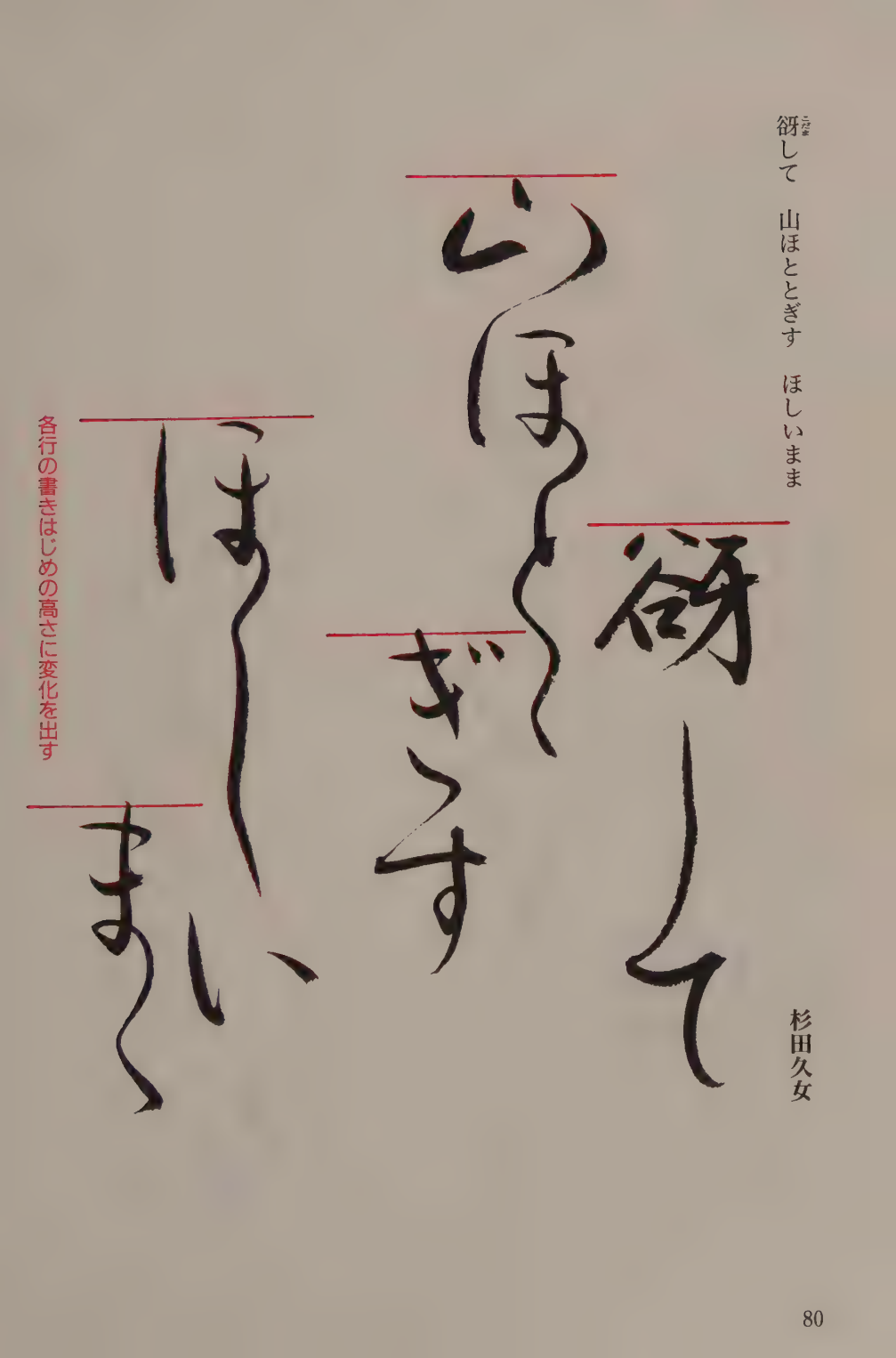
書く時は、紙を前にして、まず構成を考え、全体の線の流れに注意しながら、一気に仕上げます。



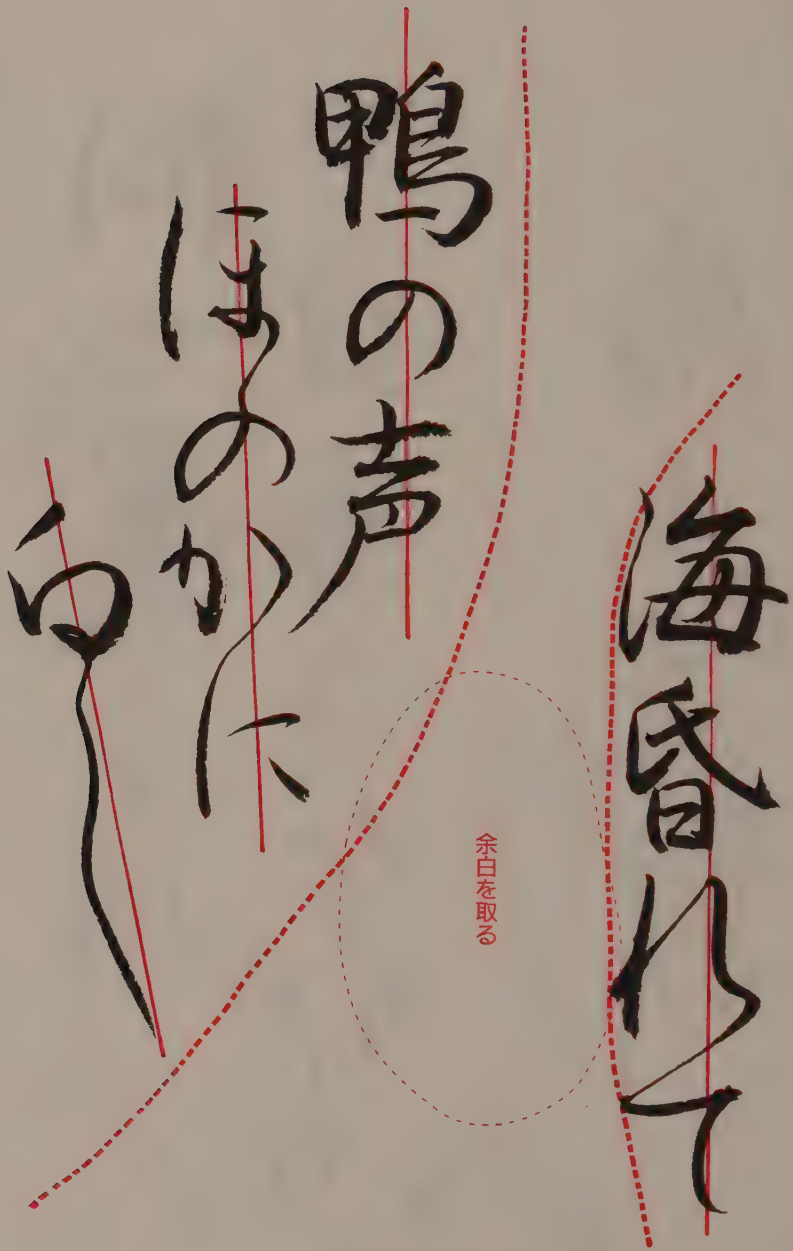
行を変えて変化を出す

ほろほろと　山吹ちるか　滝の音　　芭蕉

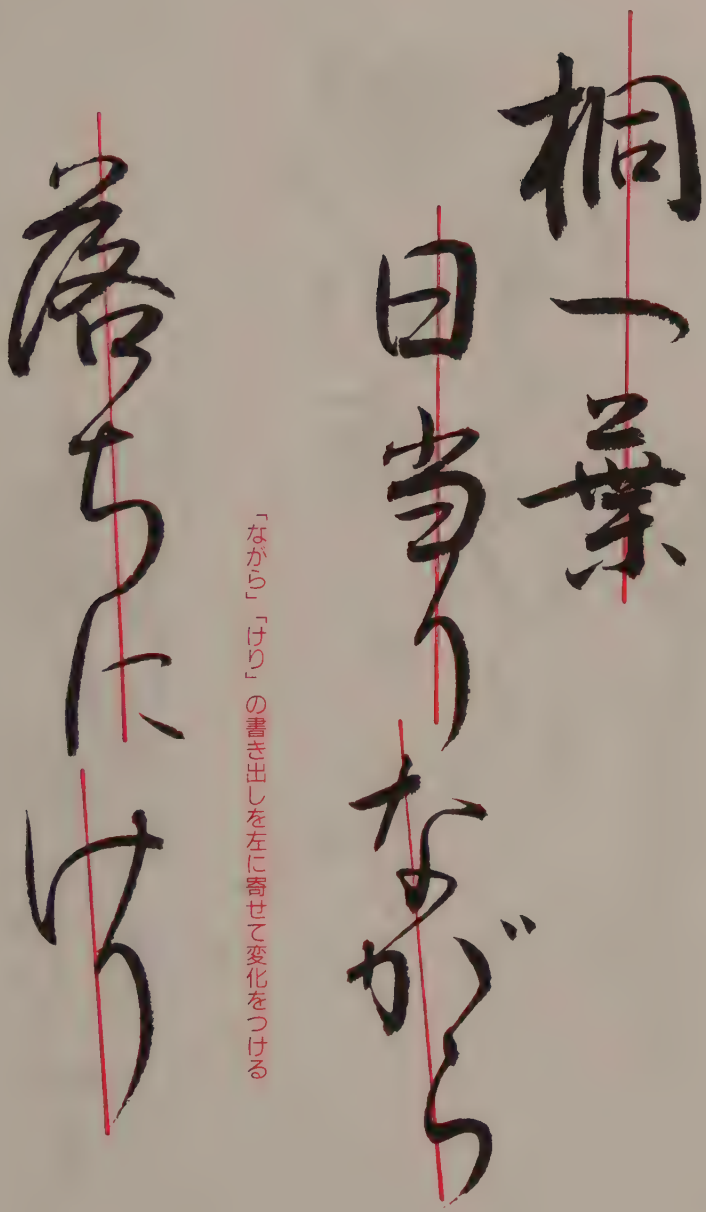



谺(こだま)して　山ほととぎす　ほしいまま
杉田久女
各行の書きはじめの高さに変化を出す

海昏れて　鴨の声　ほのかに白し　芭蕉

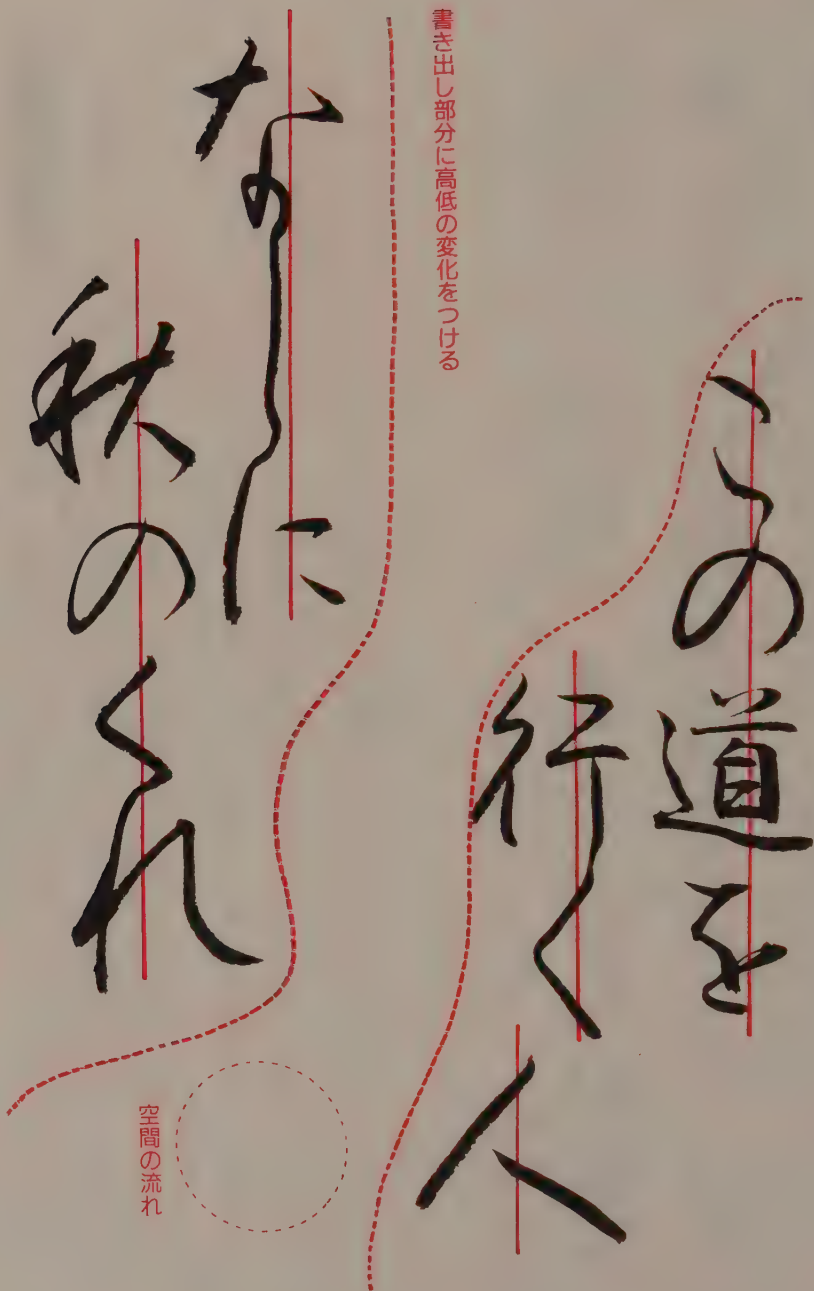


桐一葉　日当たりながら　落ちにけり　高浜虚子

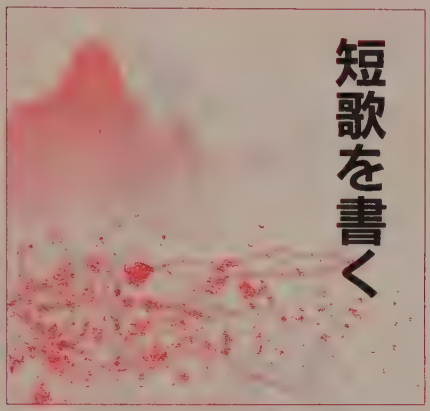


「ながら」「けり」の書き出しを左に寄せて変化をつける

この道を行く人なしに　秋のくれ

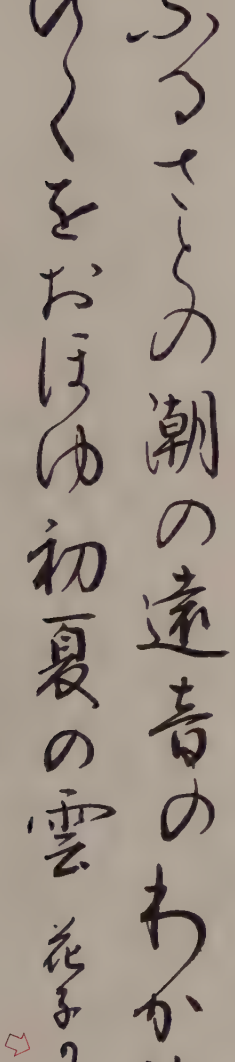


短歌を書く

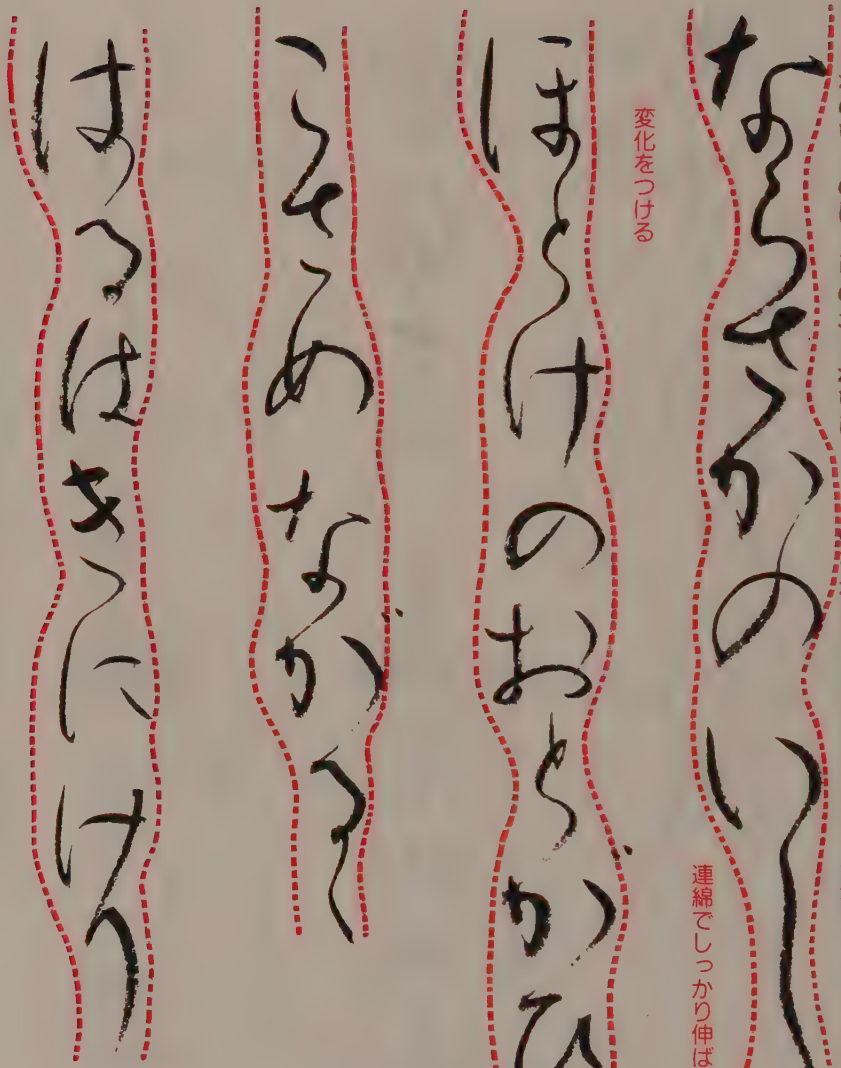


短歌は、和歌の形式の一つですが、一般的には、むしろ短歌＝和歌と思っている人が多いのではないでしょうか。万葉集をひもとくまでもなく、古くから私たち日本人は、短歌に親しんできました。ですから比較的新しい俳句と違って、短歌は、有名な歌人の名筆がたくさん残されています。もちろんその作品が、散らし書きであることは、いうまでもありません。

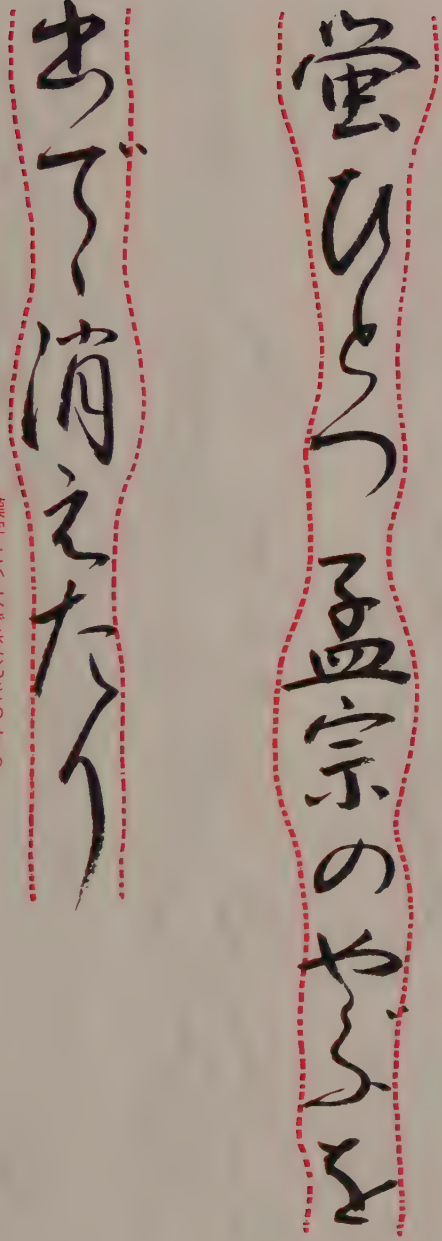
私たちも、自分が詠んだ歌を、散らし書きで書いてみましょう。そこまでは、まだ…。という人は、古今の名歌からいくらでも選べます。ここでは、若山牧水、北原白秋、与謝野晶子など著名な歌人の作品を選んで書いてみました。これは、と思う作品を、自由にのびのびと書いてみましょう。



さらさかのいしのほとけのおとがいに　こさめながるるはるはきにけり　会津八一



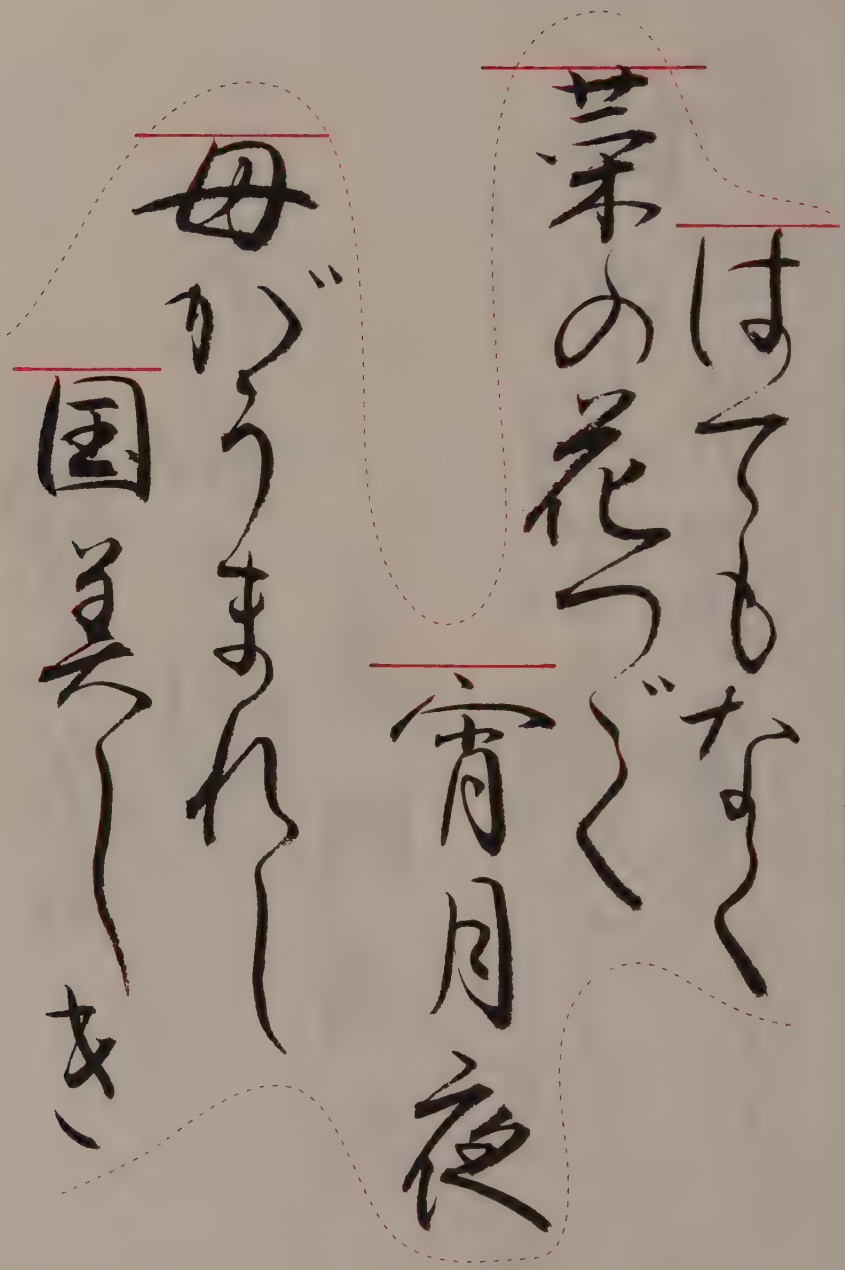
ひるながら幽かに光る　蛍ひとつ孟宗のやぶを出てて消えたり　北原白秋



漢字とかなで変化をつける

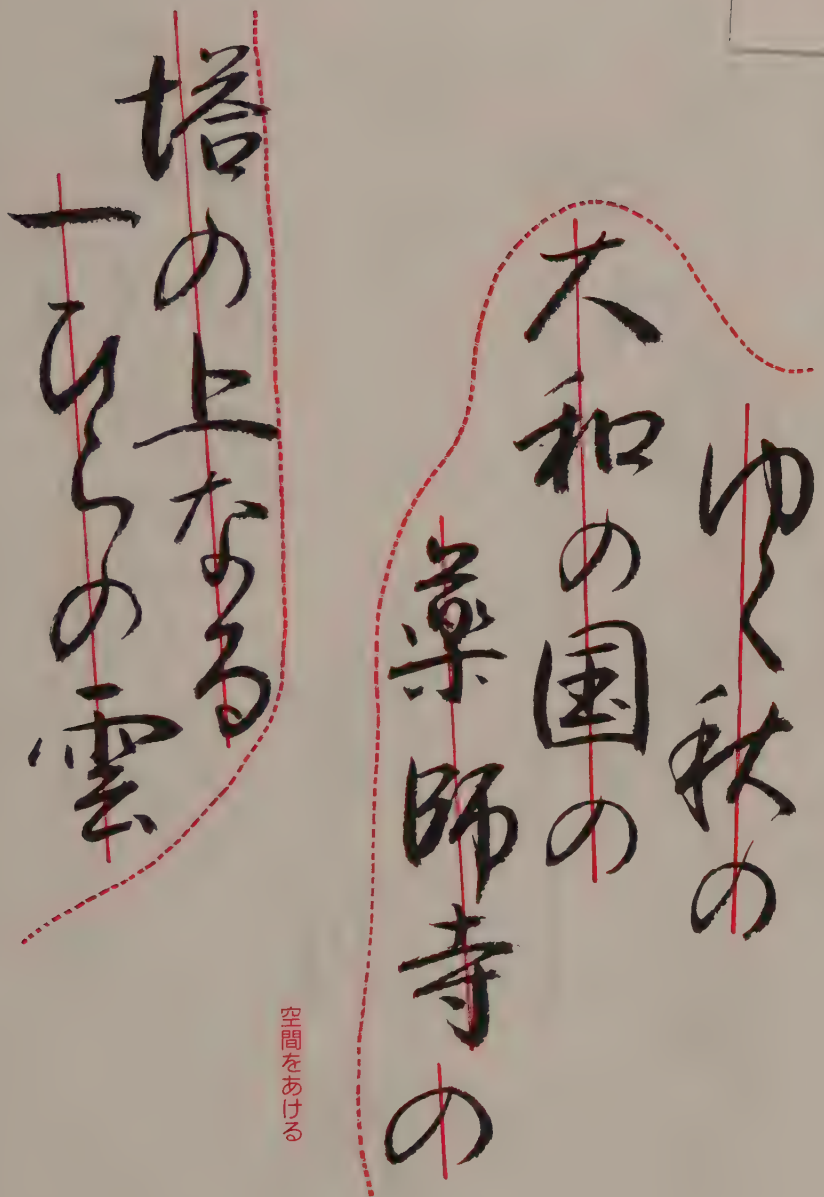
はてもなく菜の花つづく宵月夜　母がうまれし国美しき

与謝野晶子

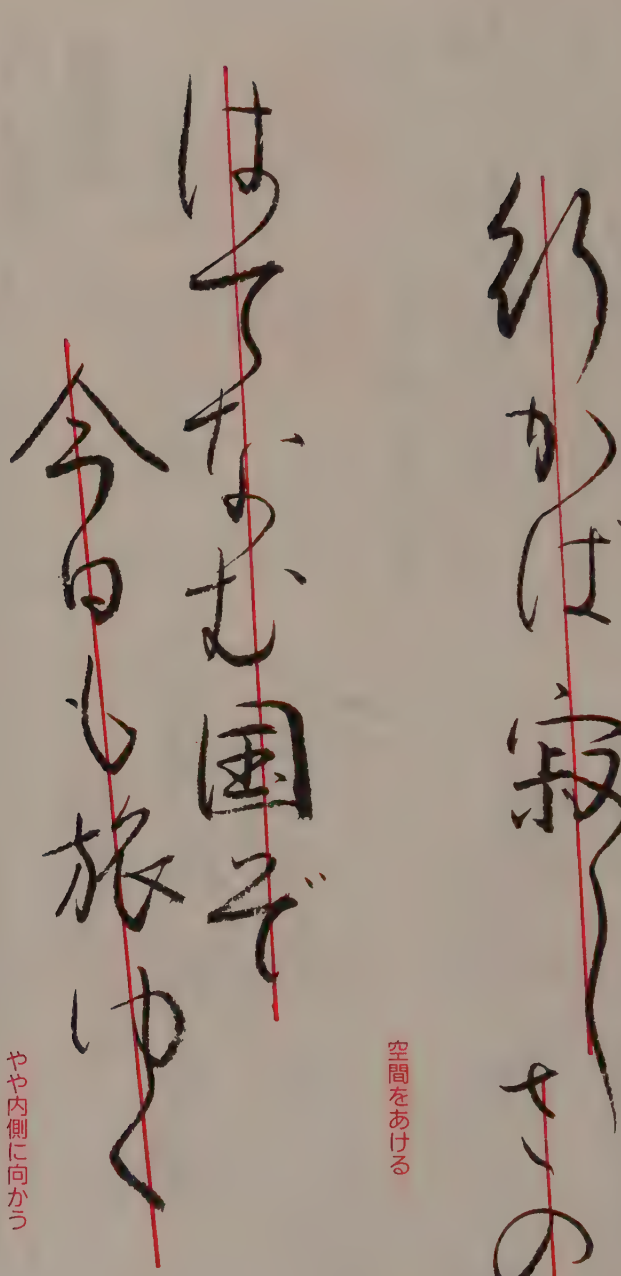


上・下の高さに変化をつけてまとめる

秋の大和の国の薬師寺の　塔の上なる一ひらの雲　佐々木信綱



幾山河越えさり行かば寂しさの　はてなむ国ぞ今日も旅ゆく　若山牧水

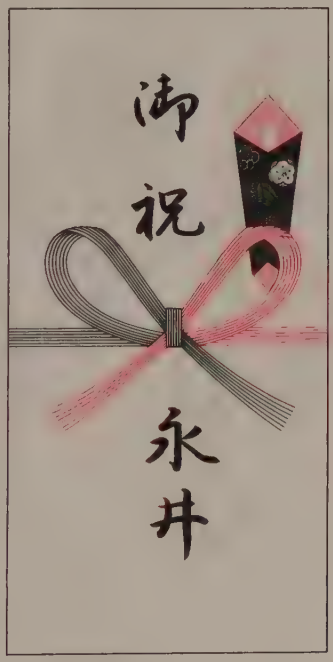


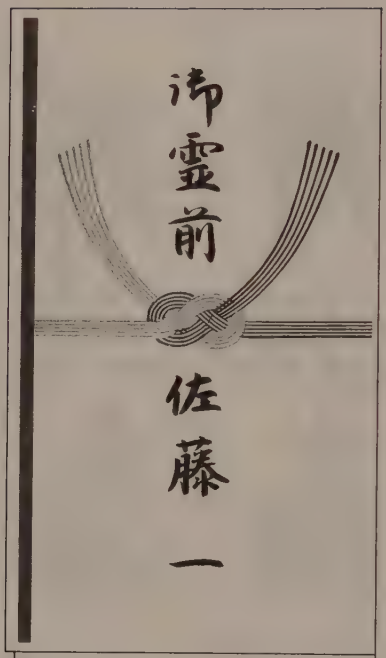
のし袋の表書き

慶弔の際の、のし袋の表書きは、現在でも毛筆で書くのが一般的です。中にはボールペンなどで書く人もいますが、これは例外中の例外といってよいでしょう。

年賀、お中元、お歳暮など季節の挨拶や、結婚祝い、入学祝い、卒業祝い、御礼、薄謝など、いろいろあるご祝儀の習慣は、丁重な心づかいを忘れないための、大事な生活表現です。

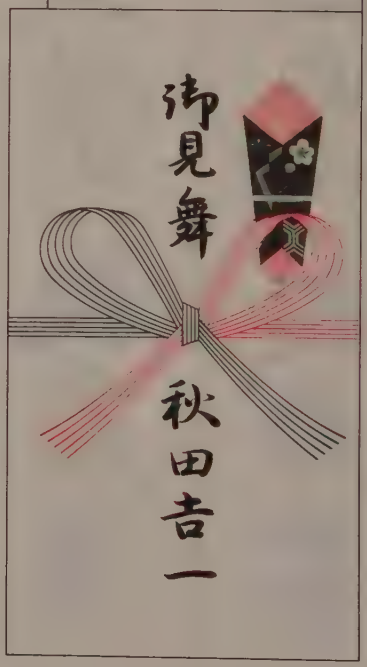
ですから表書きをする時は、読みやすい楷書か行書で、丁寧に書きます。墨色は、慶事の場合は濃くし、弔事の場合はやや薄めにします。




御霊前
佐藤一

御礼
吉田美代

祝御卒業
小森忠夫


御見舞
秋田吉一

寿志 御祝 お年玉

寿志 御祝 お年玉

御祝儀 祝入学 祝卒業

御祝儀 祝入学 祝卒業

御年賀　御中元　御歳暮

御年賀　御中元　御歳暮

御礼　粗品　薄謝

御礼　粗品　薄謝

寸志　御車代　祝出産

寸志　浩車代　祝出産

祝初節句　酒肴料　御見舞

祝初節句　酒肴料　御見舞

快気祝　御餞別　御仏前

快気祝　御餞別　御仏前

御霊前　御香典　玉串料

御霊前　御香典　玉串料

年賀状

毛筆の年賀状をいただくと、その人の人柄がしのばれます。気持ちを新たに、わざわざ筆をとって書いてくれたと思うからです。余白を考えて書くと、文字まできれいにみえます。

新春のおよろこびを
申し上げます
一月一日
港区六本木六ー五ー二
山浦みち子
〒106

窮屈にならないように余裕をもたせる

賀正　賀春　年賀

迎春　年始　頌春

献寿　新春　初春

新年　寿春　新禧

謹んで新年のお喜びを申しあげます

謹んで年頭のご挨拶を申しあげます

明けましておめでとうございます

新年おめでとうございます

暑中見舞

真夏日の、厚いさなかに届けられる暑中見舞を手にすると、心に涼風がそよいでくるように、爽やかです。ちょっとした夏の風物をしたためると、親近感が増し、楽しいものになります。

暑中御見舞
申し上げます

盛夏

神奈川県津久井郡相模湖町
与瀬七五六

山田和子

東京版「あさがお」・小島　万里子　画

住所が長いときは、名前の
上に多少かかってもよい

手紙文

冒頭語／結語

手紙には、冒頭語⇩時候の挨拶⇩用件⇩結びの挨拶⇩結語という形式があります。とかく形式というと、内容より見かけを大事にする、イメージが強いのですが、手紙の場合は、この形式があるために、どれだけ筆不精が救われているかしれません。形式が、手紙文のアクセントの役割をしてくれるからです。とくに冒頭語と結語は使用頻度の多い用語ですから、しっかりと練習しましょう。

謹啓　拝復　以上　追伸　前略　草々　御前　侍史

拝啓　敬具

時候の挨拶

季節の挨拶には、簡潔な表現の中に、情感豊かな、自然賛歌の心地よい言葉の響きが感じられます。ですから、冒頭語を省略し、いきなり時候の挨拶で、手紙を書きはじめる人もいます。むずかしい内容の手紙でも、その書きだしに季節の言葉が添えてあると、気持ちをやわらげてくれます。書き慣れておくと、便利です。

日ごとに春めいてまいりました

春たけなわの今日このごろ

さわやかな新緑の季節

うれしい梅雨の晴れ間

残暑ことのほかきびしく

野山もすっかり秋の風情

しだいに秋の気配が濃く

紅葉の美しい季節に

灯火親しむ秋

本年も残り少く

除夜の鐘をきゝながら

手紙文

手紙は、だらだら冗漫にならないよう、用件をはっきりと丁寧に書きましょう。書きだしから最後の一行まで、同じ調子で書くことが美しさの秘訣です。

花の便りがきかれるころとなりました

皆様にはおえ気にお過ごしのご様子

何よりとおよろこび申し上げます

久る様にはこの度めでたく志望の高校に

ご入学とのこと誠におめでとうございます

葉書文

葉書は、手紙と違って、文字を書くスペースが限られています。ですから、いかにバランスよく文字を揃えておさめるかが、重要なポイントになります。

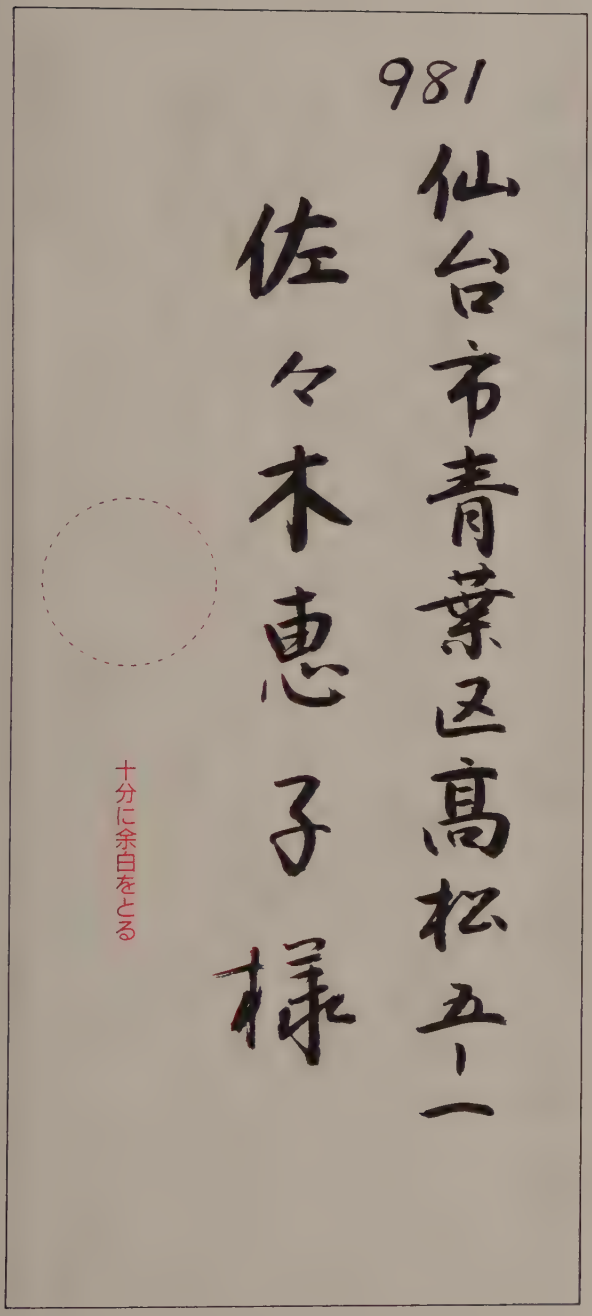
皆様にはその後おかわりなく
お過ごしでいらっしゃいますか　私共
この度表記のところに越してまい
りましたお序の折には是非お立
ち寄りくださいますよう
お待ち申しあげております

宛名書き

封筒　表書き

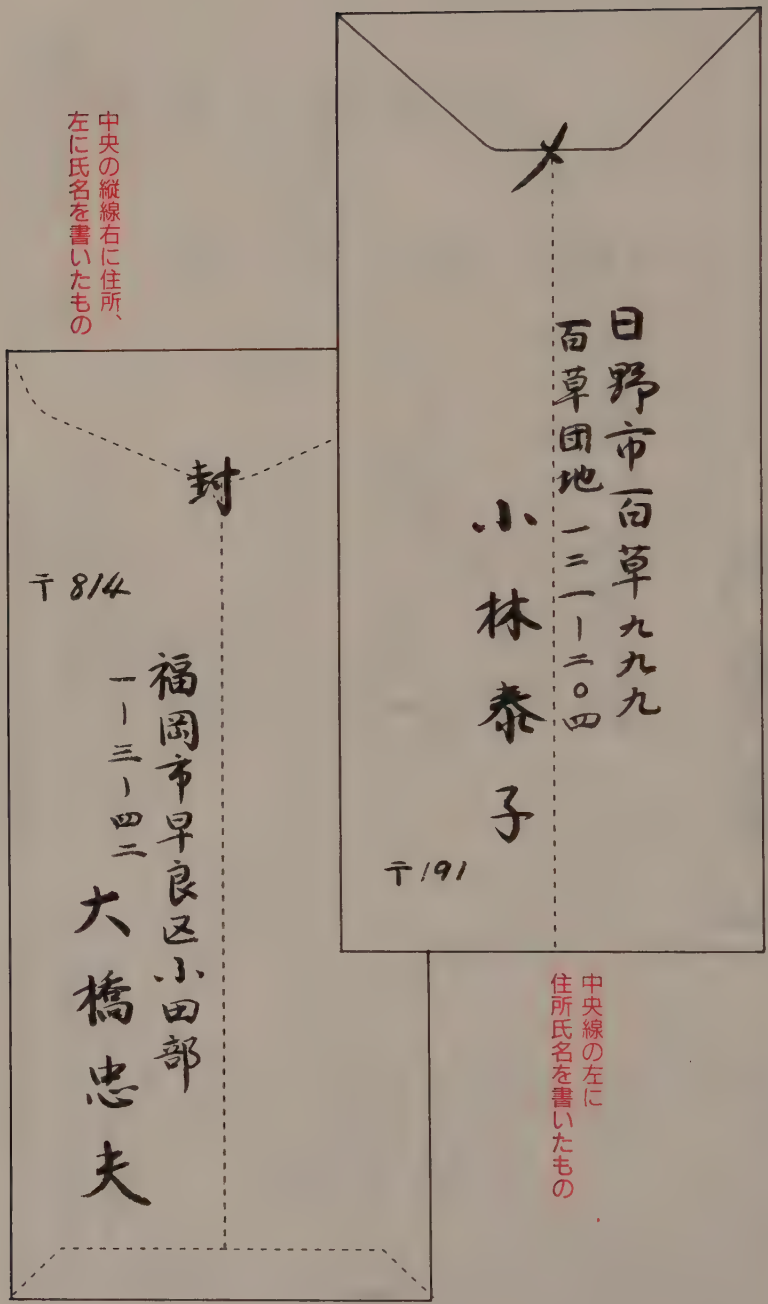
宛名書きは、達筆な字であるより、はっきりと分かりやすい字で書くことのほうが大切です。

長封筒の表書きは、右側に1行か2行で相手の住所を書きますが、2行目は1行目よりやや小さ目に書きます。そして氏名は、ほぼ中央に、やや大き目に書きますと、バランスがとれて美しくみえます。



封筒 裏書き

封筒の裏面には縦と横の張り合わせ目があります。縦横の線が交差するところは、〆、封、緘などの文字で封じます。住所氏名は、縦線の左側に書く場合と、右に住所、左に氏名を書く場合があります。



中央の縦線右に住所、左に氏名を書いたもの

中央線の左に住所氏名を書いたもの

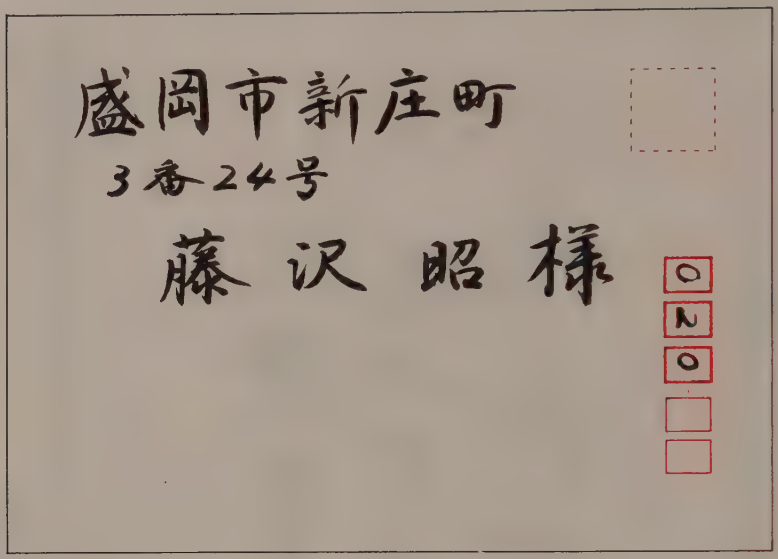
角封筒（縦）

縦に使う場合は、長封筒の表書きと同じです。裏書きは、上から張り合わせる側を右にして、張り口の線のヤマにかかるように、〆、封、緘を書いて封じます。慶事の場合は、寿の文字を書きます。

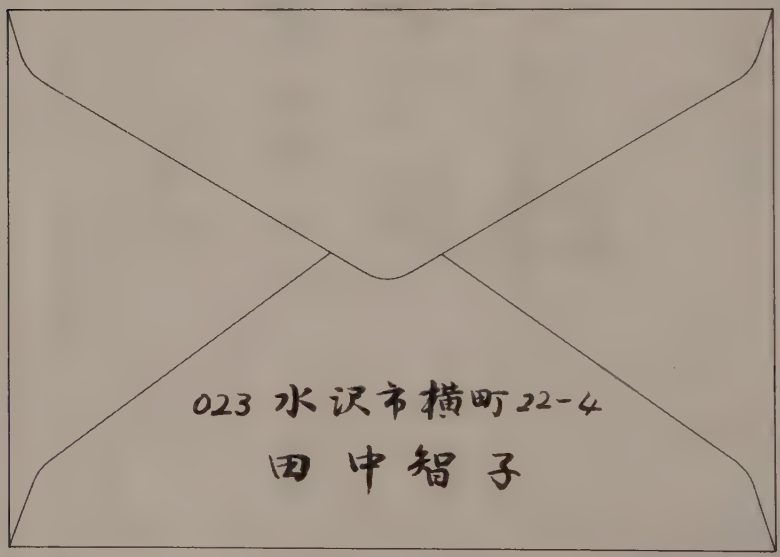
〒161
新宿区下落合
二ー四ー一〇
大森幸一

角封筒（横）

角封筒を横にして使う場合は、切手の位置を右上にして書きます。きれいにみせるコツは、文字の下の線をそろえ、住所氏名の各行の書きだしも、斜めにずらした直線上に並ぶようにして書くことです。



横で使う場合の裏書きでは、一般に、張り重ねたところに、〆や封を書いて封じたりしません。



自分の住所氏名は下になる三角形の中におさまる形で書きます。

葉書の宛名書き

葉書の宛名を書く場合も、長封筒の場合と同じです。氏名が中央にきて、住所はその右側に書きます。差出人の住所氏名は、左下に、相手の宛名書きより小さく、郵便番号枠の上あたりに書きます。

郵便はがき

064-□□

札幌市中央区
南二条二七丁目
米沢幸子様

余白にする

差出人の住所氏名は、表ではなく、裏に書く場合もあります。

相手の名前が二人になる場合は、氏名の書きだし位置が中央より、やや右になります。

郵便はがき

184-□□

小金井市貫井北町
一-一三-一五
秋田三郎先生
ご令室様

小諸市水谷一九
小林吉郎

越前和紙

番地などを書くと窮屈な場合は、氏名に少しかかる感じになってもかまいません（ただし差出人にかぎる）。

都道府県名

宛名書きで書く頻度の多い、都道府県名を楷書と行書で書いてみました。

漢字のみの組み合せですから、書く時は、画数の多少など、その文字がもつ特徴を考慮して、バランスをとるようにします。楷書は基本の点画を確実に書くようにし、行書はのびのびした運筆で線の美しさを生かしましょう。

都道
府県

北海道
岩手
青森
宮城

北海道
岩手
青森
宮城

秋田　福島　栃木　埼玉

秋田　福島　栃木　埼玉

山形　茨城　群馬　千葉

山形　茨城　群馬　千葉

東京　新潟　石川　山梨

東京　新潟　石川　山梨

神奈川　富山　福井　長野

神奈川　富山　福井　長野

岐阜　愛知　滋賀　大阪

岐阜　愛知　滋賀　大阪

静岡　三重　京都　奈良

静岡　三重　京都　奈良

和歌山	鳥取	岡山	山口
和歌山	鳥取	岡山	山口
兵庫	島根	広島	徳島
兵庫	島根	広島	徳島

香川　高知　佐賀　熊本

香川　高知　佐賀　熊本

愛媛　福岡　長崎　大分

愛媛　福岡　長崎　大分

宮崎

沖縄

宮崎

沖縄

鹿児島

鹿児島

市区町村名

市区町村名も、漢字の場合が圧倒的に多いわけですから、全体が揃った感じで、正確に書きましょう。よく自分の住所を適当に書いたりする人がいますが、これはとんでもないことです。中には読むのがむずかしい漢字や珍しい市町村名があります。相手の人が読めなくて、そっくりそのまま書くと、手紙が宙に浮いてしまいます。

市区

町村

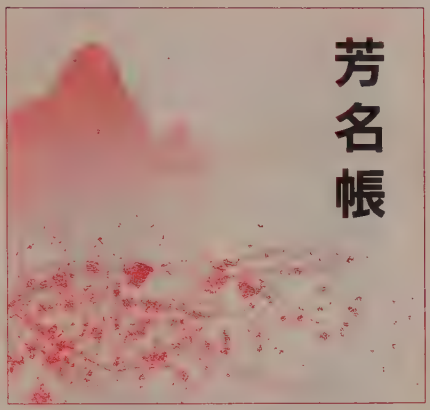
盛岡　仙台　若松　金沢

盛岡　仙台　若松　金沢

花巻　土浦　宿毛　渥美

花巻　土浦　宿毛　渥美

芳名帳



展覧会や展示会の受付で、芳名帳に署名を求められることがしばしばあります。字が下手だからと、断わってばかりもいられません。字の上手下手よりも、楷書か行書で丁寧に書いてあれば、それでいいのです。住所は一行または二行でおさめ、氏名は余白と字数を考えて、欄外にはみ出さないようバランスよく書くことが大切です。

郡大字
丁目番

井上杏子

札幌市北区北十条
五ー一三ー二六

加藤四郎

仙台市青葉区あけぼの町
一〇ー二七ー一八

岩手県岩手郡滝沢村
字野沢　七六ー五三二
小林吉郎

千葉市稲毛区轟町
五三三ノ六
松田恵子

中野区野方町一五ー七二
富士ハイツ一〇二
大井光男

八王子市めじろ台
三丁目十五番地六号
山本淑子

延岡市旭ヶ丘　池田一史
〇一-五三七-五七-一三九

保谷市新町三ノ五ノ二　田中信二

所沢市狭山ヶ丘　永井稔
一五一三二五一七三

熱海市網代一五五三ノ二　竹田希代

愛知県渥美郡渥美町七二　上野政夫

大阪市浪速区日本橋西三ー九三ー八　鈴木京子

京都市下京区矢田町八　山本宏

船橋市松ヶ丘三ノ五ノ二　松葉マンション五〇二　花木茂

著者　松　本　子　游
（本名　貞子）
大正13年（1924年）福岡県生まれ。
松本筑峯先生に師事。
東洋書道芸術学会理事。
松本書道会主幹。
東洋書芸展読売賞・審査員。
破体展会員。破体欧米展出品。中国焦山の「破体碑亭」内に建碑。破体個展２回。
著書「実用ペン字の基礎練習」。

美しい小筆字入門

不許複製
検印廃止

著　者……松　本　子　游
発行者……古明地　孝雄
印刷所……松浦印刷株式会社
製本所……ナショナル製本協同組合

発行所
日東書院
〒162　東京都新宿区軍笛町13番地
電話　03(3260)5560
振替・00150-8-37871

落丁・乱丁は本社でお取替えいたします
ISBN4-528-01062-3・C0071
Printed in Japan

花心子在永心

Blum Ou 謝秀雄

9/98

美しい小筆字入門

1997年5月1日　初版発行

著　者――松　本　子　游
発行者――古　明　地　孝　雄
印刷所――松浦印刷株式会社
製本所――ナショナル製本協同組合

発行所
日東書院
〒162 東京都新宿区簞笥町13番地
☎東京(03)3260-5560/振替・00150-8-37871

不許複製・検印廃止

ひとりで上達できる

美しい小筆字入門

ISBN4-528-01062-3

C0071 ¥640E

9784528010628

1920071006406

◆定価：本体640円＋税◆